

横浜国立大学
統合的海洋教育・研究センター
活動報告(Ⅲ)

平成 23 (2011) 年度春秋期—平成 24 (2012) 年度春秋期

副専攻プログラム「統合的海洋管理学Ⅰ・Ⅱ」

第 4 期 (Ⅱ) / 第 5 期 (Ⅰ・Ⅱ) / 第 6 期 (Ⅰ)

2013 年 3 月



横浜国立大学
統合的海洋教育・研究センター

横浜国立大学統合的海洋教育・研究センター
活動報告(Ⅲ)

平成 23 (2011) 年度春秋期—平成 24 (2012) 年度春秋期

副専攻プログラム「統合的海洋管理学Ⅰ・Ⅱ」

第 4 期 (Ⅱ ; 2011 春期) / 第 5 期 (Ⅰ ; 2011 秋期、Ⅱ ; 2012 春期) / 6 期 (Ⅰ ; 2012 秋期)

=== 目 次 ===

ごあいさつ : 横浜国立大学統合的海洋教育・研究センター長 池田 龍彦	1
1. 統合的海洋教育・研究センターの概要	2
1-1. 統合的海洋教育・研究センターの基本的構成	2
1-2. 統合的海洋教育・研究センター(略称:海センター)の組織	2
1-3. 副専攻プログラム「統合的海洋管理学」の活動経緯	4
1-4. 履修生・修了者数等の推移	5
2. 教育活動	6
2-1. オリエンテーション	6
2-2. コア科目「統合的海洋管理学Ⅰ、Ⅱ」	14
2-2-1. カリキュラム	14
(1) 第 4 期:Ⅱ:2011 春期	14
(2) 第 5 期:Ⅰ;2011 秋期、Ⅱ;2012 春期	15
(3) 第 6 期:Ⅰ;2012 秋期	17
2-2-2. 修了生(OB)講演会及びポスターセッション(2011、2012 年度)	18
(1) ポスターセッション開催の趣旨	
(2) 修了生(OB)講演会および第 4 期修了ポスターセッション	
(3) 修了生(OB)講演会および第 5 期修了ポスターセッション	
2-2-3. 修了生ネットワークの形成	
2-3. 関連科目一覧(公開講座とも)	23
2-4. 履修生アンケート結果	24
2-5. 学生の海外短期派遣事業報告	26
(1) 中長期海外派遣事業	
(2) 短期海外派遣および短期受け入れ事業	
3. 研究活動	28
3-1. シンポジウム	28
3-1-1. これまでのシンポジウム開催状況	28
3-1-2. 2011/2012 シンポジウムの報告	28
3-1-3. 同シンポジウムアンケートの結果	33
3-2. 学内セミナー「海事・海洋産業の動向セミナー」	40
3-2-1. 開催趣旨と開催要領	40
3-2-2. 開催概要	40
3-3. 外部機関との連携協定等	43

4. 海センター「e-ニュース」の配信	44
5. 活動日誌	46
6. 財務報告	49
7. 外部評価報告	50

〔付属資料〕

海センターの組織と教員一覧	60
海センター関係教員の活動実績	62

「海センター」の教育研究活動について



横浜国立大学は、2007年6月に部局横断的な文理融合型組織「統合的海洋教育・研究センター（海センター）」を設立し、大学院副専攻プログラム「統合的海洋管理学」による教育研究を推進しています。

本センターは、それまで各部局において、専門分野毎に行ってきた海洋に関するさまざまな分野の教育研究活動の連携強化を図るため、全学教育研究施設の一つとして位置付けられました。2007年7月に施行された「海洋基本法」及び2008年に策定された「海洋基本計画」の体制を大学教育から支えるという重要な意味をもつ活動を行っています。大学院教育実施に当たっては、国及び地方自治体、外部関係機関、民間企業、産業界等との産官学連携を図り、海洋に関する深い専門知識とともに海洋全般の問題を考察することのできる人材を育成し、産業社会や公共サービスへの多様な人材ニーズに応えることを目標にしています。

本学の海洋教育・研究の大きな特徴は、海に関わる理工学分野の研究者のみならず、社会科学分野でも海洋研究で高く評価される実績を持つ研究者を多数擁し、政策立案などに貢献していることが挙げられます。海センターは、2008年度から文部科学省特別経費、日本財団助成金及び学内予算により、海洋に関する多角的な視点からの教育研究環境の充実を図ってきましたが、その間継続して、日本財団助成事業として、本センターのプログラム履修生を海外の大学・研究機関に短期派遣する事業を行い、アジア、ヨーロッパ及びアメリカ大陸の各大学において滞在型の共同研究を実施し、成果を挙げています。

また、国内関係機関との連携体制強化については、海センター設立前からの（独）海上技術安全研究所、（独）港湾空港技術研究所に加えて、海センター創設後も、（社）海洋産業研究会、（独）海洋研究開発機構及び（独）水産総合研究センターとの間で包括的連携協定を締結し、これらを通じて、海洋分野における研究交流、人材育成を積極的に進めています。海センターは設立後5年を経過し、次の5年間は大学院副専攻プログラムの更なる充実と、外部機関と共同した、学際研究プロジェクトを積極的に推進してまいります。

第二次海洋基本計画が新たに船出しようとしている現在、海センターが、わが国における海洋に関する教育研究の中核機関の一つとして機能し、国内外の関係大学・研究機関との共同研究を通じた実践的人材育成の推進母体として機能し、多くの質の高い海洋人材を世界に送り出すセンターになるよう鋭意努力したいと考えています。

本活動報告（Ⅲ）は、2011年度及び2012年度の2年間にわたる海センターの教育研究活動を取りまとめたものであります。海センターの活動に関するご要望やご意見がありましたら本センターまでお寄せください。今後とも皆様の温かいご支援とご協力をよろしくお願いいたします。

統合的海洋教育・研究センター長 池田龍彦

1. 統合的海洋教育・研究センターの概要

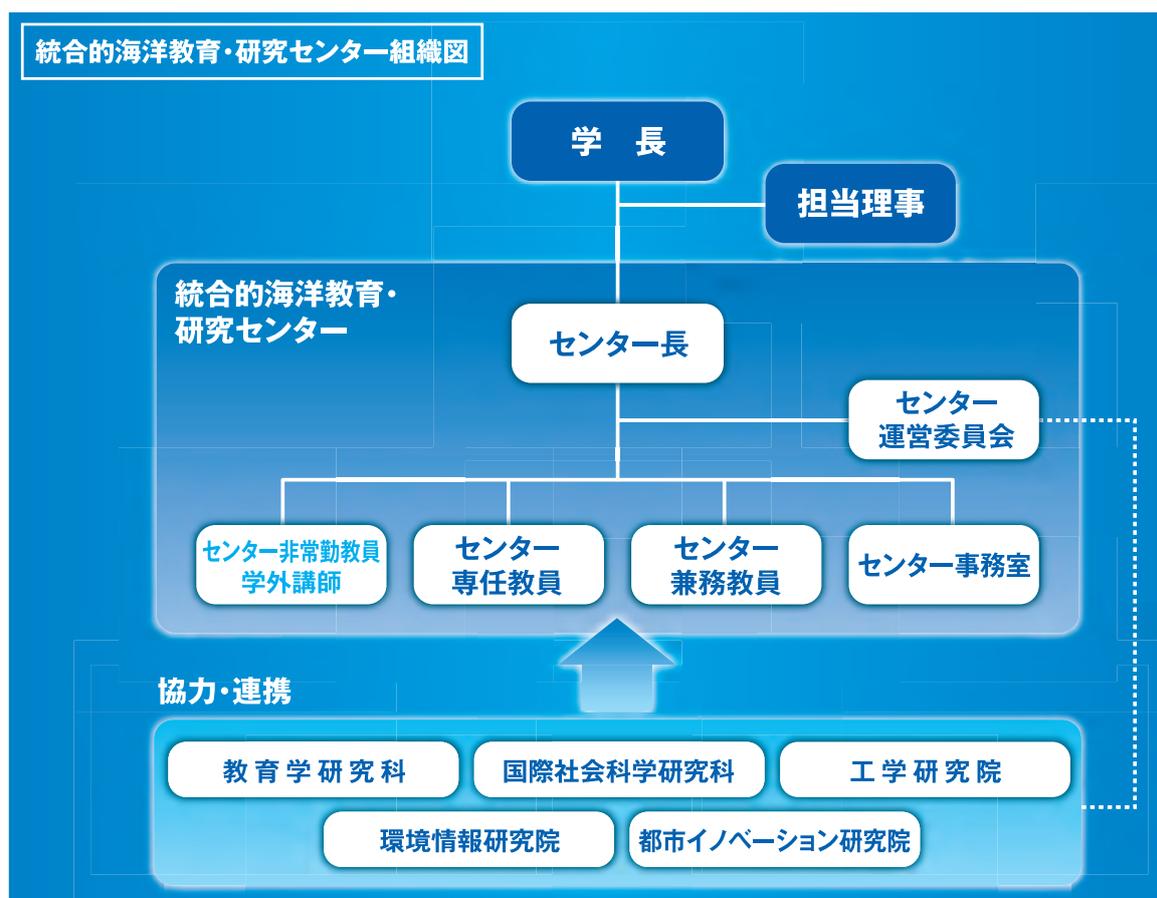
1-1. 統合的海洋教育・研究センターの基本的構成

横浜国立大学は、2007年6月に、部局横断的な文理融合型組織「統合的海洋教育・研究センター」(略称:海センター)を設立し、大学院副専攻プログラムとして、大学院レベルでの海洋に関する専門知識を深めるとともに、狭い専門領域にとらわれず俯瞰的かつ総合的に海洋の問題を考えることのできる人材育成に向けた教育・研究に取り組んでいる。海洋に関するこうした横断的な教育研究組織は、全国の大学でも数少ないユニークな取り組みといえる。

2007年制定の海洋基本法、その翌年に策定され5年ごとに見直しが見込まれている海洋基本計画の体制を大学教育から支えるという重要な意味をもつ活動で、その全体概要は次のとおりである。

1-2. 統合的海洋教育・研究センター(略称:海センター)の組織

「統合的海洋教育・研究センター」(略称:海センター)の組織は次のようで、センターの専任教員、5つの研究科・研究院にまたがる兼務教員、学外講師による講師陣で「統合的海洋管理プログラム」の教育研究を行っている。



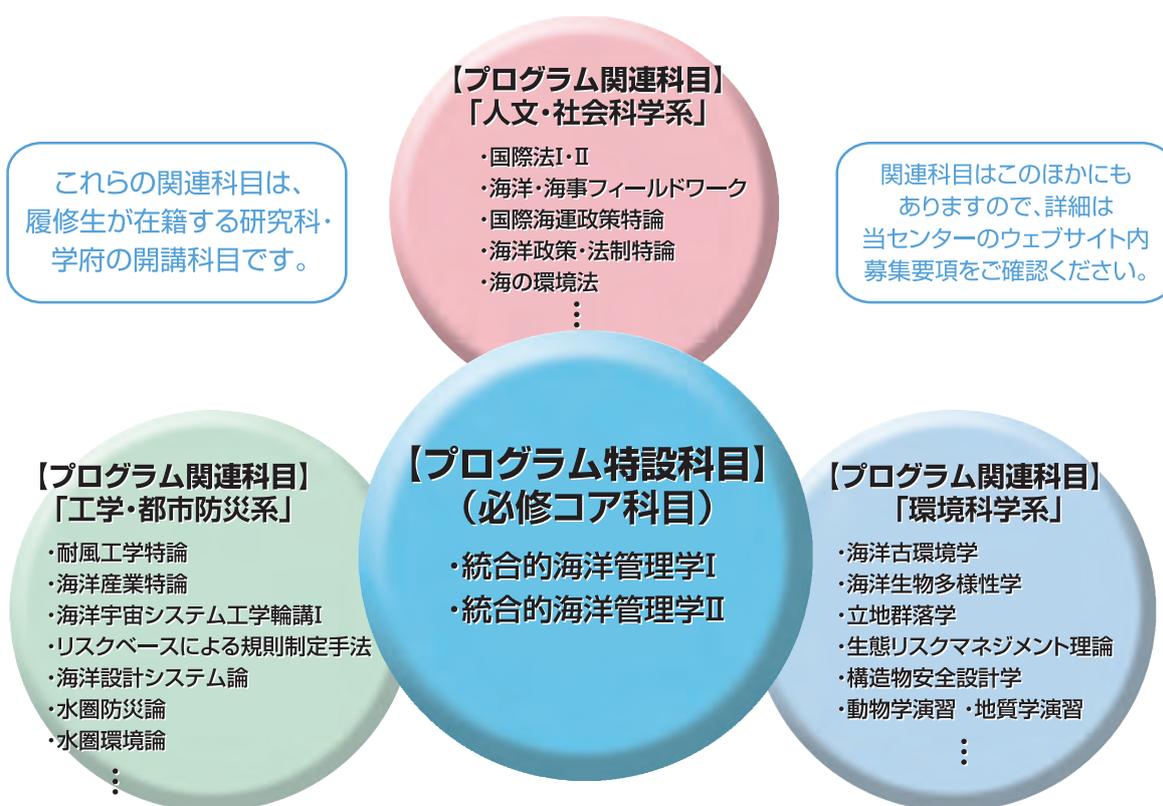
＜統合的海洋管理プログラム＞

本プログラムは、2007年10月(秋季)から総合的な大学院レベルでの副専攻プログラムとして実施しており、既に第6期目に入っている。「プログラム特設科目(必修コア科目)」として『統合的海洋管理学Ⅰ、Ⅱ』があり、それを取り巻くかたちで人文・社会科学系、工学・都市防災系、環境科学系の「プログラム関連科目」が約30ある。

本プログラム修了者には、学長名による副専攻『統合的海洋管理学修了証』が授与される。

＜統合的海洋管理プログラムの基本的構成＞

プログラム特設科目とプログラム関連科目



1-3. 副専攻プログラム「統合的海洋管理学」の活動経緯

統合的海洋管理プログラムは、副専攻必修のプログラム特設科目(必修コア科目)である「統合的海洋管理学Ⅰ、Ⅱ」を中心に、各研究科・学府でのプログラム関連科目からなるが、公開シンポジウム等を含む本プログラムの主な活動経緯を示すと次のとおりである。

「統合的海洋管理プログラム」関係活動経緯
 統合的海洋教育・研究センター(略称:海センター)、2007年6月設立

	2007(H19)年度		2008(H20)年度		2009(H21)年度		2010(H22)年度		2011(H23)年度		2012(H24)年度	
	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	
第1期	第1期 (2007後期+2008前期)											
	(特設科目) 統合的海洋 管理学Ⅰ	(特設科目) 統合的海洋 管理学Ⅱ	ポスター セッション (第1期修了証 授与:13名)									
	(関連科目)	(関連科目)										
第2期			第2期 (2008後期+2009前期)									
			(特設科目) 統合的海洋 管理学Ⅰ	(特設科目) 統合的海洋 管理学Ⅱ	ポスター セッション (第2期修了証 授与:16名)							
			(関連科目)	(関連科目)								
第3期					第3期 (2009後期+2010前期)							
					(特設科目) 統合的海洋 管理学Ⅰ	(特設科目) 統合的海洋 管理学Ⅱ	ポスター セッション (第3期修了証 授与:12名)					
					(関連科目)	(関連科目)						
第4期							第4期 (2010後期+2011前期)					
							(特設科目) 統合的海洋 管理学Ⅰ	(特設科目) 統合的海洋 管理学Ⅱ	ポスター セッション (第4期修了証 授与:17名)			
							(関連科目)	(関連科目)				
第5期									第5期 (2011後期+2012前期)			
									(特設科目) 統合的海洋 管理学Ⅱ	(特設科目) 統合的海洋 管理学Ⅰ	ポスター セッション (第4期修了証 授与:19名)	
									(関連科目)	(関連科目)		
公開シン ポジウム 等	11.3 海センター開 設記念シンポジウ ム (大学会館)〔第4回 ※注4、以下同〕		12.9 「東京湾を 知る、守る、利用 する」シンポジウ ム (開港記念会館) 〔第6回〕		11.14「海の神秘 を探る」シンポジ ウム(開港記念会 館)〔本学創立 60周年記念〕 〔第7回〕		11.29「環太平洋 の海洋問題」シ ンポジウム(よこ はま大学開港 塾・APEC横浜開 催関連第13回シ ンポジウム) 〔第8回〕		11.14「知られ ざる横浜の安 心・安全の最 前線—海上交 通管制・病害 虫侵入防止・ 浸水水害対策 —」(開港記念 会館)〔第9回〕		12.10「東京湾・相 模湾に おける津波災害と 沿岸防災」 (開港記念会館) 〔第10回〕	
	3.21 「統合的海洋 教育の将来」国際 シンポジウム(ハン シフィクホテル横浜) 〔第5回〕											

(注1)「統合的海洋管理学Ⅰ、Ⅱ」は、いずれも本学における公開講座として多くの学外者の聴講も受け入れています。

(注2)プログラム「特設科目」は本副専攻の必修で、プログラム「関連科目」は学内の各部署兼務教員により行われ、人文社会科学系、工学・都市防災系、環境科学系で構成されるカリキュラム。科目名等は別掲参照。一部は公開講座となっています。

(注3)学内対象シンポジウムとしては、「海事・海洋産業の動向セミナー」があります。別掲参照

(注4)「海センター」創設以前より、本学では、「横浜から海洋文化を育む」シンポジウム・シリーズを実施しています。

第1回 「新たな海の世界に向けて」(2006.7.5)／第2回 「東京湾の利用と環境を考える」(2006.11.6)／第3回 「対立と協調の海」(2007.4.13)

1-4. 「統合的海洋管理プログラム」履修生・修了者数等の推移

本プログラムの履修生、修了者およびその累計数の推移を下の表に示す。第1期から第3期の秋季すなわち平成21年度までは履修生の数は17-22名の間であったが、第3期春季つまり翌22年度からは27、20、35、24、29、29名と推移しており、年数が進むにしたがって定着し、増大傾向にある。修了者も累計77名となり、世に送り出した人材も多数となってきている。

なお、本プログラムは第2期から本学の公開講座の一つとしているが、その受講者数は毎年度、履修生の数とほぼ同じレベルとなっており、毎週の講義ではここ数年、履修生と公開講座聴講者を合わせて約50名が受講している。海洋問題が広く社会の関心を集め、本プログラムが多数の学外からの受講者を引き寄せてきており、「統合的海洋管理プログラム」が社会的にも大きな貢献を果たしてきている。

統合的海洋学 履修人数推移表
(公開講座聴講者含む)

その2

H25.3.18現在

開講年度	H19年度		H20年度		H21年度		H22年度		H23年度		H24年度		H25年度	
開講時期	H19.10-H20.7		H20.10-H21.7		H21.10-H22.7		H22.10-H23.7		H23.10-H24.7		H24.10-H25.7			
期	第1期		第2期		第3期		第4期		第5期		第6期			
開講時期	H19.10-H20.2	H20.4-H20.7	H20.10-H21.2	H21.4-H21.7	H21.10-H22.2	H22.4-H22.7	H22.10-H23.2	H23.4-H23.7	H23.10-H24.2	H24.4-H24.7	H24.10-H25.3	H25.4-H25.7		
統合的海洋管理学	I	II												
履修学生	【履修パターン】													
	1期I・II	21	21											
	1期II・2期I		1	1										
	2期I・II			16	16									
	2期II・3期I				1	1								
	3期I・II					16	13							
	3期II・4期I						14	10		1(3251)				
	4期I・II							10	10					
	4期II・5期I								25	22				
	5期I・II									1	1			
	5期II・6期I										28	21		
	6期I・6期II												8	
	履修学生計(A)	21	22	17	17	17	27	20	35	24	29	29		
	単位取得人数	13	13	17	17	16	27	20	34	22	29			
期	第1期		第2期		第3期		第4期		第5期		第6期			
修了人数(修了時期)	13 (H21.3)		15 (H22.3)				16 (H24.3)		19 (H25.3)		(未)			
			1 (H22.9)		12 (H23.3)		1 (H24.9)							
修了人数計(累計)	13		29		41		58		77					
公開講座聴講者(B)	—	—	15	18	20	22	28	17	27	22	25			
履修人数計(A+B)	21	22	32	35	37	49	48	52	51	51	54			

2. 教育活動

2-1. オリエンテーション

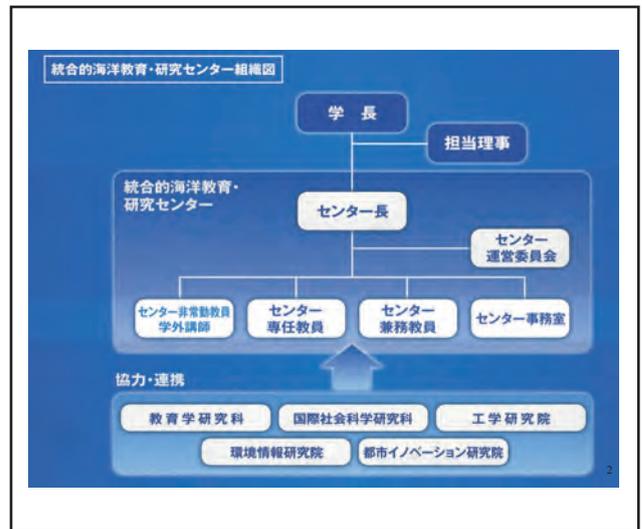
統合的海洋教育・研究センターでは、全学の大学院生を対象に、次のような内容で毎年春期および秋期の最初の週に、副専攻プログラム「統合的海洋管理学プログラム」のオリエンテーションを行っている。

直近の平成24年度秋期におけるオリエンテーションの際に用いたパワーポイント資料も示す。その後、第6期の募集要項・履修案内も収録しておく。

横浜国立大学
統合的海洋教育・研究センター(略称:海センター)
副専攻プログラム
「統合的海洋管理学」オリエンテーション
(平成24[2012]年度春期開講分)

◎日時:2012年4月9日(月) 12:15-12:45
◎場所:教育文化ホール 地下1階 中集会室

1. 池田龍彦センター長あいさつ
2. 副専攻「統合的海洋管理学」の概要紹介
3. 履修案内
4. 質疑応答



統合的海洋教育・研究センター教員

センター長 池田龍彦 (国際社会科学部研究科)	教育学研究科 教授 種田保穂 准教授 河海俊吾 准教授 津野 宏
特任教員 教授 中原裕幸 研究教員 コンベル ラドミール	国際社会科学部研究科 教授 荒木一郎 教授 池田龍彦 教授 加藤峰夫 教授 柳 紳秀
客員教員 客員教授 小澤宏臣 客員教授 末生 新 客員教授 古川恵太	大学院工学研究院 教授 荒井 誠 教授 川村森己 教授 鈴木和夫 教授 角 洋一 准教授 西 佳樹
環境情報研究院 教授 有馬 真 教授 伊藤公紀 教授 菊池知彦 教授 鈴木茂樹 教授 松田裕之 教授 間嶋隆一 教授 持田幸良 准教授 石川正弘 准教授 及川敬貴 准教授 白崎 美 准教授 村井基彦	都市イノベーション研究院 教授 勝地 弘 教授 佐々木洋 教授 谷 和夫 教授 榎 福哉 教授 山田 均 准教授 鈴木規之

外部講師: 国土交通省、海洋政策研究財団、商船三井、(独)石油天然ガス・金属鉱物資源機構、(独)海洋研究開発機構、(独)水産総合研究センター、海上自衛隊幹部学校、東京大学、中部大学、NPO 法人海辺つくり研究会



年度	実施月	派遣先	派遣先(国)	派遣先(機関)	派遣先(部署)	派遣先(氏名)	派遣先(職)	派遣先(学歴)
2009	10	デンマーク工科大学	デンマーク	環境学	環境学	佐藤 大輔	博士	博士
2009	10	デラウェア大学	米国	海洋学	海洋学	佐藤 大輔	博士	博士
2010	1	ブラバワ大学	タイ	海洋学	海洋学	佐藤 大輔	博士	博士
2010	1	サンパウロ大学	ブラジル	海洋学	海洋学	佐藤 大輔	博士	博士
2010	10	上海交通大学	中国	海洋学	海洋学	佐藤 大輔	博士	博士
2010	11	DHI デンマーク水産研究所	デンマーク	水産学	水産学	佐藤 大輔	博士	博士
2011	1	セント・アンドルーズ大学	英国	海洋学	海洋学	佐藤 大輔	博士	博士
2011	1	南太平洋大学	フィジー	海洋学	海洋学	佐藤 大輔	博士	博士
2011	9	国立台湾大学	台湾	海洋学	海洋学	佐藤 大輔	博士	博士
2011	9	バンドン工科大学	インドネシア	海洋学	海洋学	佐藤 大輔	博士	博士
2011	9	クィーンズランド大学	オーストラリア	海洋学	海洋学	佐藤 大輔	博士	博士
2012	2	アリヴァッシュ・コロビア大学	カナダ	海洋学	海洋学	佐藤 大輔	博士	博士
2012	3	ワシントン大学	アメリカ	海洋学	海洋学	佐藤 大輔	博士	博士

学生海外派遣事業の実績(2009-2012、計12人)

1. デンマーク工科大学(デンマーク) 2009.10.04 - 2010.1.12
2. デラウェア大学(米国) 2009.10.01 - 2009.12.27
3. ブラバワ大学(タイ) 2010.1.4 - 2010.1.18
4. サンパウロ大学(ブラジル) 2010.1.18 - 2010.2.7
5. 上海交通大学(中国) 2010.10.20 - 2010.12.21
6. DHI デンマーク水産研究所(デンマーク) 2010.11.28 - 2010.12.25
7. セント・アンドルーズ大学(英国) 2011.1.4 - 2011.3.15
8. 南太平洋大学(フィジー) 2011.1.29 - 2011.2.28
9. 国立台湾大学(台湾) 2011.9.5-2012.2.10
10. バンドン工科大学(インドネシア) 2011.9.20-2011.11.6
11. クィーンズランド大学(オーストラリア) 2011.9.27-2011.12.5
12. アリヴァッシュ・コロビア大学(カナダ)・ワシントン大学(アメリカ)他 2012.2.27- 2012.3.11.



「統合的的海洋管理学」修了証



修了生の主な進路(第1期-第4期)

- | | | |
|----------------------------------|--------------|-------------------|
| (独)水産総合研究センター
中央水産研究所/遠洋水産研究所 | 大成建設
清水建設 | JR東日本
JR西日本 |
| (独)海上技術安全研究所 | 五洋建設(2) | 日産自動車 |
| (独)国際協力機構 | 東亜建設工業 | トヨタ自動車 |
| (一財)日本海事協会 | 北陸電力 | 水King |
| 海上保安大学校 | 北海道ガス | リアルテック・セミコンダク |
| IHI(2) | コマツ | ター・ジャパン |
| IHIマリンユナイテッド | 日本工営 | 琉球新報社 |
| 川崎造船 | 三洋電機 | NPO Discover Blue |
| 三井造船(2) | 建設技術研究所 | 逗子市沼間小学校 |
| ユニバーサル造船 | 東京都(2) | |
| 今治造船 | 富山県 | 国土交通省 |
| 新日鉄エンジニアリング | 横浜市 | 中部地方整備局 |
| 川崎汽船 | 福山市 | 韓国海洋警察庁(2) |
| 飯野海運 | 日立ハイテクノロジーズ | |
| 三井海洋開発(2) | みずほ総合研究所 | |

副専攻プログラム 「統合的的海洋管理学」 を履修して、海を学ぼう！



横浜国立大学
統合的的海洋教育・研究センター(略称:海センター)
(大学院工学研究棟、建物番号:S7-1、7階)
Tel;045-339-3067、e-mail;kaiyo@ynu.ac.jp

平成 24 年度（第 6 期） 横浜国立大学
副専攻プログラム「統合的海洋管理学」 募集要項・履修案内

1. プログラムの目的と概要

2007 年 4 月に海洋基本法が成立しました。国の施策として、大学に対しても海洋に関する研究と人材育成が強く求められています。このような社会的要請に対応可能な大学は限られていますが、港湾都市として発達してきた歴史を持つ横浜を本拠とする本学は、海洋関連の教育研究に関して、造船、海洋開発、海岸工学、海洋資源、海洋環境、沿岸域管理、海上保安等の分野で内外から高い評価を得てきました。そして 2007 年 7 月、各部局により分断的に行われてきたこれらの活動を、部局横断的に実施するための文理融合型組織として、「統合的海洋教育・研究センター」（以下海センター）を設置し、同年 10 月より、総合的な大学院レベルでの副専攻教育プログラムである「統合的海洋管理プログラム」（以下本プログラム）を開始しました。

本プログラムは、科学的な理解と認識に基づく海洋の持続可能な開発・利用という理念と、海洋の国際秩序を先導し、国際協調を促進するという理念の下で、「海洋の統合的管理能力」の習得を目的とした修士課程の副専攻教育のためのものです。本プログラムを通じて、多様な分野の多様な専門能力と、海洋の統合管理に必要な視野の広さを兼ね備える人材の育成を目指します。

2. 応募要件

本プログラムはこのプログラムを履修する者（本プログラム履修者）を対象にしていますが、「統合的海洋管理学Ⅰ」と「統合的海洋管理学Ⅱ」の単位取得を希望する者の履修も認めています。

本プログラム履修者は、以下のすべての要件を満たす必要があります。

(1) 本プログラム履修者

- ① 本学大学院の研究科・学府に在籍する大学院生で、本プログラムの目的に関連した知識・手法の習得を目指している者（*「統合的海洋管理学Ⅱ」からの履修開始も可能です）
- ② 本学大学院の研究科・学府に在籍する大学院生で、指導教員の下承・推薦を得ている者

[注] 本プログラム履修者には、在籍する研究科・学府での修了要件となる授業科目の履修に加えて、プログラム特設科目（必修）の履修およびプログラム関連科目（選択）の履修と単位の取得が求められます。在籍する研究科・学府の指導教員と十分に相談した上で応募してください。

[注] 本プログラムへの応募および受講にあたっての応募手数料や受講料は必要ありません。

(2) 「統合的海洋管理学Ⅰ・Ⅱ」の単位取得希望者(本プログラムは単位として取得することも可能です)

- ① 上記と同じ
- ② 指導教員の推薦は不要。但し、海センターへ【様式 1】（履修登録申請書）の提出は必要

3. 募集人員

本プログラムの募集人員は、以下のとおりです。

博士課程前期・修士課程	40名程度
博士課程後期	若干名

4. 履修登録

履修を希望する大学院生は、在籍する研究科・学府の指導教員と十分に相談した上で、必要な書類を下記 URL からダウンロードして作成し、提出してください。なお、電子ファイルを利用できない場合は、センター事務室で配布している様式をご利用下さい。

(ダウンロード先：センターのホームページ (<http://www.cosie.ynu.ac.jp/>)へアクセスし、MENU 欄「教育プログラム履修案内・公開講座」をクリックしてください)

(1) 本プログラム履修希望者

- ① 履修登録申請書および指導教員承認書【様式1】
- ② 履修計画表【様式2】
- ③ 履修志望理由書(800字程度)【様式3】
- ④ 履修許可証【様式4】
- ⑤ 在籍する研究科・学府の履修時間割表(各自学務情報システムから印刷したもの)

(2) 「統合的海洋管理学Ⅰ・Ⅱ」の単位取得希望者

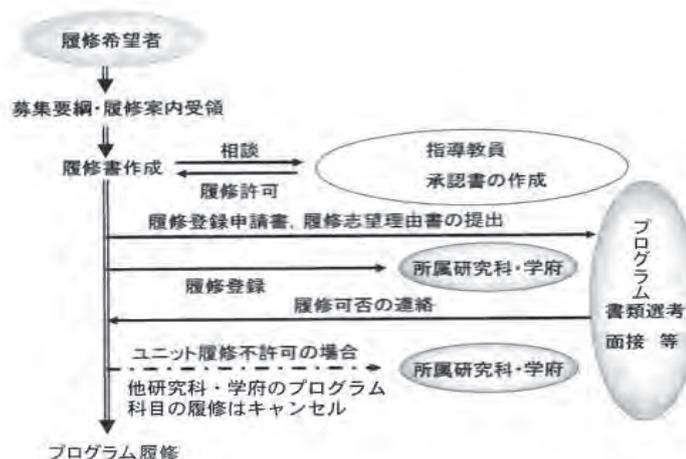
- ① 履修登録申請書【様式1】(* 指導教員承認書は記入不要)
- ② 在籍する研究科・学府の履修時間割表(各自学務情報システムから印刷したもの)

プログラム特設・関連科目の履修登録申請は、履修登録申請書【様式1】と履修計画表【様式2】で同時に行うものとします。履修登録は、本プログラム履修計画表への記載と、プログラム履修者が在籍する研究科・学府での履修登録の両方により行うこととします。

[注] 1. プログラム特設・関連科目には、プログラム履修者が在籍する研究科・学府にも、定められた期間に必ず履修登録を別途行ってください。

2. プログラム関連科目の単位は、プログラム履修者が在籍する研究科・学府の修了要件となる場合があります。詳細については、各研究科・学府の担当係に確認してください。

3. プログラム履修が許可にならなかった場合、応募者に対してその旨を通知します。



5. 応募期間

出願書類の受付は、下記に指定した期間内に、

①統一的海洋管理学講義前後、学務事務担当者へ提出、②応募者本人による窓口での提出、③電子メールの添付ファイルによる提出、により受け付けます。

応募期間：4月1日～4月30日、10月1日～10月31日の9時30分～16時30分

提出窓口：海センター事務室（大学院工学研究棟7階(建物番号：S7-1)…場所は、要項末尾のキャンパスマップ参照)

電話：045-339-3067 メールアドレス：kaiyo@ynu.ac.jp

ホームページ：http://www.cosie.ynu.ac.jp/

6. 選考

選考は、応募者の志望理由書等の書類審査、必要に応じて面接等により行います。書類審査は、志望理由書や、応募者の在籍する研究科・学府での履修計画をもとに行います。本プログラムに求められている文理融合の観点や、応募者各人の研究内容と統一的海洋管理の理念の関わりからの観点から、総合的に選考します。プログラムの履修を許可された者には、プログラム履修許可証【様式4】を6月中に発行します。許可証は写しを指導教員に渡し、原本は各自で保管してください。

なお、履修者への連絡は電子メールまたは本センターHPへの記事掲載で行います。レポート、成績、修了に関する重要なメールを送信するので、必ず各自の ynu メールにアクセスできるように願います。

7. プログラム授業科目

プログラム履修者は、所属する研究科・学府の授業科目に加えて、プログラム特設科目（必修）およびプログラム関連科目を履修しなければなりません。このプログラム特設科目「統一的海洋管理学」はそのⅠを秋学期に開講し、そのⅡを翌年春学期に開講します。

なお、プログラム授業科目一覧、プログラム特設科目シラバス及び日程表は【資料1～3】を参照してください。

(1) 博士課程前期・修士課程履修者：

○ プログラム特設科目（必修） 2科目4単位

「統一的海洋管理学Ⅰ」（秋学期・2単位）

「統一的海洋管理学Ⅱ」（春学期・2単位）

プログラム特設科目は、国際社会科学研究所において開講されています。当該特設科目は、プログラム履修者の在籍する研究科・学府の履修単位となる場合があります（各研究科・学府の担当係に確認してください）。

○ プログラム関連科目（選択） 3科目6単位以上

プログラム関連科目は、本プログラムで指定する各研究科・学府が開講します。当該関連科目もまた、プログラム履修者の在籍する研究科・学府の履修単位となる場合があります（各研究科・学府の担当係に確認してください）。なお、当該年度春学期に取得したプログラム関連科目の単位はプログラム修了要件として認めます。

[注] 【資料1】に示されている関連科目の詳細は、各開講研究科・学府に確認してください。

また、当初の履修計画表に変更がある場合には、新たに履修計画書を提出してください。

(2) 博士課程後期履修者：

○プログラム特設科目（必修） 2科目4単位

「統合的海洋管理学Ⅰ」（秋学期・2単位）

「統合的海洋管理学Ⅱ」（春学期・2単位）

前記（1）博士課程前期・修士課程履修者の場合と同様です。

○プログラム関連科目（選択） 3科目6単位以上

前記（1）博士課程前期・修士課程履修者の場合と同様です。なお、博士課程前期・修士課程で取得したプログラム関連科目の単位をプログラム修了要件として認めます。

8. プログラム特設科目の履修パターン

プログラム履修者は、原則として、第1学年度の秋学期に、プログラム特設科目「統合的海洋管理学Ⅰ」を履修し、第2学年度の春学期に、同「統合的海洋管理学Ⅱ」を履修します。また、プログラム履修者は第2学年度の秋学期に行われるポスターセッションで発表することが義務付けられます。

第6期の受講パターン

年度	2012年度		2013年度		
	春学期	秋学期	春学期	秋学期	
標準パターン		管理学Ⅰ	管理学Ⅱ		ポスターセッション
2013年度春学期から 受講開始の場合のパターン			管理学Ⅱ	管理学Ⅰ	ポスターセッション

9. 修了要件

プログラム修了の認定には、以下のすべての要件を満たす必要があります。

(1) 所属の研究科・学府の修了要件の充足

(2) 本プログラム特設・関連科目（上記「7. プログラム授業科目」を参照してください）の修得

(3) 総合討論への参加

(4) 修了年次におけるポスターセッションへの参加（毎年2月の実施を予定。内容は各自の修士・博士課程における研究等の内容と、それがどのように海洋と関連付けられるかを発表して頂きます）

なお、修士博士の研究等の内容は本プログラムの目的に関連するものであることを推奨しています。

10. プログラム修了申請

プログラム履修者は、本プログラムの修了要件を満たす見込みとなった時点で、海センター事務室に修了申請を行ってください【様式 5】。対象者には海センター事務室より、単位申請手続きと修了ポスターセッションに関するお知らせを、登録メールアドレスに配信します。

11. プログラム修了証

本プログラムの修了者に対し、『統合的海洋管理学修了証』を授与します。

当該プログラム修了証は、いわゆる資格・免許ではありませんが、本プログラムの修了者であることを証明するものであり、上記の目的に沿った人材育成教育を履修したことを証するものです。

12. プログラムの教務関係事務手続きおよびその他の問い合わせ先

海センター事務室(上記「5. 応募期間」をご参照下さい)

2-2. 特設科目(必修コア科目)「統合的海洋管理学Ⅰ、Ⅱ」

2-2-1. カリキュラム

本プログラムの特設科目(必修コア科目)「統合的海洋管理学Ⅰ、Ⅱ」で、平成23(2011)年度春秋期、平成24(2012)年度春秋期のカリキュラムは次のとおりである。

第4期-Ⅱ

統合的海洋管理学Ⅱ(平成23年度春学期開講)

講義室: 教育文化ホール B1 中集会室

部	講義回	H23年度計画(月曜)	講義タイトル	担 当 (敬称略)		4時限
				所 属(役職)	講師名	14:40-16:10
		4/11	オリエンテーション	昼休み		
V 海を管理する	1	4/11	海洋政策概論(2) —国連海洋法条約と 200海里問題—	横浜国大 統合的海洋教育・研究センター 特任教員(教授)	中原 裕幸	○
	2	4/18	日本の海洋・沿岸域 管理制度	横浜国大 統合的海洋教育・研究センター 客員教授	來生 新	5時限 (16:15-17:45)
	3	4/25	海域(領海、排他的 経済水域・大陸棚) の管理	海洋政策研究財団 常務理事	寺島 紘士	○
	4	5/9	★海事技術による環境 影響の軽減(海を守る)	横浜国大 工学研究院 教授	角 洋一	○
	5	5/16	海洋の安全保障	海上自衛隊 幹部学校 第一教官室	八木 直人	○
	6	5/23	絶海孤島の海洋管理 —無人島と海洋保護区	中部大学 国際関係学部 准教授	加々美 康彦	○
VI 海を守る	7	6/6	★海事活動の国際管理 (海を管理する)	国土交通省 海事局 安全基準課長	久保田 秀夫	○
	8	6/13	持続可能な水産業の姿	横浜国大 環境情報研究院 教授	松田 裕之	○
	9	6/20	海底の地盤環境と資源開発	横浜国大 都市イノベーション研究院 教授	谷 和夫	○
	10	6/27	深海探査技術の現状と将来	海洋研究開発機構(JAMSTEC) 海洋工学センター 海洋技術開発部部長	松浦 正己	○
	11	7/4	沿岸域や海岸の利用と 環境保全との現状	横浜国大 環境情報研究院 准教授	村井 基彦	○
	12	7/11	沿岸海域の汚濁と環境再生	横浜国大 都市イノベーション研究院 教授	佐々木 淳	○
	13	7/25	海洋環境の再生	NPO法人 海辺つくり研究会 理事	林 纈治	○
	14	8/1	海を守る海洋土木・建設	横浜国大 都市イノベーション研究院 准教授	鈴木 崇之	○
総合 討論	15	8/8	試験(総合討論)	中止		別途連絡

★ 都合によりカリキュラム区分と講義タイトル入れ替え。

【問合せ先】統合的海洋教育・研究センター事務室(email:kaiyo@ynu.ac.jp、TEL:045-339-3067)

第5期－I

統合的海洋管理学 I (平成23度秋学期開講)

講義室: 横浜国立大学 教育文化ホール中集会室(B1F) (原則として月曜日第4時限)

区分	講義回	講義日 (曜日)	講義タイトル	担当 (敬称略)		4時限 14:40- 16:10
				所属(役職)	講師名	
0 序論		H23 10/4(火)	オリエンテーション	昼休み (12:15-12:45)		
I 海を知る	1	10/4(火)	海洋政策概論(1) 海洋基本法・基本計画等	横浜国大 統合的海洋教育・研究センター 特任教員(教授)	中原 裕幸	○
	2	10/17(月)	港湾開発の歴史と将来 (* II海を利用する)	横浜国大 国際社会科学研究所 教授	池田 龍彦	○
	3	10/24(月)	海と地球の歴史	横浜国大 環境情報研究院 教授	間嶋 隆一	○
	4	10/31(月)	海と人間生活	横浜国大 統合的海洋教育・研究センター 客員教授 (放送大学 副学長)	來生 新	○
	5	11/7(月)	海洋の物理	横浜国大 環境情報研究院 教授	伊藤 公紀	○
	6	11/14(月)	海センター主催 シンポジウム (於:開港記念会館)	聴講及びレポート提出 (※切 別途指示)		
	7	11/21(月)	海と人間	横浜国大 環境情報研究院 教授	菊池 知彦	○
II 海を利用する	8	11/28(月)	海のレジャーと レクリエーション	横浜国大 国際社会科学研究所 教授	加藤 峰夫	○
	9	12/5(月)	海の化学 (* I海を知る)	横浜国大 教育学研究科 准教授	津野 宏	○
	10	12/12(月)	海底資源の利用と可能性	(独)石油天然ガス・金属鉱物資源機構 (JOGMEC) 金属資源技術部 深海底技術課長	岡本 信行	○
	11	12/19(月)	海底観測の現状と今後 ~JAMSTECの気候変動研究の 取り組みから~	(独)海洋研究開発機構(JAMSTEC) 長期観測技術グループ調査役	石原 靖久	○
	12	H.24 1/16(月)	海上輸送の歴史と将来	(株)商船三井 営業調査室 主任研究員	吉本 亜土	○
	13	1/23(月)	造船技術の歴史と将来	横浜国大 工学研究院 教授	荒井 誠	○
	14	1/30(月)	水産資源の利用と可能性	(独)水産総合研究センター 中央水産研究所 水産経済部漁業管理研究室 研究員	牧野 光琢	○
I 海を知る	15	2/6(月)	海を教える	東京大学 海洋アライアンス 特任准教授	福島 朋彦	○
		2/13(月)	第4期修了生による ポスターセッション (於:図書館情報ラウンジ)	見学及びレポート提出 (※切 別途指示)		

* 都合により、順番入れ替え

【問い合わせ先】 統合的海洋教育・研究センター メールアドレス:kaiyo@ynu.ac.jp Tel:045-339-3067

統合的海洋管理学Ⅱ（平成24年度春学期開講）

講義室：教育文化ホール(建物番号：No.S1-2) B1 中集会室

区分	講義回	講義日 (曜日)	講義タイトル	担 当 (敬称略)		講義時限等
				所 属 (役職)	講師名	
		4/9(月)	オリエンテーション	(池田、菊池、中原、及川、Compel)		昼休み (12:15-12:45)
Ⅲ 海を管理する	1	4/9(月)	海洋政策概論(2) — 国連海洋法条約と 200海里問題 —	横浜国大 統合的海洋教育・研究 センター特任教員(教授)	中原 裕幸	4時限目 (14:40-16:10)
	2	4/16(月)	管轄海域(領海・排他的 経済水域・大陸棚) の管理	海洋政策研究財団 常務理事	寺島 紘士	〃
	3	4/23(月)	沿岸域の減災と防災 (区分：海を守る)	横浜国大 都市イノベーション研究院 准教授	鈴木 崇之	〃
	4	5/7(月)	海事技術による環境 影響の軽減 (区分：海を守る)	横浜国大 工学研究院 教授	角 洋一	〃
	5	5/14(月)	海洋の安全保障	海上自衛隊 幹部学校 教育部	八木 直人	〃
	6	5/21(月)	絶海孤島の海洋管理	中部大学 国際関係学部 准教授	加々美 康彦	〃
Ⅳ 海を守る	7	5/28(月)	沿岸海域の汚濁と 環境再生	横浜国大 都市イノベーション研究院 教授	佐々木 淳	〃
	8	6/4(月)	持続可能な水産業の姿	横浜国大 環境情報研究院 教授	松田 裕之	〃
	9	6/11(月)	海底の地盤環境と 資源開発	横浜国大 都市イノベーション研究院 教授	谷 和夫	〃
	10	6/18(月)	深海探査技術の 現状と将来	海洋研究開発機構 海洋工学センター 海洋技術開発部 部長	松浦 正己	〃
	11	6/25(月)	沿岸域や海岸の利用 と環境保全との現状	横浜国大 環境情報研究院 准教授	村井 基彦	〃
	12	7/2(月)	海事活動の国際管理 (区分：海を管理する)	国土交通省 海事局 安全基準課長	平原 祐	〃
	13	7/9(月)	海洋環境の再生	NPO法人海辺づくり研究会理事・ 人間総合科学大学教授	林 纈治	〃
	14	7/17(火) (16(月)の 振替日)	日本の海洋・沿岸域 管理制度 (区分：海を管理する)	横浜国大 統合的海洋教育・研究センター 客員教授	來生 新	〃
総合 討論	15	7/23(月)	試験(総合討論)			別途連絡

【問合せ先】 統合的海洋教育・研究センター事務室 (email:kaiyo@ynu.ac.jp、TEL:045-339-3067)

統合的海洋管理学 I (平成24年度秋学期開講)

講義室:教育文化ホール(建物番号:No.S1-2) B1 中集会室

区分	講義 回	講義日 (曜日)	講義タイトル	担 当 (敬称略)		講義時限等
				所 属(役職)	講師名	
0 序 論		H24 10/1(月)	オリエンテーション	(池田、菊池、中原、及川、Compel)		昼休み (12:15-12:45)
I 海を 知る	1	10/ 1(月)	海洋政策概論(1) 海洋基本法・基本計画等	横浜国大 統合的海洋教育・研究センター 特任教員(教授)	中原 裕幸	4時限目 (14:40-16:10)
	2	10/15(月)	海と地球の歴史	横浜国大 環境情報研究院 教授	間嶋 隆一	〃
	3	10/22(月)	港湾開発の歴史と将来 (* II 海を利用する)	横浜国大 国際社会科学研究所 教授	池田 龍彦	〃
	4	10/29(月)	海と人間生活	横浜国大 統合的海洋教育・研究センター 客員教授 (放送大学 副学長)	來生 新	〃
	5	11/ 5(月)	海洋の物理	横浜国大 工学研究院 教授	伊藤 公紀	〃
II 海を 利用 する	6	11/12(月)	海の環境保全制度	横浜国大 国際社会科学研究所 教授	加藤 峰夫	〃
	7	11/19(月)	海底観測の現状と今後 ~JAMSTECの気候変動 研究の取り組みから~	(独)海洋研究開発機構(JAMSTEC) 海洋工学センター 長期観測技術グループ 調査役	石原 靖久	〃
	8	11/26(月)	海の化学(*I 海を知る)	横浜国大 教育学研究科 准教授	津野 宏	〃
	9	12/3(月)	海底資源の利用と可能性	(独)石油天然ガス・金属鉱物 資源機構(JOGMEC) 金属資源技術部 深海底技術課長	岡本 信行	〃
	10	12/10(月)	海センター主催 シンポジウム (於:開港記念会館)	聴講及びレポート提出 (〆切 別途指示)		
	11	12/17(月)	海上輸送の歴史と将来	(株)商船三井 営業調査室 主任研究員	吉本 亜土	〃
	12	H25 1/ 7(月)	造船技術の歴史と将来	横浜国大 工学研究院 教授	荒井 誠	〃
	13	1/21(月)	水産資源の利用と可能性	(独)水産総合研究センター 中央水産研究所 水産経済部漁業管理研究室 研究員	牧野 光琢	〃
	14	1/28(月)	海洋管理と人材育成	東京大学 海洋アライアンス 特任准教授	福島 朋彦	〃
	15	2/4(月)	海と人間(* I 海を知る)	横浜国大 環境情報研究院 教授	菊池 知彦	〃
	16	2/19(火)	第5期修了生による ポスターセッション	見学及びレポート提出 (〆切別途指示)		

* 都合により、順番入れ替え

【問合せ先】統合的海洋教育・研究センター事務局 (email:kaiyo@ynu.ac.jp, TEL:045-339-3067)

2-2-2. 修了生(OB)講演会および修了ポスターセッション(2011, 2012 年度)

(1)ポスターセッション開催の趣旨

ポスターセッションは、履修生の修士および博士論文の研究内容を発表する報告会である。本副専攻プログラムを修了するに当たって、このポスターセッションでの発表は必須の条件となっており、その目的は履修生がそれぞれの研究成果をポスターにまとめ、教員ならびに他の履修者や関心を持って参加した一般の人々を対象に発表し、意見交換するものである。

2011～12 年度に実施された海外派遣プログラムの参加者も、各自の海外派遣の内容及び成果をポスターにまとめて発表した。発表者以外に、新規の「統合的海洋管理学Ⅰ」の履修生、海センター関連教員、公開講座の聴講生、その他一般市民等、いずれも約 70 名前後が参加した。ポスターでの発表内容について、さまざまな参加者からの質問や意見に逐一答えることで、発表者が自らの研究についての理解をより深め、プレゼンテーション能力を高めるといふ教育効果が大きかった。

また、2011 年度から新たな試みとして、履修生のポスター発表前の時間帯に、「修了生(OB)講演会」を開催することにし、本プログラム第 1～3 期修了生(OB)の方々のなかからそれぞれ 3 名ずつ講師に招き、現在の業務活動等について話題提供をしていただくこととしたが、履修生の進路検討にとっても、また、現在の海洋産業活動の一端を知る上でも、大変好評であった。

第1期～第5期修了生ポスターセッション等開催実績総括表

2013.2.20					
名称	第1期生 修了ポスターセッション	第2期生 修了ポスターセッション	第3期生 修了ポスターセッション	修了生(OB)講演会および 第4期生修了ポスターセッション	修了生(OB)講演会および 第5期生 修了ポスターセッション
開催日時	2009年2月23日(月) (16:00～17:00)	2010年2月22日(月) (16:00～17:00)	2011年2月21日(月) (15:30～16:30)	2012年2月13日(月) (15:30～18:00)	2013年2月19日(火) (14:00～17:00)
開催場所	附属中央図書館 1F 情報ラウンジ	附属中央図書館 1F 情報ラウンジ	附属中央図書館 1F 情報ラウンジ	第一食堂内「れんが館」 (特設コーナー)	附属中央図書館 1F 情報ラウンジ メディアホール
ポスター等 発表件数	13件 (修了ポスターのみ)	19件 (修了ポスター 15件) (海外派遣報告 4件)	15件 (修了ポスター 13件) (海外派遣報告 2件)	25件 (修了ポスター20件) (海外派遣報告5件)	24件 (修了ポスター 20件) (海外派遣報告 4件)
懇親会 (開催場所・時間)	大学会館 3F「きやら亭」	第一食堂「れんが館」 (17:30～19:30)	第一食堂「れんが館」 (17:00～19:30)	第一食堂「れんが館」 (18:00～19:15)	大学会館 3F「PORTY」 (17:00～19:00)
参加者数	ポスターセッション 40名	ポスターセッション 55名 懇親会 30名	ポスターセッション40名 懇親会 24名	ポスターセッション 72名 懇親会 37名	ポスターセッション 65名 懇親会 30名
備考				<修了生(OB)講師> ① Discover Blue代表理事/横浜国立大学 成長戦略研究センターベンチャー・ビ ジネス部門研究員・水井涼太さん(1期 生、環境情報) ② 一般財団法人日本海事協会・佐竹 智 さん(2期生、環境情報) ③ 三井海洋開発㈱・渡邊 慎也さん(2期 生、環境情報)	<修了生(OB)講師> ① 五洋建設(株)・永守 学さん(1期 生、工学) ② (独)水産総合研究センター 国際 水産資源研究所・井嶋浩貴さん(2 期生、環境情報) ③ (独)国際協力機構(JICA)・中村 元哉さん(3期生、工学)

(2)2011年度修了生(OB)講演会および第4期修了ポスターセッション

○日 時: 2012年 2月13日(月) 16:00～19:30(設営は15:30～、片付けは19:15～)

○場 所: 第一食堂内「れんが館」(貸し切りコーナーにて)

○プログラム: 以下のとおり。

◎開会挨拶 池田龍彦・センター長

◎修了生(OB)による講演「現在携わっている海洋関連業務について」

(1) Discover Blue代表理事/横浜国立大学成長戦略研究センター

ベンチャー・ビジネス部門研究員.....水井 涼太さん(1期生、環境情報)

(2) 一般財団法人日本海事協会.....佐竹 智 さん(2期生、環境情報)

(3) 三井海洋開発㈱渡邊 慎也さん(2期生、環境情報)

◎ポスターセッション (第4期修了生各自、ポスター前にて立会い発表)

◎懇親会 (同会場)

第4期修了者研究テーマ一覧（ポスターセッション発表）

	氏名	所属	専攻	指導教員	研究テーマ
1	上野智裕	工学府	システム統合工学	平山次晴	前翼型水面効果翼船(WISES)の波浪中性能の研究
2	岡田尚樹	環境情報学府	環境システム学	村井基彦	錘の上下動による新形式横揺れ抑制システムの実用化に向けた研究
3	柿沼智則	工学府	システム統合工学	平山次晴	主尾翼を備えた船舶の潜航時および翼走時の姿勢制御に関する研究
4	鈴木基弘	環境情報学府	環境リスクマネジメント	松田裕之	滋賀県におけるカワウ個体群管理モデルの提案
5	高仁 環	教育学研究科	自然系教育	河瀨俊吾	北フィジー海盆（南西太平洋熱帯海域）における過去60万年間の浮遊性有孔虫群集と古海洋環境
6	羽田 絢	環境情報学府	環境システム学	村井基彦	内部流体と曲率を有するフレキシブルチューブの動的挙動に関する研究
7	金 泌珍 (留学生)	国際社会科学研究所	国際関係法	柁島洋美	海洋レジャー安全確保のための韓国と日本の政策比較・研究
8	井波 綾	工学府	物理情報工学	河野隆二	これからの海洋の管理と保全について
9	黒沼健太	工学府	社会空間システム学	鈴木崇之	断面二次水槽を用いた底面下圧力勾配に関する基礎的実験
10	小嶋 悠	工学府	社会空間システム学	鈴木崇之	浜崖侵食における低コスト対策法の提案
11	小西聡一	環境情報学府	環境システム学	上野誠也	システムダイナミクスによる造船海運業界の動向解析
12	富樫文弥	工学府	社会空間システム学	佐々木 淳	沿岸の防災環境の多角的検討
13	西村龍二	環境情報学府	環境システム学	村井基彦	風車の回転を考慮した SPAR 型洋上風力発電施設の波浪中での傾斜時における安全性の研究
14	松澤圭祐	工学府	社会空間システム学	佐々木 淳	東京湾における硫化物動態と青潮の数値解析
15	府川裕史	工学府	社会空間システム学	早野公敏	造粒固化処理土による岸壁の耐震性強化手法に関する検討
16	渡邊絵里子	環境情報学府	環境リスクマネジメント	松田裕之	絶滅危惧植物による生物多様性ホットスポット解析
17	EL-DESOUKY MOHAMED IBRAHIM	工学府	社会空間システム学	椿 龍哉	Concrete Structures Subjected to Environmental Actions



(写真 1, 2 : 2012 年 2 月 23 日のポスターセッションの様子) (於 : 横浜国立大学「れんが館」)

(3) 2012 年度: 修了生(OB)講演会および第 5 期修了ポスターセッション

○日時: 2 月 19 日(火) 14:00 より(時間割は下記参照)

○場所: 中央図書館1階 情報ラウンジ・メディアホール

○プログラム: 以下のとおり。

◎開会挨拶 池田龍彦・センター長

◎修了生(OB)による講演「現在携わっている海洋関連業務について」[メディアホール]

(1) 五洋建設(株)..... 永守 学さん(1期生、工学)

(2) (独)水産総合研究センター 国際水産資源研究所・・井嶋浩貴 さん(2期生、環境情報)

(3) (独)国際協力機構(JICA) 中村元哉さん(3期生、工学)

◎ポスターセッション [情報ラウンジ] (各自、発表ポスター前で閲覧者と討議)

◎懇親会

第 5 期修了者研究テーマ一覧 (ポスターセッション発表)

	氏名	所属	専攻	指導教員	研究テーマ
1	安食政貴	工学府	システム統合工学	川村恭己	KL 展開を用いた非正規分布に従うランダム場の発生手法の研究
2	遠藤泰平	環境情報学府	環境生命学	菊池知彦	相模湾西部真鶴半島沿岸域における有色溶存態有機物の時空間変動と植物プランクトンの関係
3	加藤龍一	環境情報学府	環境生命学	菊池知彦	相模湾西部沿岸域における珪藻 3 種の細胞体積の時空間変動
4	木曾兆志	工学府	システム統合工学	鈴木和夫	ランキンソース法による肥大船の船首部船型最適化に関する研究
5	小野寺 翠	環境情報学府	環境生命学	菊池知彦	相模湾西部沿岸域真鶴沖におけるクラゲ類の分類及び季節的消長に関する研究
6	鈴木良介	工学府	システム統合工学	荒井 誠	浮体を用いた LNG タンクのスロッシング防止に関する研究
7	関川由唯	工学府	システム統合工学	荒井 誠	船舶衝突後の残存強度に関する研究
8	田代佳子	工学府	システム統合工学	鈴木和夫	トリマラン胴体間の流力干渉に関する数値解析的研究

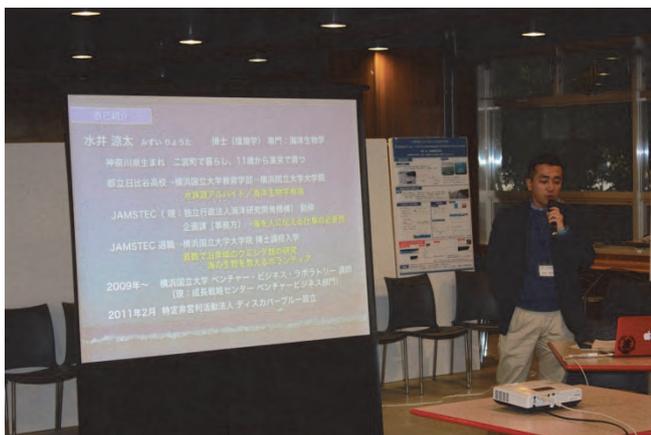
9	玉井風史	環境情報学府	環境生命学	間嶋隆一	北西太平洋産シンカイヒバリガイ属4種の貝殻微細構造
10	外処愛歩	環境情報学府	環境生命学	菊池知彦	相模湾西部真鶴港内の海底堆積物に含まれる人為的蛍光性有機物質の探索研究
11	中原駿太郎	工学府	システム統合工学	荒井 誠	船舶・海洋構造物の設計技術に関する研究
12	野中啓司	環境情報学府	環境システム学	村井基彦	係留索の挙動を考慮した係留浮体の非線形応答に関する研究
13	藤井恵利佳	環境情報学府	環境生命学	菊池知彦	親潮域・混合域におけるカイアシ類 2 種 <i>Eucalanus bungii</i> Giesbrecht, 1892 と <i>Eucalanus californicus</i> Johnson, 1938 の時空間分布と再生産
14	三上紗璃	国際社会科学 研究科	国際関係法	池田龍彦	日本の領土問題に関する一考察
15	森洋介	工学府	システム統合工学	西 佳樹	全機模型を用いた航空機の不時着水時波浪影響に関する研究
16	吉田祐樹	工学府	システム統合工学	于 強	デジタルエンジニアリングを用いた歩行支援装置用フレームの設計・製作
17	若林康太	工学府	システム統合工学	荒井 誠	実海域模型実験によるバラストフリー船海水同化性能の評価
18	渡邊充史	工学府	システム統合工学	西 佳樹	船尾ドックを用いた AUV の荒天時対応型揚収システムの開発研究
19	寒川清佳	環境情報学府	環境生命学	菊池知彦	オキアミ類の時空間分布と物質輸送～道東沖から三陸沖の親潮域から混合水域にかけて～



(写真 3, 4 : 2013 年 2 月 19 日のポスターセッションの様子) (於 : 横浜国立大学「情報ラウンジ」)

2-2-3 修了生ネットワークの形成

統合的海洋教育・研究センターでは、副専攻プログラム「統合的海洋管理学」の修了生を対象に、修了後の進路について調査を実施し、修了生と継続的に連絡を取れる体制を構築した。結果として一年に一回の頻度で、現在の履修生に就職先をアピールする場として修了生講演会を企画し、初期の修了生に後援を依頼した。この企画は現理修正の間で大変好評になり、継続的に実施する予定をしている。



(写真 1,2 : 2012 年 2 月 23 日の修了生講演会の様子) (於 : 横浜国立大学「れんが館」)



(写真 3,4 : 2013 年 2 月 19 日の修了生講演会の様子) (於 : 横浜国立大学「メディアホール」)
また修了生全員に呼びかけ、「統合的海洋管理学」の修了生の間に e- ニュース、メーリングリストや SNS など、修了生が自主的に連絡し合う持続的なネットワークの形成を支援していく。

修了生の主な進路(第1期—第5期)

(独)水産総合研究センター
中央水産研究所/遠洋水産研究所
(独)海上技術安全研究所(3)
(独)国際協力機構(2)
(一財)日本海事協会(2)
海上保安大学校
海上自衛隊
IHI(2)
IHIマリンユナイテッド
ジャパン マリンユナイテッド(株)
川崎造船
三井造船(3)
ユニバーサル造船
今治造船
新日鉄エンジニアリング
川崎汽船
飯野海運
三井海洋開発(2)

大成建設
清水建設
五洋建設(2)
東亜建設工業
北陸電力
北海道ガス
コマツ
日本工営
三洋電機
建設技術研究所
本田技研
(株) 横河レンタ・リース
商社、オルガノ(株)
旭硝子(株)
東京都(2)
富山県
横浜市
福山市、北九州市
日立ハイテクノロジーズ
みずほ総合研究所

JR東日本
JR西日本
日産自動車
トヨタ自動車(2)
水ing
リアルテック・セミコンダクター・ジャパン
琉球新報社
NPO Discover Blue
逗子市沼間小学校
京都市中学校
国土交通省
中部地方整備局
韓国海洋警察庁(2)

2-3. 関連科目一覧(公開講座とも)

第5期の関連科目一覧(公開講座とも)を示す。

第5期

〔「統合的海洋管理学」を「管理学」と略記〕

設置研究科・学府名	科目名
教育学研究科	動物学演習
	無機化学演習
	地質学演習
国際社会科学部研究科	国際法Ⅰ
	国際法Ⅱ
	国際海運政策特論
	海の環境法
	海洋・海事フィールドワーク(第6期秋学期開講)
	<i>海洋政策・法制特論*</i>
	水圏環境リテラシー
都市イノベーション学府	水圏防災論(春学期)
	水圏防災特論(秋学期)
	地圏特論
	水圏環境論
	水圏環境特論
	都市基盤安全設計学
	都市基盤安全設計特論
工学府	リスクベースによる規則制定手法
	海洋設計システム論
	海洋宇宙システム工学輪講Ⅰ
	海洋産業特論**
	海事流体力学
	数値海流体力学
	海洋エネルギー利用論
	耐風工学特論
	環境情報学府
海洋生物多様性学	
立地群落学	
海洋古環境学	
浮体運動の数理モデル論	
計算流体力学概論	
生態リスクマネジメント理論	
臨海実習***	

* 海センター特任教授による開講科目

** 同 客員教授による開講科目。

*** 臨海実習は神奈川県真鶴町にある理科教育実習施設で実施。同施設では相模湾の海洋生物学的の研究を行うとともに、大学院生・学部学生の修士論文・卒業論文研究を行う場となっている。また、初等中等教育の理科担当教員の研修や真鶴町を中心とした児童生徒の自然観察の場としても開放されている。

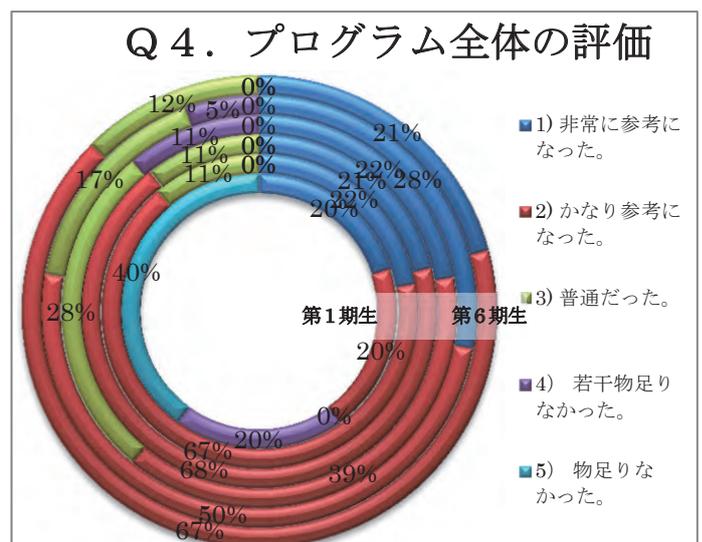
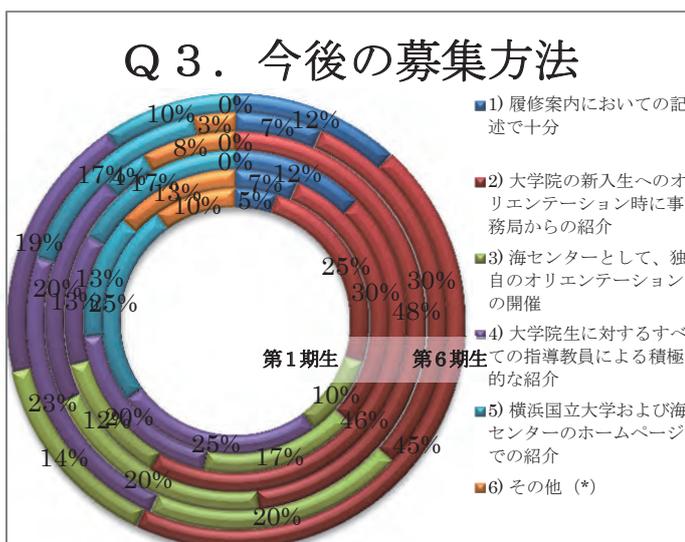
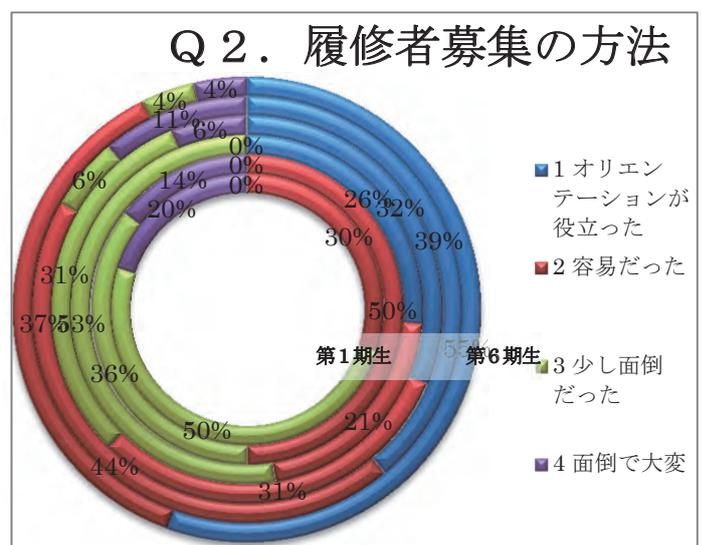
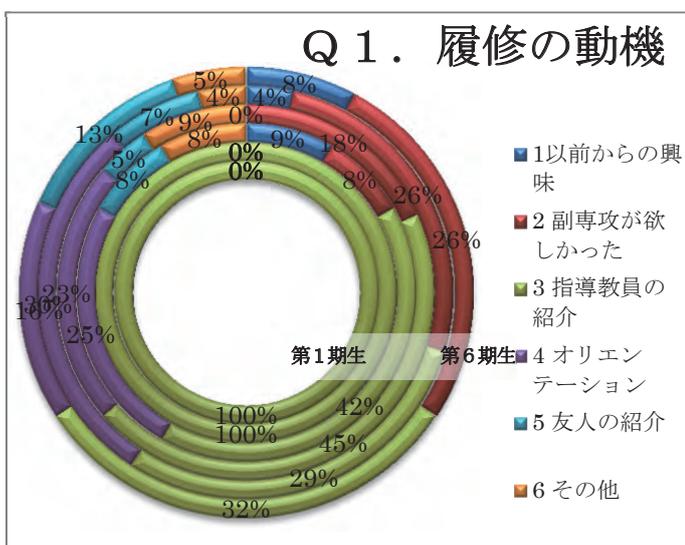
(注) 斜体で表記の「海洋政策・法制特論」は公開講座。

2-4. 履修生アンケート結果

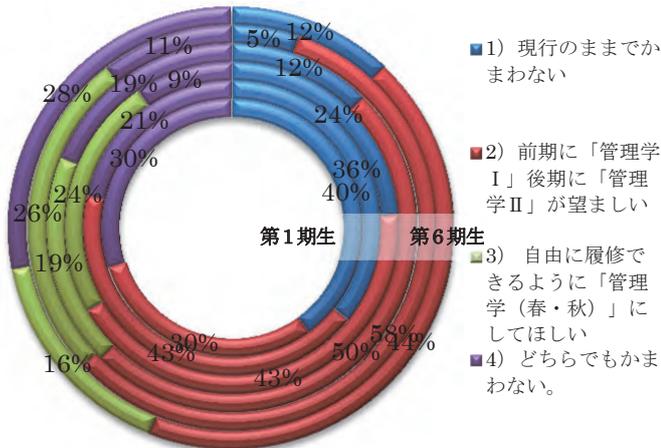
本アンケートは、本プログラムの第5期および第6期の履修生を対象にして、統合的海洋管理学プログラムについての感想、意見およびコメント等を収集したものである。その目的は、履修者の生の声にもとづいて学務委員会において次年度以降の取り組みに関して改良を加える際の参考にすることである。

ここでは第5期および第6期のアンケートの結果の概要を抜粋紹介する。なお、自由記入式設問に関する回答結果は割愛する。

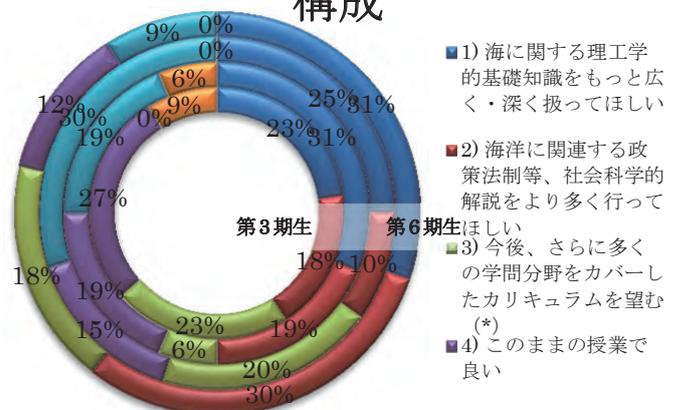
第5期生回答集計（回答19名／履修生29名）、第6期生回答集計（回答24名／履修生29名）



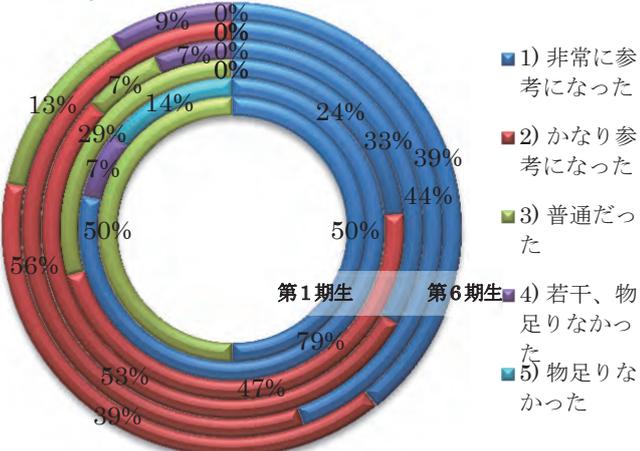
Q 5. プログラムの進め方



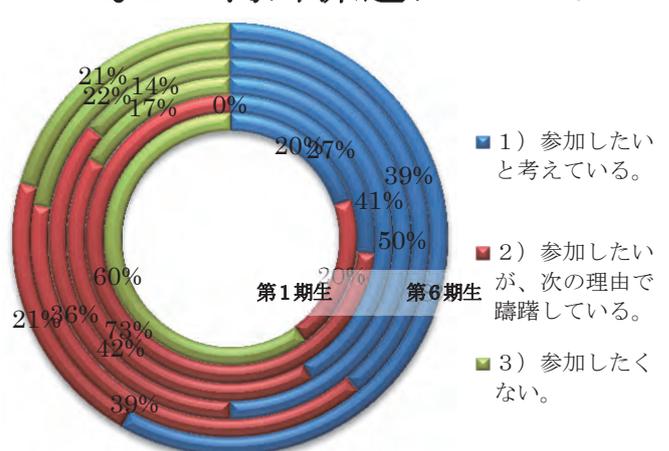
Q 6. プログラム全体の構成



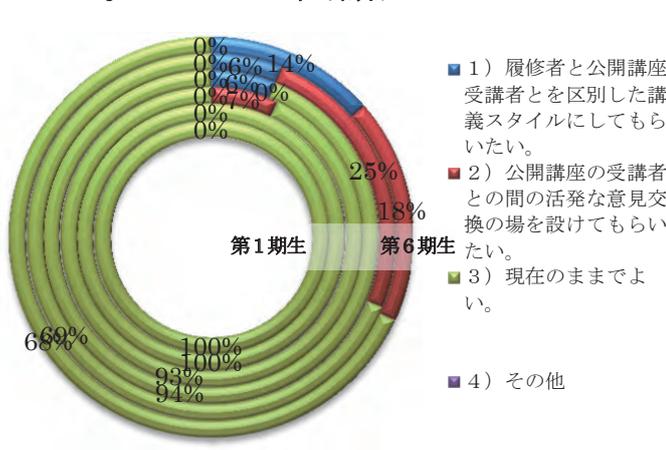
Q 8. ポスターセッション



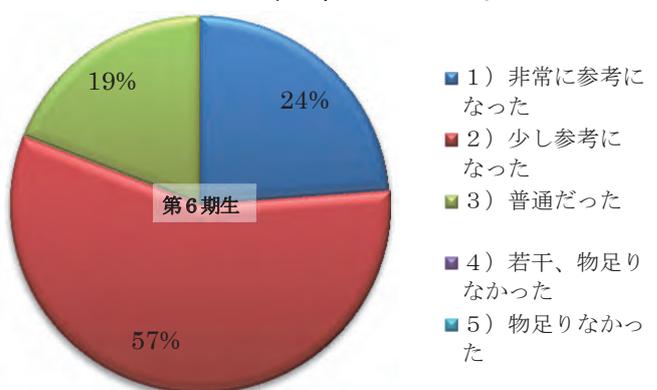
Q 9. 海外派遣について



Q 10. 公開講座について



Q 12. 修了生ネットワークについて



2-5. 学生の海外短期派遣事業報告

(1) 中長期海外派遣事業

海外派遣事業の概要：

本事業は、第4期統合的海洋管理学Ⅱ（2011年度春学期）から第6期統合的海洋管理学Ⅰ（2012年度秋学期）のプログラム履修生を対象とした海外短期派遣を目的とした事業である。2009年度から実施してきた海外派遣事業の実績を踏まえ、2011年度にも海外派遣の候補者を履修生から募集した。選抜された候補者と受入れ機関の間で連絡を取りながら、2011～2012年度の派遣事業を実施した。

選抜された履修生は、台湾、インドネシア、ブラジル、タイ、ペルー、オーストラリア、アメリカ合衆国での研究に関心を示したため、当センターが受け入れ大学および受け入れ機関と連絡をとり調整したうえで、海外派遣事業を実施した。

事業内容：

(1) 全般：以下のとおり。

- ・目的： 統合的海洋管理学プログラム履修生の海外短期派遣
- ・派遣時期： 2011年9月～2013年3月
- ・受け入れ地： 台湾、インドネシア、ブラジル、タイ、ペルー、オーストラリア、アメリカ合衆国
- ・派遣対象者： 第4期Ⅱの履修生35名、第5期Ⅰの履修生24名、第5期Ⅱの履修生29名、第6期の履修生29名を対象に募集し、応募、選抜された8名

(2) 内訳：以下のとおり。

<u>受入れ大学</u>	<u>派遣学生氏名</u>	<u>派遣期間</u>
9. 国立台湾大学（台湾）	関川 由唯	2011/9/5 - 2012/2/10
10. バンドン工科大学（インドネシア）	富樫 文弥	2011/9/20 - 2011/11/6
11. クイーンズランド大学（オーストラリア）	舩田 陽介	2011/9/27 - 2011/12/5
12. 公文書館・ワシントン大学・ブリティッシュコロンビア大学 （アメリカ合衆国・カナダ）	三上 沙璃	2012/2/27 - 2012/3/11
13. サンパウロ大学（ブラジル）	中原 駿太郎	2012/8/27 - 2012/12/2
14. ブーラパー大学（タイ）	井上 孝太	2013/2/6 - 2013/2/18
15. ペルー海洋研究所 IMARPE（ペルー）	柴田 泰宙	2013/2/7 - 2013/2/20
16. ワシントン大学、ハワイ大学（米国）	横田 伊佐男	2013/3/7 - 2013/3/21

目標の達成状況：

本プログラム履修生の短期海外派遣は、当センターとしての国際的連携を深める手段でもある。短期間ではありながら海外派遣生は、現地において充実した研究活動を実施し、受け入れ大学で研究成果を発表した。履修生は帰国後に研究成果についてポスター発表を行い、学術論文などさらなる成果を生み出している。現地では海洋に関する幅広い人的ネットワークを築くことができたとの報告がなされている。

2011～2012年度の8名の海外派遣の実施並びに帰国した7名のポスター発表、更に海外派遣生の学術論文投稿及び学会発表により、着実に成果を上げてきていると言える。



(図：2013年3月現在の中長期派遣先の様子)

(2) 短期海外派遣および短期受け入れ事業

この事業は、国際みなとまち大学リーグ (PUL) の国際ネットワークを実質化して海洋に関する国際的な教育活動を行うことを通じ、海洋問題を多面的な視点でとらえ、持続可能な社会の実現に貢献できる人材を国際的に育てようとするものである。統合的海洋教育・研究センター (COSIE) についての国際的認知度を高め、実践的学術の中心としての横浜国立大学の国際的評価につなげようとするものであり、日本発のユニークな国際交流としての大きな意義を有している。

2012年度に初めて実施したこのプログラムは海外派遣と海外受け入れの2つの部分から成り立っている。海外派遣としては、副先行プログラム「統合的海洋管理学」の履修生9名を2013年2月20日から同2月28日まで英国サザンプトン大学に派遣し、先方において海洋・海事に関する講義と実地見学を実施した。

海外受け入れとしては、COSIEにおける海洋教育の経験をPULを通じて世界に広めるため、PUL参加大学から優秀な留学生を集め、日本においてワークショップに参加してもらった。またこのプログラムでは、ワークショップ以外に最先端の海洋関連の研究および行政機関の見学・研修の機会も提供している。2012年8月26日から8月31日までに海外受け入れプログラムに参加した学生はPUL加盟の14校のうち6校(上海交通大学、釜慶大学校、仁川大学校、ホーチミン市工科大学、インド工科大学マドラス校、サザンプトン大学)5か国から16名参加し、COSIEで学ぶ日本人学生との相互交流を通じて、PULの活動の一層の充実化しCOSIEにおける教育の高度化を実現できた。



(写真：2012年8月27日の短期海外受け入れ事業の様子)

3. 研究活動

3-1. シンポジウム

3-1-1. これまでのシンポジウム開催状況

本学では、海センター創設以前の 2006 年より「横浜から海洋文化をはぐくむ」と題するシンポジウム・シリーズを以下のように開催してきた。

◎第 1 回:「新たな海の世界に向けて」(2006 年 7 月 5 日)

◎第 2 回:「東京湾の利用と環境を考える」(2006 年 11 月 6 日)

◎第 3 回:「対立と協調の海」(2007 年 4 月 13 日)

海センター創設後のシンポジウムは次のとおりである。

◎第 4 回:「統合的海洋教育・研究センター設立」記念シンポジウム(2007 年 11 月 3 日)

◎第 5 回:「統合的海洋教育の将来」国際シンポジウム(2008 年 3 月 21 日)

◎第 6 回:「東京湾を知る、守る、利用する」(2008 年 12 月 9 日)

◎第 7 回:「海の不思議を探る」(2009 年 11 月 14 日)

◎第 8 回:「環太平洋の海洋問題」(2010 年 11 月 29 日)

◎第 9 回:「知られざる横浜の安心・安全の最前線—海上交通管制・病害虫侵入防止・浸水水害対策—」(2011 年 11 月 14 日)

◎第 10 回:「東京湾・相模湾における津波災害と沿岸防災」(2012 年 12 月 10 日)

以下、第9回および第10回の開催概要を記す。

3-1-2. 2011(第9回)／2012(第10回)シンポジウムの報告

シンポジウムの概要と成果

(1) 第9回シンポジウム「知られざる横浜の安心・安全の最前線—海上交通管制・病害虫侵入防止・浸水水害対策—」

○日 時: 2011年11月14日(月) 13:30~17:30 (交流会 17:45~19:30)

○会 場: 横浜市開港記念会館 (横浜市中区本町1-6、Tel:045-201-0708)

○後 援: 神奈川県／横浜市／神奈川新聞／tvkテレビ神奈川／FMヨコハマ／NHK横浜放送局／農林水産省横浜植物防疫所／海上保安庁第三管区海上保安本部／横浜港振興協会

○協 力: 海洋政策研究財団／土木学会海洋開発委員会／日本沿岸域学会／日本船舶海洋工学会／日本海洋政策学会／横浜水辺のまちづくり協議会

○参加費: 無 料 (ただし交流会は、会費制;お一人様3,000円。学生割引 一人1,000円)

《プログラム》

[総合司会:横浜国立大学環境情報研究院准教授 及 川 敬 貴]

1. 開会挨拶(13:30) 横浜国立大学学長 鈴木 邦 雄

2. 講 演

(1) 「東京湾の船舶航行安全を守る:東京湾海上交通センター(東京マーチス)の概要」

(13:35~14:15) 大 谷 雅 彦 海上保安庁第三管区海上保安本部

東京湾海上交通センター所長

(2) 「植物の病害虫の侵入を防ぐ:横浜植物防疫所の活動概要」

(14:15~15:55) 安 藤 由 紀 子 農林水産省横浜植物防疫所業務部

- (3) 「横浜を水害、浸水から守る：横浜港へつながる帷子川(かたびらがわ)分水路トンネル」
(15:55～15:35) …………… 三 善 泰 雄 神奈川県横浜川崎治水事務所工務部

河川第一課副技幹

4. パネル・ディスカッション(15:45～17:25) [講師以外のパネリストは10分の話題提供]

テーマ 「安心・安全を支える技術—想定外にどのように対応するか—」

◇コンビーナ 中 原 裕 幸 横浜国立大学統合的海洋教育・研究センター特任教員(教授)

◇話題提供

(1) [災害対策に想定外はない。ハードとソフトを組み合わせた、ねばり強い防災の手法を探る。] …………… 池 田 龍 彦 統合的海洋教育・研究センター長

(2) [江戸時代には 3m を超える津波が来襲した。横浜における津波・高潮防災の現状と課題を探る。] …………… 佐々木 淳 大学院都市イノベーション研究院教授

◇パネリスト 大谷 雅彦 / 安藤 由紀子 / 三善 泰雄 / 佐々木 淳 / 池田龍彦

5. 閉会挨拶 …………… 横浜国立大学統合的海洋教育・研究センター長 池 田 龍 彦

※ 交 流 会 (17:45～19:30)

[概括]

- 2011年11月14日(月)に、「知られざる横浜の安心・安全の最前線—海上交通管制・病虫害侵入防止・浸水水害対策—」と題して、恒例の公開シンポジウムを開港記念会館で開催した。シンポジウムの参加者数は約120名であった。
- 第1講演は、「東京湾の船舶航行安全を守る：東京湾海上交通センター(東京マーチス)の概要」として、大谷雅彦・海上保安庁第三管区海上保安本部東京湾海上交通センター所長が、1日約600隻もの船舶が往来する世界有数の海上交通路である東京湾の航行管制を24時間365日行っている業務内容を紹介いただいた。
- 第2講演は、「植物の病虫害の侵入を防ぐ：横浜植物防疫所の活動概要」と題して、安藤由紀子・農林水産省横浜植物防疫所業務部本船貨物担当統括植物検疫官に、海外からの新たな病虫害の侵入を防ぐために横浜植物防疫所が港や空港で行っている植物の輸入検疫について紹介いただいた。
- 第3講演は、「横浜を水害、浸水から守る：横浜港へつながる帷子川(かたびらがわ)分水路トンネル」と題して、三善泰雄・神奈川県横浜川崎治水事務所工務部河川第一課副技幹が、「帷子川」の抜本的な治水対策のため建設された、中流部の旭区を起点に横国大キャンパス下を通過し、横浜港に至る地下トンネル施設「帷子川分水路」について紹介いただいた。
- パネル討論に先立って、本学教員の二つの短い発表があった。一つは、池田龍彦・国際社会科学研究所教授／統合的海洋教育・研究センター長からで、災害対策に想定外はなく、ハードとソフトを組み合わせたねばり強い防災の手法について、またその基盤としてのソーシャル・キャピタルの考え方について話題提供を行った。二つ目として、佐々木淳・都市イノベーション研究院教授が、江戸時代に3mを超える津波として来襲した歴史と横浜における津波・高潮防災の現状と課題について、3.11における東京湾での津波の動きをシミュレーション動画で紹介しながら話題提供を行い、パネル討論に移った。
- パネル討論では、「安心・安全を支える技術—想定外にどのように対応するか—」と題して、今後のリスク対応等を論議したが、たとえば、東京湾の船舶航行管制では、港湾施設から沖

- 合に出た船舶が400隻に達したら湾外への誘導をしなければ安全確保ができないということ
を初めて想定として設定したことなどの貴重な話がなされた。
- －フロアからも質問、コメントが出され、大変内容的には充実したシンポジウムとなった。タイトルどおり、“知られざる”ものばかりであったので、聴講者からは好評を博したといっ
てよいであろう。
 - －終了後の懇親会は、昨年と同様に約30名であったが、シンポジウムのフォローアップセッ
ションとして和気あいの雰囲気の中でいくつもの話の輪が出来ていた。
 - －なお、昨年度から、後援機関として、地元メディアである神奈川新聞、TV神奈川、FMヨコ
ハマ、NHK神奈川放送局の4者が加わっており、本シンポジウムの成果が広く市民に共
有されるよう望むところである。
- －参加者アンケートについては、別添の集計結果を参照願いたい。



(写真:2011年11月14日のシンポジウムの様子)(於:横浜市開港記念会館)

(2)第10回シンポジウム「東京湾・相模湾における津波災害と沿岸防災」

- 日 時: 2012年12月10日(月) 13:30~17:30 (交流会 17:45~19:30)
- 会 場: 横浜市開港記念会館 (横浜市中区本町1-6、Tel:045-201-0708)
- 後 援: 神奈川県／横浜市／神奈川新聞社／tvk(テレビ神奈川)／FMヨコハマ／NHK横浜
放送局／横浜港振興協会／(独)海洋研究開発機構／(独)水産総合研究センター／
(独)港湾空港技術研究所
- 協 力: 海洋政策研究財団／土木学会海洋開発委員会／日本沿岸域学会／日本海洋政策
学会／日本船舶海洋工学会／日本水産学会／日本生態学会／横浜水辺のまちづ
くり協議会

○参加費:無 料 (ただし交流・懇親会は、会費制;お一人様3,000円。学生割引 一人1,000円)

《プログラム》

〔司会: 横浜国立大学環境情報研究員教授 松田 裕之〕

1. 開会挨拶(13:30) 横浜国立大学長 鈴木 邦雄

◎講 演

(1)「南海トラフの巨大地震・津波研究から見た東京湾・相模湾に津波をもたらす地震のポテン
シャル」

- (13:35～14:05) …………… 堀 高峰 (独)海洋研究開発機構
地震津波・防災研究プロジェクトデータ解析グループサブリーダー
- (2) 「沿岸漁業と津波防災」
(14:05～14:35) …………… 中山 哲巖 (独)水産総合研究センター
水産工学研究所 水産土木工学部長
- (3) 「港湾施設の津波被害とその対策」
(14:35～15:05) …………… 下迫 健一郎 (独)港湾空港技術研究所 海洋研究領域長
- (4) 「新たな津波浸水予測図と防災対策について」
(15:20～15:50) …………… 鈴木 勲生 神奈川県 県土整備局河川下水道部
流域海岸企画課長
- (5) 「津波の予測と減災戦略」
(15:50～16:20) …………… 柴山 知也 早稲田大学教授／横浜国立大学名誉教授
神奈川県津波浸水想定検討部会部会長

3. パネルディスカッション(16:25～17:25)

テーマ 「東京湾・相模湾での防災・減災をどのように考えるか？」

コンビーナ 佐々木 淳 横浜国立大学大学院都市イノベーション研究院教授

パネリスト 講師5人(堀 高峰、中山哲巖、下迫健一郎、鈴木勲生、柴山知也)

4. 閉会挨拶 …………… 横浜国立大学統合的海洋教育・研究センター長 池田 龍彦

※ 交流会 (17:45～19:30)

《 成 果 》

〔概括〕

- －2012年12月10日(月)に、「東京湾・相模湾における津波災害と沿岸防災」と題するシンポジウムを、日本財団助成事業の一環として開港記念会館で開催した。このシンポジウムは、「横浜から海洋文化をはぐくむ」というシンポジウム・シリーズの第10回にあたるものである。
- －今回のシンポジウムの参加者数は、過去最多の約320名であった。いつ起きても不思議ではない巨大地震・津波の想定とその対策というテーマが、いかに真剣に受け止められ、多くの関心を引き起こしたものと理解できる。
- －開会冒頭に鈴木邦雄・学長の挨拶があり、鈴木崇之・都市イノベーション研究院准教授の総合司会のもとで、プログラムに従って進められた。
- －第1講演は、「南海トラフの巨大地震・津波研究から見た東京湾・相模湾に津波をもたらす地震のポテンシャル」と題して、堀高峰(独)海洋研究開発機構地震津波・防災研究プロジェクトデータ解析グループサブリーダーに南海トラフ地震の発生メカニズムや東京湾・相模湾における過去の津波の堆積物調査について紹介いただいた。
- －第2講演は、「沿岸漁業と津波防災」と題して、中山哲巖(独)水産総合研究センター水産工学研究所水産土木工学部長に、東日本大震災における魚湾や水産関係の被害状況の調査結果を紹介いただき、海底がれきや漁場の被災からの教訓についてお話しいただいた。
- －第3講演は、「港湾施設の津波被害とその対策」と題して、下迫健一郎(独)港湾空港技術研究所海洋研究領域長が、東日本大震災における港湾の防波堤の被害状況の調査結果を紹介し、防波堤の越流メカニズムに詳細に触れながらこれからの「粘り強い構造の防波堤」の

対策等について解説していただいた。

- 第4講演は、「新たな津波浸水予測図と防災対策について」と題して、鈴木勲生神奈川県県土整備局河川下水道部流域海岸企画課長が、神奈川県の津波対策の行政的取り組みや過去の津波の痕跡データについて紹介し、新たな浸水シミュレーションへの取り組みや地形データの調査に基づく神奈川県県土整備局の「新たな津波浸水予測図」の公開、沿岸自治体のハザードマップ策定や津波避難への取り組み強化等について説明していただいた。
- 第5講演は、「津波の予測と減災戦略」と題して、柴山知也早稲田大学教授／横浜国立大学名誉教授、神奈川県津波浸水想定検討部会長が、世界および日本における最近の津波・高潮調査および被災メカニズムの解明について紹介し、日本全国における防災計画の練り直しにおいて「想定外」を排除し、地域からの視点の重要性について強調し、防護レベル(第1レベル)と減災レベル(第2レベル)の使い分けの重要性や対策の強化について、論じていただいた。
- パネル討論は、佐々木淳・都市イノベーション研究院教授をコーディネータとし、5人の講師にパネリストになっていただいて、「東京湾・相模湾での防災・減災をどのように考えるか?」と題して、これまでの神奈川県および沿岸自治体の津波対策、これからの対策の再検討、市民への防災情報の周知、等々、中身の濃い意見交換がなされ、聴講者にとっては非常に貴重な内容の話がなされた。
- 5つの講演のそれぞれについてもフロアからも質問、コメントが出されたが、パネル討論でも積極的な発言が寄せられ、最終的に予定時間を30分近くオーバーして、盛会裡に終了した。
- 約320名の参加者のなかには、国の県内出先機関、神奈川県、東京湾・相模湾沿岸の市町自治体、地域住民、関係企業などが多く含まれ、大変、好評を博し、有益なシンポジウムとなった。
- 終了後の懇親会の参加者は、40名以上であったが、シンポジウムのフォローアップ・セッションとして、自由な雰囲気の中で講師を囲んで、あるいは聴講者同士で、いくつかの話の輪が出来ていた。
- なお、後援機関として、外部講師の所属機関をはじめ、地元メディアである神奈川新聞、TV神奈川、FMヨコハマ、NHK神奈川放送局の4社が、そして協力機関として6学会2団体に加わっていただいたが、ここに改めて謝意を表するとともに、本シンポジウムの成果が専門家はもとより、広く地域住民や市民の方々にも共有されることが望まれる。



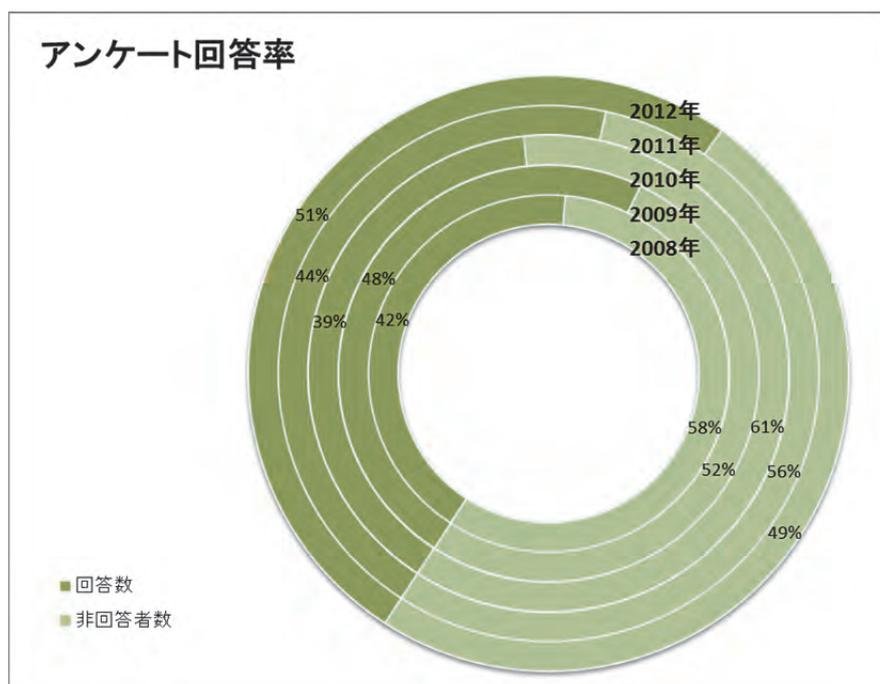
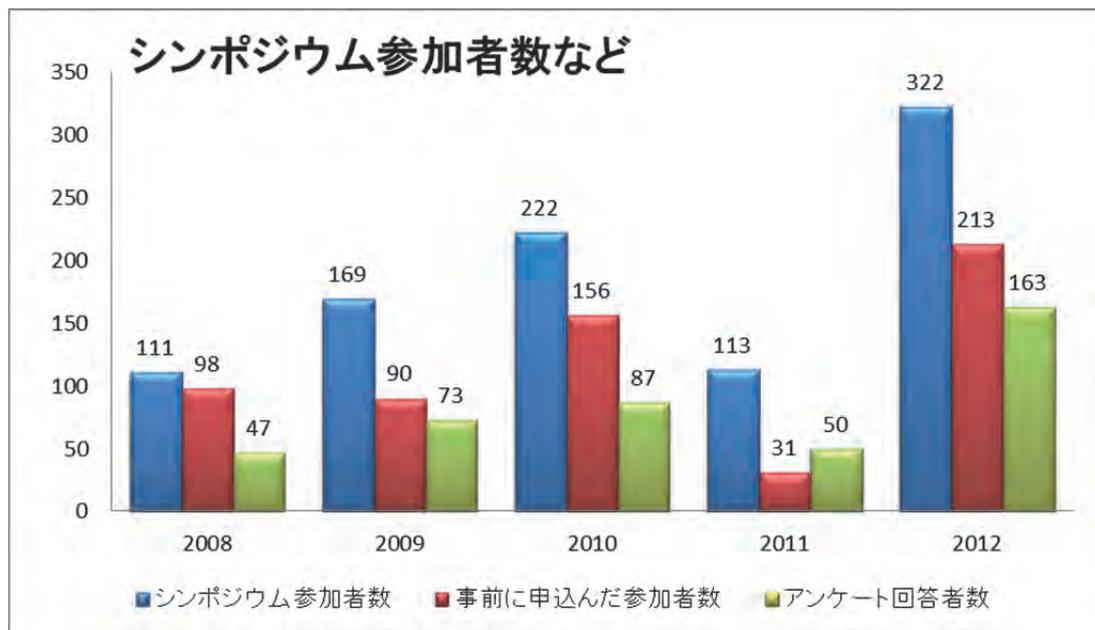
(写真:2012年12月10日のシンポジウムの様子)(於:横浜市開港記念会館)

3-1-3. 同シンポジウムアンケートの結果

(1) シンポジウム参加者数の推移

2008年度から2012年度までの過去5年間のシンポジウムの参加者数と参加者アンケートの回答率の推移を示す。

参加者数では、2008年度から順調に増加傾向を辿ってきたが、2011年度に少し落ち込んだ。しかし、2012年度では過去最高の320人を超える参加者数となった。これは、開催日が週末の土曜日であるか平日であるか、また、テーマが何であるかによって左右されるものと思われる。回答数は、2010年度を別として、おおむね40-50%のレベルで推移しているが、母集団の参加者数の多寡との関係で回答率もみなければならないであろう。



(2) 2011年度第9回シンポジウムのアンケート調査結果

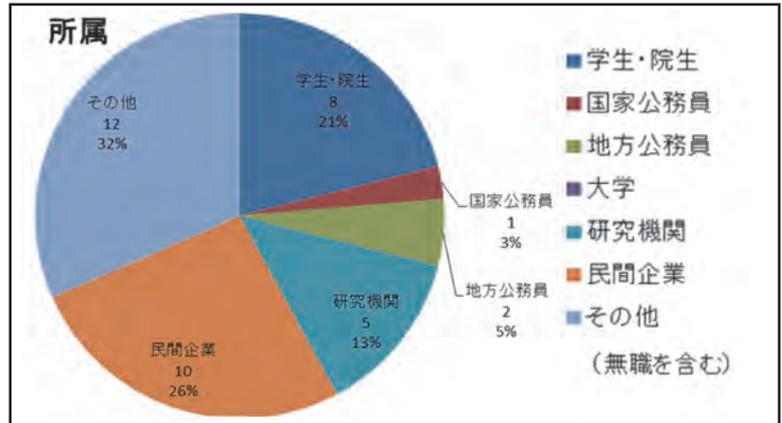
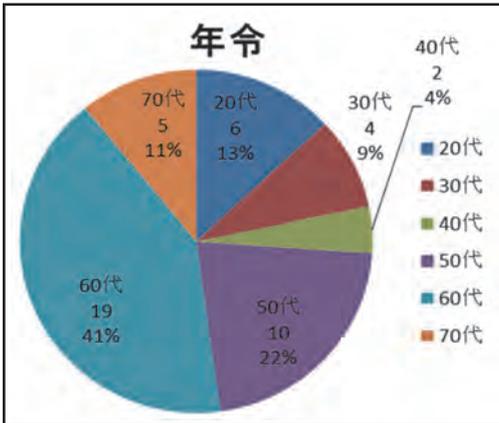
◎テーマ：「知られざる横浜の安心・安全の最前線—海上交通管制・病虫害侵入防止・浸水水害対策—」

◎アンケート回答者（設問8）…………… 50人（参加者総数 120人、回収率：44%）

◎アンケート回答者の属性等

(1) 年 令（20代 6人、30代 4人、40代 2人、50代 10人、60代 19人、70代以上 5人）（n = 46/50）

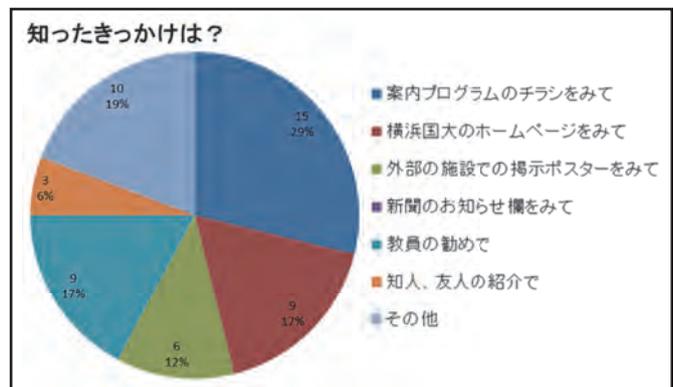
(2) 所属（学生・院生 8人、国家公務員 1人、地方公務員 2人、研究機関 5人、民間企業 10人、その他 12人）
（n = 38/50）



◎アンケート設問回答

1. あなたがこのシンポジウムを知ったきっかけは何ですか？（該当するものに○印。以下、同）

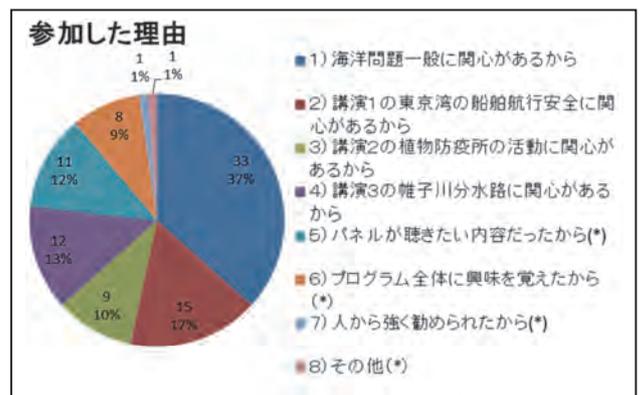
- 1) 横浜国大のチラシをみて (*) ……………15
- 2) 横浜国大海洋センターの HP をみて ……………9
- 3) 外部の施設での掲示ポスターをみて (*) ……6
- 4) 新聞のお知らせ欄をみて …………… 0
- 5) 教員の勧めで ……………9
- 6) 知人・友人に誘われて …………… 3
- 7) その他 (***) ……………10



(n = 52/50) (複数回答者あり!)

2. あなたがこのシンポジウムに参加しようと思った理由は何ですか？（複数可）

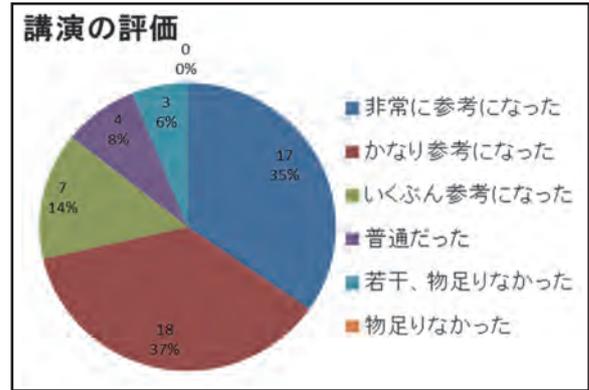
- 1) 海洋問題一般に関心があるから ……………33
- 2) 講演1の東京湾の船舶航行安全に関心があるから ……15
- 3) 講演2の植物防疫所の活動に関心があるから ……………9
- 4) 講演3の帷子川分水路に関心があるから ……………12
- 5) パネルが聴きたい内容だったから (*)……………11
- 6) プログラム全体に興味を覚えたから (*)……………8
- 7) 人から強く勧められたから (*)……………1
- 8) その他 (*) 1 ……………1



(n = 90/50)

3. あなたにとって、3つの講演は全体としてどの程度、参考になりましたか？

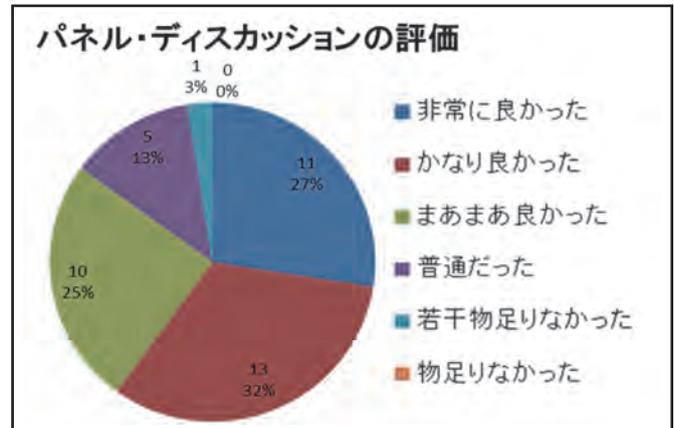
- 1) 非常に参考になった17
- 2) かなり参考になった18
- 3) いくぶん参考になった7
- 4) 普通だった4
- 5) 若干、物足りなかった3
- 6) 物足りなかった0



(n = 49/50)

4. あなたは、パネルディスカッションについて、全体として、どのように思いましたか？

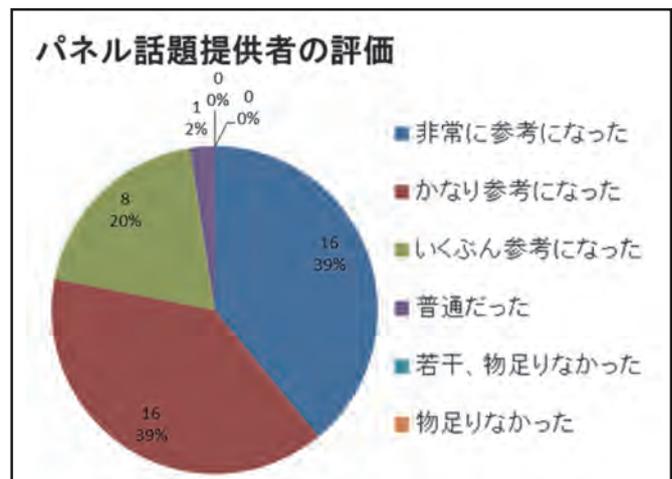
- 1) 非常に良かった11
- 2) かなり良かった13
- 3) まあまあ良かった10
- 4) 普通だった5
- 5) 若干物足りなかった1
- 6) 物足りなかった0



(n = 40/50)

5. あなたは、パネルディスカッションについて、全体として、どのように思いましたか？

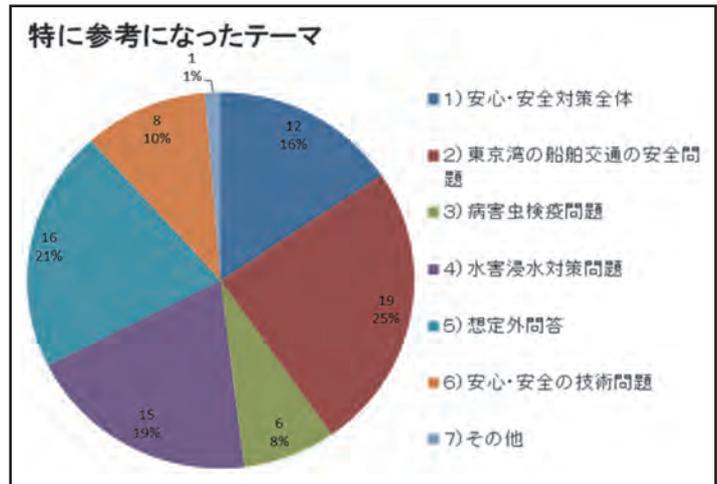
- 1) 非常に参考になった16
- 2) かなり参考になった16
- 3) いくぶん参考になった8
- 4) 普通だった1
- 5) 若干、物足りなかった0
- 6) 物足りなかった0



(n = 41/50)

6. パネルディスカッションについて、どんな点が良かったですか、以下の中から選択したうえ、ご意見ご感想を表すキーワードや具体的内容をお書きください。
(複数可)

- 1) 安心・安全対策全体12
- 2) 東京湾の船舶交通の安全問題19
- 3) 病害虫検疫問題6
- 4) 水害浸水対策問題15
- 5) 想定外問答16
- 6) 安心・安全の技術問題8
- 7) その他 (キーワード:)1



(n = 77/50)

7. パネルディスカッションで、あなたが物足りなかったと考える点、もっと知りたかったことや議論して欲しかった点があるとしたら、それはどういう点ですか、ご自由にお書きください。

(例：環境問題、漁業問題、地域の取り組み、海洋技術、海洋関連の政策と法制度、海陸相互の関係、海域総合的管理など)

(自由記入回答は略)

8. 本シンポジウムの企画内容および横浜国大海センターの今後の活動に関するご意見、要望、注文、あるいは感想やご批判など、何でもご自由にお書きください。

(自由記入回答は略)

(以上)

(3) 第10回シンポジウムのアンケート調査結果

◎テーマ：「東京湾・相模湾における津波災害と沿岸防災」

[参加者総数：322人]

◎アンケート回答者（設問8）.....163人（対322人=51%、対303人=54%）

(n=163/322)

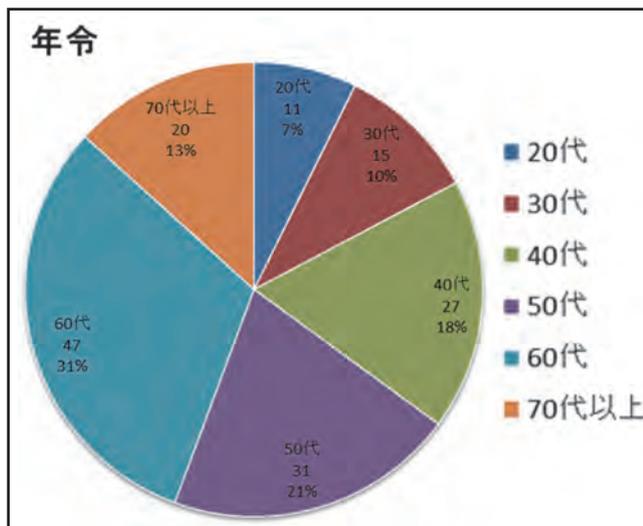
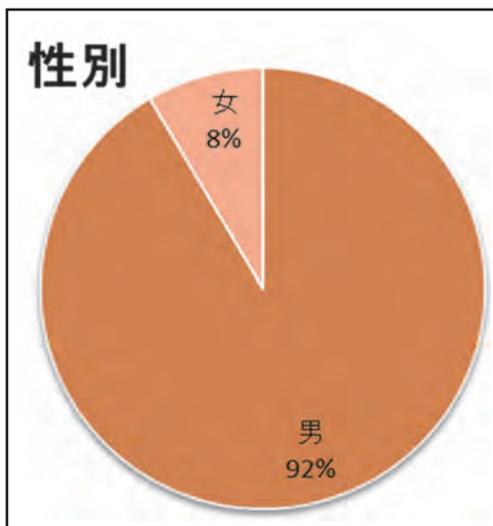
◎アンケート回答者の属性等

(1) 性別（男140人、女13人）

(n = 153/163)

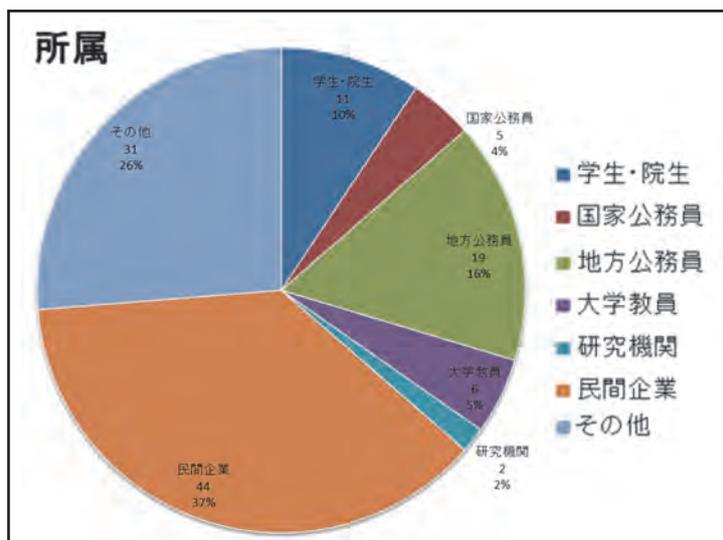
(2) 年齢（20代11人、30代15人、40代27人、50代31人、60代47人、70代以上20人）

(n = 153/163)



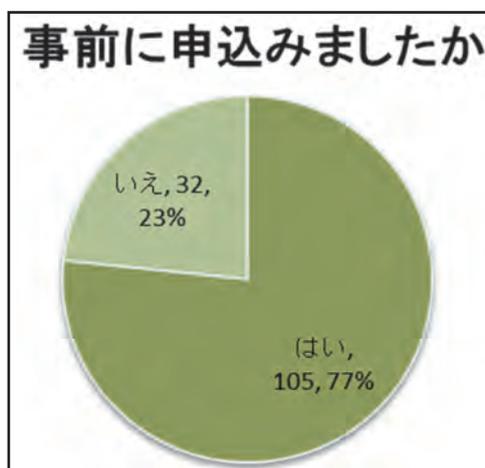
(3) 所 属 (学生・院生 11 人、国家公務員 5 人、地方公務員 19 人、大学教員 6 人、研究機関 2 人、民間企業 44 人、その他 31 人)

(n = 118/163)



(4) シンポジウムには事前に登録しましたか。(はい 105 人・いいえ 32 人)

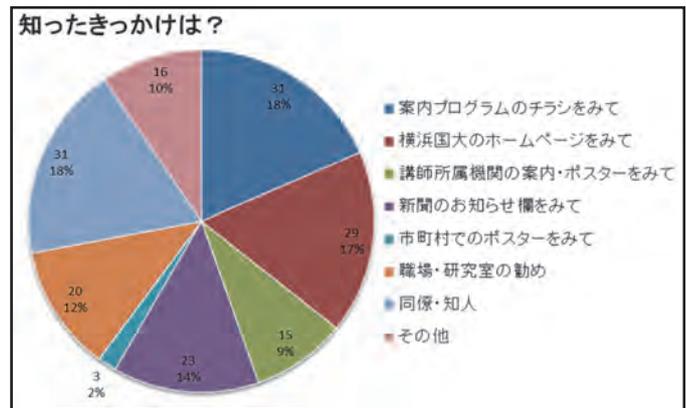
(n = 137/163)



◎アンケート設問回答

1. あなたがこのシンポジウムを知ったきっかけは何ですか？

- 1) 本シンポジウムのチラシをみて31
- 2) 横浜国大や海センターの HP を見て29
- 3) 講師所属機関等での案内／ポスターをみて15
- 4) 新聞のお知らせ欄をみて23
- 5) 市町村で掲示のポスターをみて3
- 6) 職場や研究室の勧めで20
- 7) 同僚、知人、友人の紹介で31
- 8) その他16

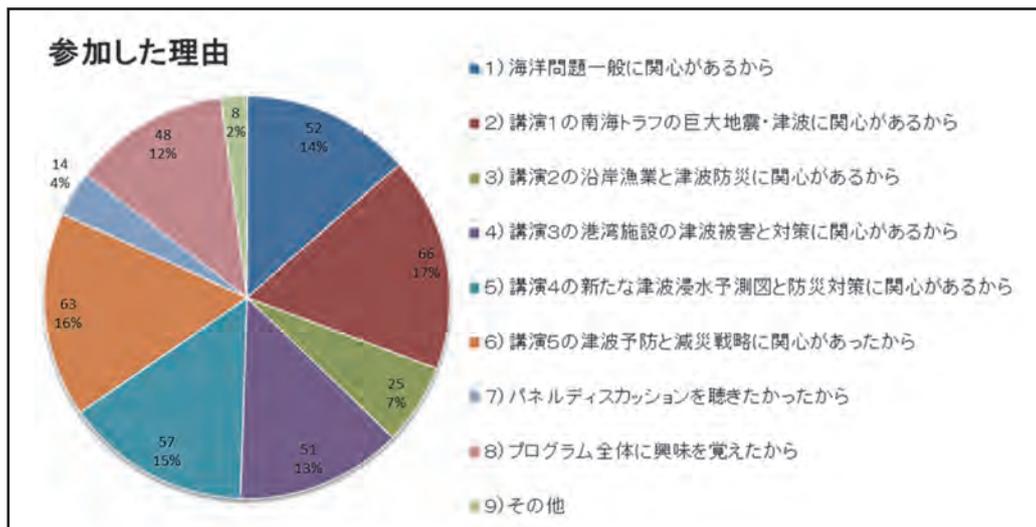


(n = 168/163) (複数回答者あり！)

2. あなたがこのシンポジウムに参加しようと思った理由は何ですか？

(複数可)

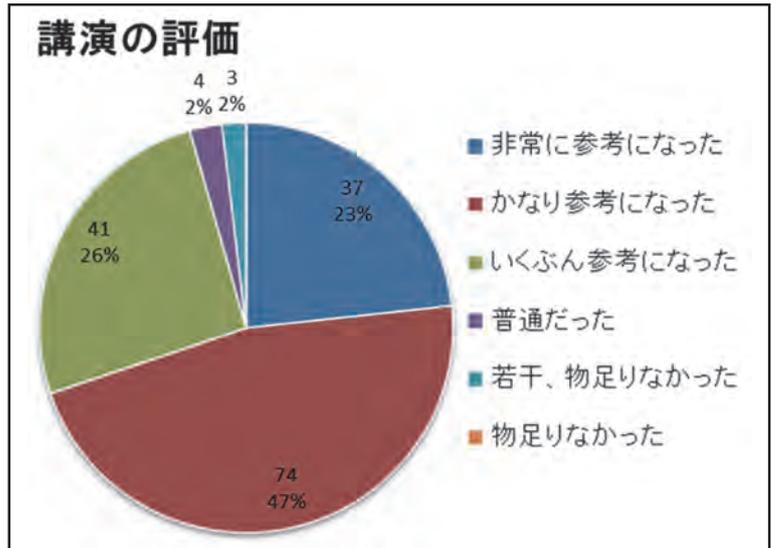
- 1) 海洋問題一般に関心があるから52
- 2) 講演1の南海トラフの巨大地震・津波に関心があるから66
- 3) 講演2の沿岸漁業と津波防災に関心があるから25
- 4) 講演3の港湾施設の津波被害と対策に関心があるから51
- 5) 講演4の新たな津波浸水予測図と防災対策に関心があるから57
- 6) 講演5の津波予防と減災戦略に関心があったから63
- 7) パネルディスカッションを聴きたかったから14
- 8) プログラム全体に興味を覚えたから48
- 9) その他8



(n = 384/163)

3. あなたにとっては、5つの講演は全体としてどの程度、参考になりましたか？

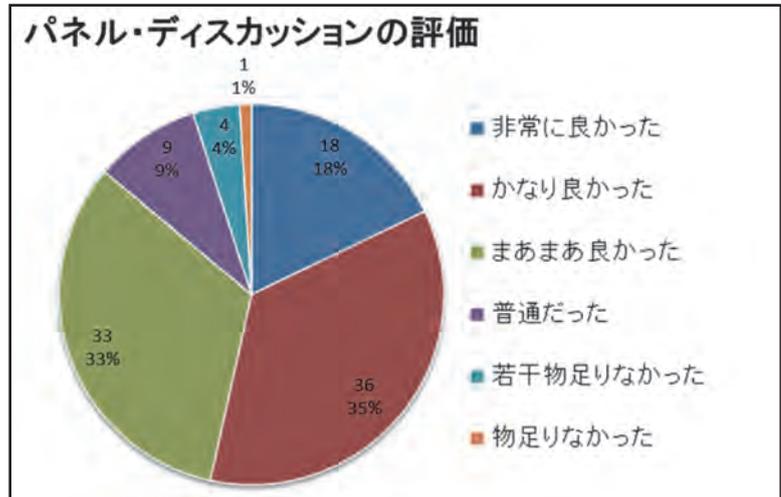
- 1) 非常に参考になった37
- 2) かなり参考になった74
- 3) いくぶん参考になった41
- 4) 普通だった4
- 5) 若干、物足りなかった3
- 6) 物足りなかった0



(n = 159/163)

4. あなたは、パネルディスカッションについてどのように思いましたか？

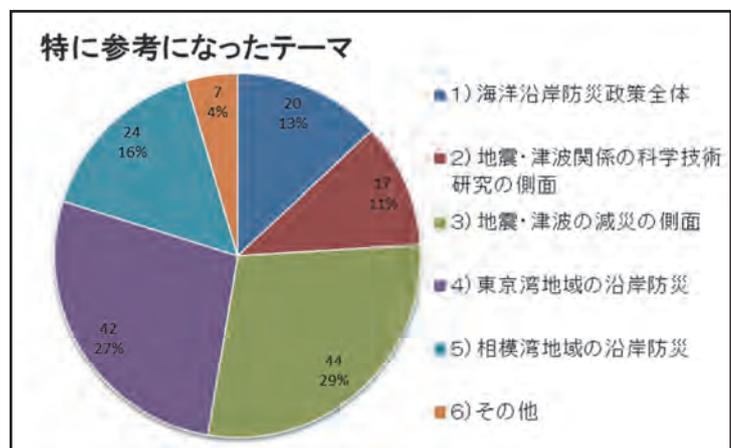
- 1) 非常に良かった18
- 2) かなり良かった36
- 3) まあまあ良かった33
- 4) 普通だった9
- 5) 若干物足りなかった4
- 6) 物足りなかった1



(n = 101/163)

5. パネルディスカッションについて、どんな点が良かったですか、以下の中から選択したうえ、できれば、キーワードや具体的内容をお書きください。
(複数可)

- 1) 海洋沿岸防災政策全体20
- 2) 地震・津波関係の科学技術研究の側面17
- 3) 地震・津波の減災の側面44
- 4) 東京湾地域の沿岸防災42
- 5) 相模湾地域の沿岸防災24
- 6) その他7



(n = 154/163)

(以上)

3-2. 学内セミナー「海事・海洋産業の動向セミナー」

3-2-1. 開催趣旨と開催要領

海センターの専任・兼務教員や一般教員を対象に、数名の海事産業、海洋産業の関係有識者を招いて海事・海洋産業の実態や産業と技術の関わりについて話題を提供していただき、産学間の意見交換を行うことを目的として、小澤宏臣・海センター客員教授の企画による学内セミナー「海事・海洋産業の動向セミナー」を実施して来た。

平成23,24年度も同様の趣旨、要領でそれぞれ4回の学内セミナー「海事・海洋産業の動向セミナー」を実施した。

3-2-2. 開催概要

(1)2011(H23)年度

2011(H23)年度については、工学研究院における海センター関連科目「海洋産業特論」において外部講師を招聘した後半の講義は、前年度と同様に教員等にも開放して学内セミナーとして実施したので、その部分の概要を以下に示す。

《2011(H23)年度「海洋産業特論」兼「海事・海洋産業の動向セミナー」》

開催月日	講師及び演題	主要トピックス	備考
6月14日 (23年度第1回、 通算第11回)	日本郵船(株)技術 G 技師長兼 ユニット長 川嶋民夫氏 「地球温暖化問題に対する国際海運の取り組み」	GHG に関する IMO の動向/日本郵船の国際的リーダーシップ/今後の日本郵船の取り組み方等	
6月28日 (23年度第2回、 通算第12回)	新日鐵エンジニアリング(株)海洋エネルギー事業部企画室 長 木村秀雄氏 「我が国の海洋エンジニアリング産業の展望」	新日鐵エンジニアリングの海洋事業への取り組み方/磐城沖天然ガスモジュールの設計、建造、据付/日本における海洋産業の今後の展望等	
7月5日 (23年度第3回、 通算第13回)	(株)海洋工学研究所 代表取締役 佐尾邦久氏 「海洋石油開発技術 I、II」	海洋石油とは/海洋石油の探査技術/物理探査船/掘削技術/大水深石油掘削リグ/海洋石油の開発技術/FPSO、ROV、TLP、GOM/生産技術/メキシコ湾BP事故最新情報/天然ガス開発と日本の技術/天然ガス埋蔵量/輸送手段/21世紀の開発動向/FLNG の開発展望等	海洋工学ハンドブック CD 版(JOGMEC)配布
7月12日 (23年度第4回、 通算第14回)	(独)上技術安全研究所 運航・システム部門長 田村兼吉氏 「海洋開発におけるリスクアナリシスの実務及び深海底実務総論」	メキシコ湾BP事故分析と評価/海洋開発におけるリスク評価の必要性/リスクの種類/リスク評価の手法/リスクマネジメントの海洋分野への適用/リスク評価手法としてのFSA/FMEAとHAZOP/リスク評価の海洋分野への応用(RBM と RBD)/深海底掘削技術の基礎と応用の解説等	「海洋底掘削の基礎と応用」紹介

講演資料(抜粋)

4. 船舶の技術革新 (4) NYK Super Eco Ship 2030

未来のコンセプトシップ <CO2排出削減69%>

8000TEU型コンテナ船
全長 : 353メートル
速力 : 25ノット
<http://www.nyk.com/csr/env/ecoship.htm>

推進に必要なエネルギーの削減

船体重量削減	摩擦抵抗削減	最適船型	風圧抵抗	推進効率向上	総伝導	船内電力消費削減
9%	10%	2%	1%	5%	2%	2%

エネルギー転換
燃料電池 32%

自然エネルギーの利用
太陽光 2%
風力 4%

CO2排出削減 : 69%

15

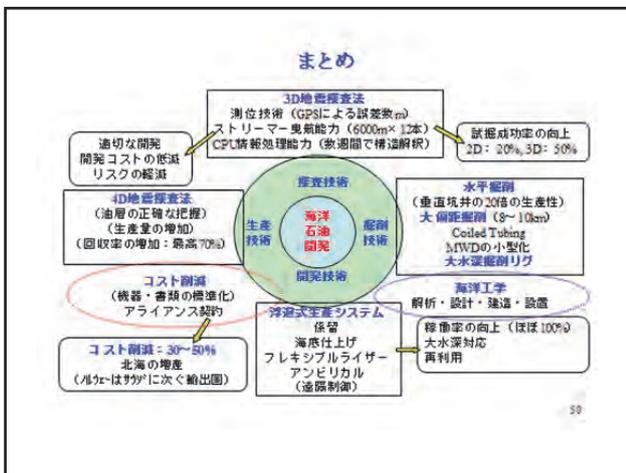
23-1 川嶋民夫氏

NIPPON STEEL ENGINEERING

～洋上風力発電は成長産業たり得るか?～

新日鉄エンジニアリング株式会社

23-2 木村秀雄氏



23-3 佐尾邦久氏

メキシコ湾での石油流出事故

- 2010年4月20日、メキシコ湾ルイジアナ州沖にて、セミサブ型石油開発施設「Deepwater Horizon」において暴噴事故が発生。噴出した油がリグ上で爆発を起こした。
- この爆発事故で掘削リグにいた126名の内、11名が行方不明となっている。リグは2日間燃え続け、22日に沈没。
- リグの沈没後も海底の井戸元からの原油の流出は7月まで続き、総流出量は78万klにのぼった。

12

23-4 田村兼吉氏

(2)2012(H24)年度

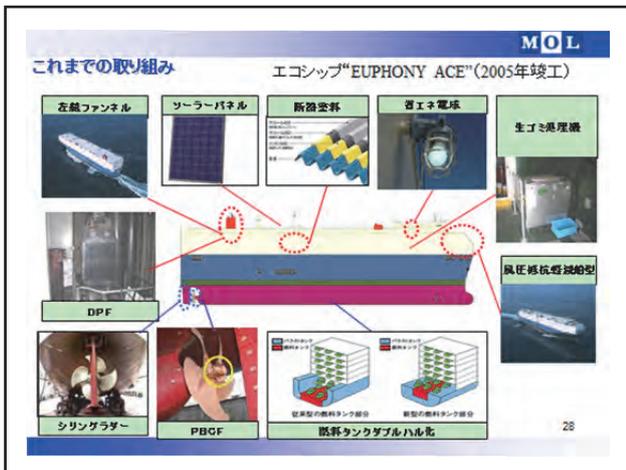
2012(H24)年度については、工学研究院における海センター関連科目「海洋産業特論」において外部講師を招聘した後半の講義は、前年度と同様に教員等にも開放して学内セミナーとして実施したので、その部分の概要を以下に示す。

《2012(H24)年度「海洋産業特論」兼「海事・海洋産業の動向セミナー」》

開催月日	講師及び演題	主要トピックス	備考
6月5日 (24年度第1回、 通算第15回)	(株)商船三井技術部マネージャー 村越知史氏 「地球温暖化問題、国際海運の取り組み」	日商船三井の環境、省エネ技術開発への取り組み 方/今後の国際海運の戦略と展望等	
6月19日	深田サルベージ建設(株)海洋	日本の海洋エンジニアリング会社の海洋事業への	

(24年度第2回、 通算第16回)	開発部部长 木村秀雄氏 「我が国の海洋エンジニアリング産業の今後の成長戦略」	取り組み方/今後の成長戦略/海洋再生可能エネルギーの将来展望等	
6月26日 (24年度第3回、 通算第17回)	(株)海洋工学研究所 代表取締役 佐尾邦久氏 「海洋石油開発技術概論」	海洋石油の開発技術/FPSO、ROV、TLP、GOM/ 生産技術/天然ガス開発技術開発動向と日本の技術/輸送手段/LNG-FPSO/21世紀の開発動向/FLNGの開発展望等	海洋工学ハンドブック CD版(JOGMEC)配布
7月3日 (24年度第4回、 通算第18回)	(独)上技術安全研究所 運航・システム部門長 田村兼吉氏 「海洋開発リスク管理概論及び深海底技術概論」	海洋開発におけるリスク解析技術の実務紹介/リスクマネジメントの海洋分野への適用/イタリア客船事故分析と評価/深海底掘削技術の基礎と応用の解説等	「海洋底掘削の基礎と応用」紹介

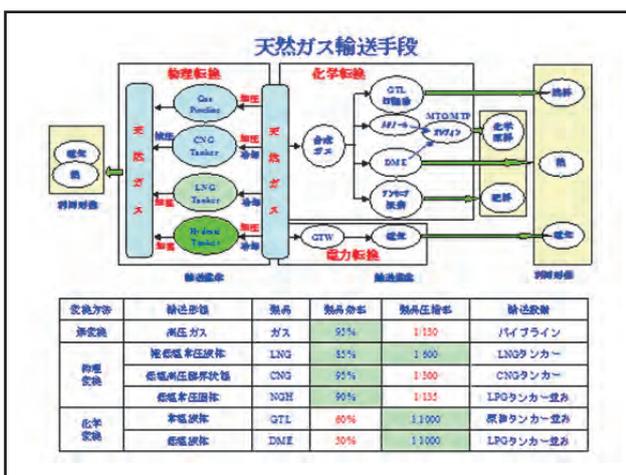
講演資料(抜粋)



24-1 村越知史氏



24-2 木村秀雄氏



24-3 佐尾邦久氏



24-4 田村兼吉氏

3-3. 外部機関との連携協定等

横浜国立大学では、統合的海洋教育・研究センターの設立前に、次の海洋関連機関と包括連携協定を締結している。(名称はいずれも現在のもの)

独立行政法人海上技術安全研究所(東京都三鷹市)

独立行政法人港湾空港技術研究所(神奈川県横須賀市)

そして、2007年の統合的海洋教育・研究センターの設立後には、次の海洋関連機関との間でも包括連携協定を締結している。

一般社団法人海洋産業研究会(東京都港区)(2008年5月15日)

独立行政法人海洋研究開発機構(本部・神奈川県横須賀市)(2010年1月27日)

独立行政法人水産総合研究センター(本部・神奈川県横浜市)(2011年8月9日)

このうち、一般社団法人海洋産業研究会との間では、特任教員を派遣してもらったほか、この連携協定に基づいて覚書を取り交わし、東京都港区西新橋にある同研究会の事務所に、海センターの東京事務所を設置している。

(独)海洋研究開発機構(略称: JAMSTEC、理事長: 加藤康宏〔当時〕)との間の包括連携協定の調印式は2010年1月27日、本学の学長室で行われた。これまでも、両機関は個別の研究航海や特定の課題ごとに共同研究を実施してきたが、組織的な連携体制が構築されることにより、今までの研究交流に加え、地球内部ダイナミクス、地球環境変動、海洋生態、海洋工学なども含めた広範な研究分野において一層の協力が見込まれることとなった。2012(平成24)年10月5日には連携協議会を開催し、連携協定を2013(平成25)年4月1日からさらに1年間延長することに合意している。

(独)水産総合研究センター(略称: 水研センター、理事長: 松里壽彦)との間の包括連携協定の調印式は、2011年8月9日、横浜MM21にある水研センター本部で行われた。式終了後、本学の横浜ランドマークタワーにあるサテライト教室に場所を移して、両機関からのそれぞれ6-7名の参加者による交流会を開催し、本学側からは若干の院生も加わって、それぞれプレゼンによる話題提供と意見交換を行った。2012(平成24)年8月24日には連携協議会を開催し、連携協定を、JAMSTECとの間の場合と同じく、2013(平成25)年4月1日からさらに1年間延長することに合意している。

なお、JAMSTEC および水研センターからは、「統合的海洋管理学Ⅰ、Ⅱ」にそれぞれ講師を派遣していただいている。

4. 海センター「e-ニュース」の配信

海センターでは、履修生、教員ならびに公開講座聴講者、シンポジウム講師陣や参加者でe-メールアドレスが分かる方々を対象に、不定期だが事業活動の節目の時期などに合わせて、メールニュースの配信を2009年9月から開始した。これまで既に14号を配信しているが、各号の配信日は次のとおりである。

- 「横浜国大海センター e-ニュース」 創刊号 (2009.9.24)
- 「横浜国大海センター e-ニュース」 No.2 (2009.11.9)
- 「横浜国大海センター e-ニュース」 No.3 (2009.12.3)
- 「横浜国大海センター e-ニュース」 No.4 (2010.2.9)
- 「横浜国大海センター e-ニュース」 No.5 (2010.11.9)
- 「横浜国大海センター e-ニュース」 No.6 (2011.1.11)
- 「横浜国大海センター e-ニュース」 No.7 (2011.3.01)
- 「横浜国大海センター e-ニュース」 No.8 (2011.7.01)
- 「横浜国大海センター e-ニュース」 No.9 (2011.9.28)
- 「横浜国大海センター e-ニュース」 No.10 (2011.12.26)
- 「横浜国大海センター e-ニュース」 No.11 (2012.4.23)
- 「横浜国大海センター e-ニュース」 No.12 (2012.9.21)
- 「横浜国大海センター e-ニュース」 No.13 (2012.11.19)
- 「横浜国大海センター e-ニュース」 No.14 (2013.1.16)

以下に、2011年度と2012年度に配信した「横浜国大海センター e-ニュース」の目次を掲げておく。

-
- 横浜国大海センター e-ニュース No.8 2011年7月1日
- 海センター、6月23日(木)に工学研究棟(S7-1)7階に移転
 - 平成23年度大学院生の海外派遣(主要経費を助成)、7/11まで追加募集中!
 - 東日本大震災の重要会合が続々開催、海センター関係教員も発表
 - 「海事・海洋産業の動向セミナー」開催のご案内【学内教員・履修生対象】
-

-
- 横浜国大海センター e-ニュース No.9 2011年9月28日
- ・ 水研センターと包括連携協定を8月9日に締結、交流会も同日開催
 - ・ 海センターの外部評価委員会報告、まとまる
 - ・ 「海洋管理学I」10月4日(火)にオリエンテーションと第1回講義
 - ・ 11月14日(月)にシンポジウム「知られざる横浜の安心・安全の最前線」開催
-

-
- 横浜国大海センター e-ニュース No.10 2011年12月26日
- 11/14(月)シンポジウム「知られざる横浜の安心・安全の最前線」、盛会裡に開催
 - 《予告》2/13(月)、海洋管理プログラム修了生(OB)講演会・第4期修了ポスターセッション
 - 《予告》2/17(金)、海洋空間のシステムデザイン教室ポスターセッション・企業等説明展示会
-

横浜国大海センター e-ニュース No.11 2012年4月23日

- 2012年度春学期「海洋管理学Ⅱ」、4月開講。今回も公開講座で
 - 船や魚のひれに関する公開講座(7/16(月・祝))、ひれ推進コンテスト8/25(土)開催
 - 国土交通省の坂下技術審議官の講演会「海事大国日本の将来」、5/19(土)開催
 - 海外派遣プログラム第一次募集、4/25(水)〆切
 - 海外フィールドワーク(ショートビジット)(募集予告)
-

横浜国大海センター e-ニュース No.12 2012年9月21日

- 「海洋管理学Ⅰ」、10月1日(月)昼オリエンテーションと第1回講義(4限目)
 - PUL ショートステイ・プログラム、5ヶ国19名参加で成功裡に実施(8/27-31)
 - 日本科学協会、H25年度若手研究者向け研究助成申請受付、10/1 - 15
 - 海洋政策学会年次大会12/1(土)開催、アブストラクト〆切9/24(月)正午
-

横浜国大海センター e-ニュース No.13 2012年11月19日

- シンポジウム「東京湾・相模湾の津波災害と沿岸防災」、12/10(月)に開催
 - 院生向け案内：海外派遣生、再募集中。積極的応募を！
 - 横浜国大海センター、水研センターおよびJAMSTECとの連携協定を延長
-

横浜国大海センター e-ニュース No.14 2013年1月16日

- 12/10開催のシンポジウム「東京湾・相模湾の津波災害と沿岸防災」、320名の参加！
 - ≪予告≫2/19(火)に「修了生(OB)講演会及び第5期ポスターセッション」を開催
 - 真鶴の臨海研究センター沖合で、バラストフリー船の洋上模型実験を実施
 - 海センター関係教員、各方面で講演活動等に活躍
-

5. 活動日誌

◎「横浜から海洋文化を育む」シンポジウム・シリーズの開催（第1回－第8回も記載）

- 第1回 「新たな海の世界に向けて」(2006.7.5)
 第2回 「東京湾の利用と環境を考える」(2006.11.6)
 第3回 「対立と協調の海」(2007.4.13)
 第4回 「海センター開設記念シンポジウム」(2007.11.3)
 第5回 「統合的海洋教育の将来」(2008.3.21)
 第6回 「東京湾を知る、守る、利用する」(2008.12.9)
 第7回 「海の神秘を探る」(2009.11.14)
 第8回 「環太平洋の海洋問題」(2010.11.29)
 第9回 「知られざる横浜の安心・安全の最前線-海上交通管制・病虫害侵入防止・浸水水害対策-」(2011.11.14)
 （後援：神奈川県・横浜市・神奈川新聞社・TV神奈川・FMヨコハマ・NHK横浜放送局・
 第三管区海上保安本部・横浜港振興協会）
 第10回 「東京湾・相模湾における津波災害と沿岸防災」(2012.12.10)
 （後援：神奈川県・横浜市・神奈川新聞社・TV神奈川・FMヨコハマ・NHK横浜放送局・横浜港振興協会・
 （独）海洋研究開発機構・（独）水産総合研究センター・（独）港湾空港技術研究所）
- (注)第3回(2007年4月)までは海センター創設前の開催。

◎海センター関連活動日誌

以下に、海センター2011-2012年度を日誌で記す。

2011(H23)年度

月	主な出来事、行事等	海センター内活動	備考
4月	第4期「統合的海洋管理学Ⅱ」開講 (4/11 昼休み オリエンテーション) (4月11日～8月1日:毎週月曜、第4限)	1-30日 第4期「統合的海洋管理学」 履修登録受付 21日 第1回運営委員会	
5月		17日 第2回運営委員会	
6月	7日 外部評価委員会開催 (於：横浜国大みなとみらいキャンパス会議室) 14日 第11回 海事・海洋産業の動向 セミナー 28日 第12回 海事・海洋産業の動向 セミナー	21日 第3回運営委員会 23日 事務室学内移転(現事務所)	
7月	5日 第13回 海事・海洋産業の動向 セミナー	1日 e-ニュース No8配信 19日 第4回運営委員会 第1回学務委員会	

	12日	第14回 海事・海洋産業の動向セミナー		
8月	9日	水産総合研究センターと包括連携協定締結(調印式・研究交流会) (於:【調印式】水産総合研究センター理事長室【研究交流会】横浜国大みなとみらいキャンパス会議室)		
9月			15日 第5回運営委員会 28日 e-ニュース No9配信	
10月		第5期:「統合的海洋管理学Ⅰ」開講 (10/4 昼休み オリエンテーション) (10月4日～2月13日:毎週月曜 第4限) 28日 JAMSTEC 連携協議会(第2回) (於:横浜国大共同研究推進センター2階セミナー室)	1-31日 第5期「統合的海洋管理学」履修登録受付 20日 第6回運営委員会	
11月	14日	シンポジウム「知られざる横浜の安心・安全の最前線-海上交通管制・病害虫侵入防止・浸水水害対策-」実施*(於:横浜市開港記念会館)	22日 第2回学務委員会 24日 第7回運営委員会	*上記シンポジウムシリーズ第9回
12月	22日	JAMSTEC 包括連携協定延長合意書調印 (平成23年1月27日より1年間更新)	15日 第8回運営委員会 26日 e-ニュース No10 配信	
平成24年 1月			19日 第9回運営委員会 19日 特任教員の選考 19日 客員教員の選考	
2月	13日	修了生(OB)講演会・第4期修了生による「第4期修了ポスターセッション」(於:第一食堂内「れんが館」)	14日 第3回学務委員会 23日 第10回運営委員会	
3月	23日	第4期生修了証授与	15日 第11回運営委員会	

2012(H24)年度

月	主な出来事、行事等	海センター内活動	備考
4月	第5期:「統合的海洋管理学Ⅱ」開講 (4/9 昼休み オリエンテーション) (4月9日～7月23日:毎週月曜 第4限)	1-31日 第5期「統合的海洋管理学」履修登録受付 23日 e-ニュース No11配信 26日 第1回運営委員会	
5月		10日 役員懇談会 23日 第2回運営委員会	

6月	5日 第15回 海事・海洋産業の動向セミナー 19日 第16回 海事・海洋産業の動向セミナー 26日 第17回 海事・海洋産業の動向セミナー	13日 第3回運営委員会	
7月	3日 第18回 海事・海洋産業の動向セミナー	12日 第4回運営委員会	
8月	24日 水産総合研究センター連携協議会(第1回) (於:横浜国大 共同研究推進センター2階セミナー室) 26-31日 PULショートステイ(SS)プログラム実施(参加学生:16名)		
9月		13日 第5回運営委員会 21日 e-ニュース No12配信	
10月	第6期:「統合的海洋管理学Ⅰ」開講 (10/1 昼休み オリエンテーション) (10月1日~2月19日、毎週月曜 第4限)	1-31日 第6期「統合的海洋管理学」履修登録受付 23日 第6回運営委員会	
11月		19日 e-ニュース No13配信 22日 第7回運営委員会	
12月	10日 シンポジウム「東京湾・相模湾における津波災害と沿岸防災」開催* (於:横浜市開港記念会館)	6日 教員選考委員会 13日 第3回学務委員会 13日 第8回運営委員会	*上記シンポジウム・シリーズ第10回
平成25年 1月		1日 客員准教授発令 10日 第9回運営委員会 16日 e-ニュース No14配信	
2月	19日 修了生(OB)講演会・第5期修了生による「第5期修了ポスターセッション」 (於:附属図書館 1階メディアホール・情報ラウンジ) 20-28日 SVプログラム* (イギリスサウサンプトン)	21日 第10回運営委員会	*SV: Short Visit
3月	22日 第5期生修了証授与	7日 教員選考委員会 21日 第11回運営委員会	

6. 財務報告

(単位:千円)

	2007	2008	2009	2010	2011	2012
	H19 年度	H20 年度	H21 年度	H22 年度	H23 年度	H24 年度
	金額	金額	金額	金額	金額	金額
日本財団助成金等	5,000	29,000	28,700	24,400	28,680	29,000
文部科学省 特別教育研究経費	0	14,000	14,000	12,550	0	0
学内負担金	2,000	5,700	4,600	5,572	4,673	2,924
合計	7,000	48,700	47,300	42,522	33,353	31,924

7. 外部評価報告

海センターが創設され、活動を開始して4年半が経過したのに伴い、2011年6月7日、横国大みなとみらいキャンパス会議室において、国立大学法人横浜国立大学統合的海洋教育・研究センターの活動に対する評価を行う外部評価委員会が開かれた。海センターの活動と、大学院副専攻プログラム「統合的海洋管理学プログラム」の成果に対し、5人の外部評価委員が、以下のような評価報告書を取りまとめた。

以下、全文を掲載する。

.....

外部評価委員長による総評

はじめに

横浜国立大学は2007年6月に部局横断的な文理融合型組織「統合的海洋教育・研究センター」（以下「海センター」と略す）を設立し、大学院副専攻プログラム「統合的海洋管理学プログラム」による大学院修士課程の教育研究を開始した。「海センター」はこれまで各部局の小グループにより行われていた海に関する教育研究活動の連携と強化を図るための組織として生まれたものである。この組織の発足に当たっては、横浜国立大学（以下「横国大」と略す）で個々に海に関する教育と研究を行ってきた先生方の『「海の街、港町、横浜」で海の教育と研究を行う』との熱意に支えられて誕生した「組織であり教育・研究プログラム」である。さらに2007年の「海洋基本法」成立、2008年の「海洋基本計画」策定を大学教育から支えようとの壮大な志を持って準備、開始された教育研究体制、プログラムである。

2011年6月7日、横国大みなとみらいキャンパス会議室において、国立大学法人横浜国立大学統合的海洋教育・研究センターの4年半の活動に対する評価を行う外部評価委員会が開かれた。そこでは「海センター」の活動と、大学院副専攻プログラム「統合的海洋管理学プログラム」の成果に対し、5人の外部評価委員が質問し、忌憚ない意見を述べ、「海センター」と「プログラム」のますますの活躍を期待した。

総評は委員長を仰せつかった高井が個人的な思いを込めつつ、各委員の評価内容を基にとりまとめたものである。本稿の文責は総べて高井にあることは言うまでもない。

各委員の評価書は個別に掲載されるのでそれをご覧頂きたい。

評価は、[評価項目Ⅰ]：教育活動、[評価項目Ⅱ]：研究活動、[評価項目Ⅲ]：社会との連携・地域活動、国際交流活動、[全体的講評]より構成されている。各評価項目に対し、1～5の評点を付すことになっている。おおむね、各委員の評価点は4以上であったことを述べておく。

○ [評価項目Ⅰ] 教育活動

[優れている点]

横国大は「統合的海洋教育・研究センター」設置に向け2007年以前から継続的に努力を重ねて来た。横国大のDNAには、船、港湾土木、海洋環境、外交・貿易があり、造船工学をはじめとする海洋に関する工学分野では長い伝統と実績を持っている。港湾土木、海洋環境汚染、生物に対する汚染リスク、海上輸送基地としての港町、交易の実

学、海上紛争解決等々、これらの実績を組み合わせることが重要である。

これら工学系、人文・社会科学系、環境科学系に属す海の教育と研究に関心を持つ教員を中心に、お互いの専門分野を尊重し重視しつつ、海に取り組む「統合的海洋管理学プログラム」が生まれた。世界の国々がさらなる利用価値を求めて乗り出す「海」にわが国の若い学生諸君が関心を抱く取っ掛かりとして、副専攻プログラムが生まれた。主専攻の修了証書に加え、「統合的海洋管理学修了証」を学長名で授与することは学習のモチベーションと付加価値を高める。

「統合的海洋管理学プログラム」は必修コア科目として「統合的海洋管理学Ⅰ」、「統合的海洋管理学Ⅱ」を設けている。このプログラムでは、海のことを多面的に理解してもらうために、「海を知る、海を守る、海を利用する」という学術会議海洋科学部の思いに、「海を管理する、海洋教育」を付加し「海洋基本法の精神」とし、序章「海洋政策概論」を加え、6部30コマの講義を提供している。この必修コア科目を学ぶことで「海」が俯瞰できるようになっている。

これらの科目に加え学生が所属する学系の科目を履修し、定められた必要単位数を取得してはじめて副専攻修了の運びとなる。

コア科目の個々の講義内容は我々が見ても魅力ある講義科目であり、一般社会人にも開かれた教養科目である。この講義の善し悪しが副専攻志望者の定着率の向上に結びつくことになる。

海外インターンシップは他民族、他の地域の人々がどのように海に向かうのかを知る上でも、また、若者が日本以外の世界を知るためにも貴重な枠組みである。

[改善を要する点]

「統合的海洋管理学プログラム」に学生を集めるためには、学部1年生の時から横国大に「海」のプログラムがあることを宣伝することが必要である。海の魅力を知ってもらうためには真鶴の「理科教育実習施設」の利用が欠かせない。安全に配慮しつつ「親水」を実現したい。船に乗せたり、見学する事も大切である。海に関する教育は実学によることが効果的である。海岸が潰された場所の醜さも見学する必要がある。

教育効果を上げるため、履修学生が交流できる場所が必要であり、異なる分野の学生に横串を刺し、親しくなれることが新しい分野の展開に繋がる。

○ [評価項目Ⅱ] 研究活動

[優れている点]

このプログラムに参加してきている教員は新しい試みに対し常に挑戦的であり、研究業績を上げていることが解る。横串を積極的に利用し新しい分野へ研究の目を向けたい。

連携を結んでいる研究機関との共同研究、施設の利用等による新領域での研究が広がっていることは評価に値する。

一般的に言えば、教員が「研究」を志向している姿は通常であるが、とりわけこのプログラムにとり組んでいる教員の業績を見ると研究に対するポテンシャルは高く、アグレッシブである。

[改善を要する点]

文理融合の本プログラムに於いて両者の交流による研究分野の開拓と、研究成果を期待したい。組織としての実態を研究費の点から支援できる学内の工夫を期待したい。

海洋環境整備における技術と法制度の問題、などお互いの知識を共有することが望ましい。沿岸利用における技術と環境法制度、海上風力発電と立地の問題等々、海の利用を節度を持って行うための法整備について両者の協働

作業を期待したい。

○ [評価項目Ⅲ] 社会との連携・地域貢献活動、国際交流活動

[優れている点]

- ・横浜という地の利を生かし様々な海に関するシンポジウムを開催し、横浜国立大学に海洋に関する教育・研究を積極的に行う人材があるという事を着実に示してきていることは評価できる。地域で働く人、地域に住む人々に、自分たちの街の持つ意味と、その文化について理解を得るような企画を持ったシンポジウムは地域の人の心を弾ませよう。横浜から少し離れた地にまだまだ美しい海が広がっていることをも伝えたい。その恐ろしさも地質上の痕跡を解説する事で理解は深まるであろう。
- ・国際港湾都市横浜であるだけに、国際色豊かなプロジェクトが企画されており、学生を含む市民にも国際連帯が実感できることが文化の多様性を互いに尊重する視点から欠かせない活動である。
- ・大学院生を海外へインターンシップとして送り出している点は評価出来る。
- ・JAMSTEC、水産総合研究センター、海上技術安全研究所等との連携を果たしており、今後の研究、技術供与等の広がり期待できる。

[改善を要する点]

- ・一方的な役務だけではない連携が取れるように地域の中ではお互いに協力し合いながら活動することが必要である。一方的な愛はくたびれ疲弊する。
- ・地域貢献のあり方については十分な話し合いをし、相互に win-win の関係になるような企画を立てることが必要であろう。

○ [全体講評]

- ・個々の評価委員に共通している意見は、この教育・研究プログラムがユニークであり、極めて丁寧に組み立てられており、若い学生諸君を副専攻プログラム「統合的海洋管理プログラム」へと導いた点で高く評価している。また、すでに人材養成の面からも海に関連した分野に就職している学生もおり今後の発展が期待できる。
- ・しかし様に懸念している材料は、これからのセンター運営に必要な資金の問題であろう。本センターはどちらかと言えばマネジメントを行う組織であり、研究費を調達する必要は少ないものの、特任教員や事務職員等のことを考えると人件費の確保が焦眉の課題である。学長裁量経費等の配分を実現する中から一層強固な組織の確立を期待したい。そのためにも文理融合を真に実現し、融合テーマでの競争的資金の獲得を図りたい。
- ・リーディング大学院への挑戦もそのひとつであろう。学内的なコンセンサスを図りながら強固な「統合的海洋管理学プログラム」の確立を望みたい。

評価を終えて

「海センターの組織」と「統合的海洋管理プログラム」の評価委員会は 2011 年 3 月 17 日に開催されることになっていた。しかし 3 月 11 日の東日本大地震とそれに伴う大津波、そして未だになかなか出口の見えてこない福島原発の発災は、我々の予定をいとも易々と潰してしまった。「統合的海洋管理プログラム」が十分に成熟し、震災や津波からの減災を十分に実現できるレベルに達することができるようになることが期待される事項だった、と思っ

は私だけでは無かっただろう。

海と我々がどのように向き合い、その恩恵を上手に享受する術を私達は未だ十分に確立していない。この震災と大津波の経験から我々が学ぶべき事は、謙虚に自然の物理力に対する畏怖の念を持つと同時に、その力を自然の恵みとして感じ、利用する仕組みを作りあげる技術力を養い自然力と共存するしたたかさを我々が持つことが必要ではないのだろうか。

そのためには一人でも多くの若者が、海の魅力にとりつかれ、海洋に関連する分野で活躍し、海からの恵みを人類が共有する仕組みを世界に打ち立てていただきたい。横国大の「海センター」と「統合的海洋管理プログラム」が大きな礎を横浜の地に築くことを期待したい。

そのことがこの大震災で亡くなった方々への鎮魂でもあり、「日本」が「三陸の地域」が、海の恵みを一身に受けた不死鳥が災害の地から雄々しく舞い上がるのである。

横浜国立大学統合的海洋教育・研究センター外部評価委員長
高井 陸雄

外部評価委員の個別評価

●東京海洋大学名誉教授 高井陸雄氏

〔評価項目Ⅰ〕教育活動

低 ————— 高

○評価：

(1 -- 2 -- 3 -- 4 -- 5)

○意見〔優れている点〕：

多くのカリキュラムが用意されており、学生の「海」への導入という点では優れている。

○意見〔改善を要する点〕：

- ・オリエンテーションが大切ですね。
- ・学生間の交流を促す場が必要。
- ・基本に海を知る学習が必要である。

〔評価項目Ⅱ〕研究活動

低 ————— 高

○評価：

(1 -- 2 -- 3 -- 4 -- 5)

○意見〔優れている点〕：

- ・JAMSTEC、水総研との間での連携協定をもとに、海の生態、海洋地質学、地球学の研究が進んでいる。
- ・発展が期待できる。
- ・論文発表も活発であり、研究レベルは高い。

○意見〔改善を要する点〕：

- ・社会文科系での視点からの研究も期待したい。

〔評価項目Ⅲ〕社会との連携・地域貢献活動、国際交流活動

低 ————— 高

○評価：

(1 -- 2 -- 3 -- 4 -- 5)

○意見〔優れている点〕:

- ・地域の大学の特色を出したシンポジウムの企画は、海港都市横浜にはぴったりである。
- ・地域を特に意識したい。

○意見〔改善を要する点〕:

- ・科学的な視点から、中高生へのアウトリーチを考えても良い。

〔全体的講評〕

・海に関するまとまった教育「体系」が無い横国大にこれだけまとまり、先鋭な結果を作り出す集団が生まれて来たことを評価したい。

・教員の意識の高さが期待されると思う。教育とは息の長い事業です。海は姿を変えながらも無くならない。それを「知り、守り、利用する」その為に活動して下さい。

●東京大学大学院新領域創成科学研究科教授 磯部雅彦氏

〔評価項目Ⅰ〕教育活動

低 —————→ 高

○評価:

(1 -- 2 -- 3 -- 4 -- 5)

○意見〔優れている点〕:

- ・コア科目である統合的海洋管理学Ⅰ、Ⅱは、学際的視点を養い、海洋の諸問題を俯瞰するために極めて効果的な科目であり、本プログラムのような横断型の組織でなければなし得ないものであって、高く評価できる。
- ・学生による評価も良好である。
- ・多額の経費を必要とする海外インターンシップを、資金の運用を効率的に行いながら実現している。
- ・関連科目は法制度から、科学技術を含む総合的なプログラムを構成するのにふさわしいものである。

○意見〔改善を要する点〕:

・履修する学生が交流することが、横串というこのプログラムの鍵を実現するための一要素となると思われる。これを推進するための空間の確保や機会の提供が行えるように、大学の協力が得られるとよい。

〔評価項目Ⅱ〕研究活動

低 —————→ 高

○評価:

(1 -- 2 -- 3 -- 4 -- 5)

○意見〔優れている点〕:

・センターに所属する教員は、研究業績リストに見られるように、このプログラム期間中に先端的な数多くの研究成果を幅広い分野で上げている。

○意見〔改善を要する点〕:

・大学の総合的プログラムとして、今後も学長裁量経費や裁量ポスト等を利用して必要な資源（資金や人的資源）を確保できるとよい。

〔評価項目Ⅲ〕社会との連携・地域貢献活動、国際交流活動

低 —————→ 高

○評価:

(1 -- 2 -- 3 -- 4 -- 5)

○意見〔優れている点〕:

・海洋教育は実社会での問題把握、解決手段の研究開発が必須である。この分野で世界的にトップクラスにある海洋研究開発機構との連携を連携講座の設置を含めて強力に推進したことは、適切なことと評価できる。

・成果の社会還元という視点でも、数多くのシンポジウムを開催し、多数の参加者を得て、効果を上げた。

○意見〔改善を要する点〕:

・社会連携を進めながら、連携相手との間で人材や施設の有効利用を今後もさらに進めるべきである。

〔全体的講評〕

・このセンターによる海洋に関する教育研究の試みはこれまでになかったユニークなものであり、海洋に関する国際的、国内的緊急性に鑑みても今後も継続的に発展させるべきである。

・社会連携を含めて、海洋に関わる幅広い教員を集めて組織化し、海洋を統合的にとらえる教育研究の拠点ができた。このセンターにおける研究業績は質が高く、多岐にわたる多くのものがあり高く評価できるとともに、修了した学生はその知識を活かすことが期待される企業等に就職しており、将来の海洋分野の発展に大いに寄与するものと期待される。

・このセンターの規模から考えると、余りにも多くの取組を始めるのは得策でない。

・このセンターの教育研究機能の質と量に鑑みて、強固で安定的な事務組織が必要であると思われる。是非ともそのような環境を整えられるように努力されたい。

・次期に向けては、ある程度明確な目標に絞って活動を進めるのがよいのではないか。

●（独）海洋研究開発機構 理事 堀田 平氏

〔評価項目 I〕教育活動

低 —————→ 高

○評価:

(1 -- 2 -- 3 -- 4 -- 5)

○意見〔優れている点〕:

学問領域に「陸上学」というような分野は無く、人文科学分野のあらゆる領域がこれを構成しているように、「海洋」においても海洋に関わるあらゆる分野を包括することによって初めてその実態を把握し、これを活用することが可能となる。従って、海洋の教育・研究・事業は“文理融合”の環境の下で行われなければ不合理であるし、不効率な領域である。しかしながら、我が国においてはこれまでその視点に立った活動は各分野間の“軋轢”などにより具現化するに至ってこなかった。

これに対して国立大学法人横浜国立大学(以下、「YNU」)統合的海洋教育・研究センター(以下、「海センター」)におかれては、YNUに海洋に係わる殆どの領域の国際的にもトップレベルの教職員(研究者)を有し、それぞれが各人の活動を熟知しているという“適切な規模の大学”であるという特徴を最大限に活用され、まさに前述の視点に正面から取り組み、関係の教職員(研究者)を実質的に“横糸”で繋げ、学際的な諸活動を具体的に進められてきたことは高く評価できる。

とりわけ海センターに所属する学生に対して、当初から学際的、包括的なカリキュラムに基づき教育し、“海”に様々な関わりを持つ横浜という地の利を利用して、既に大学院生教育にその成果を見出すまでになっている。

○意見〔改善を要する点〕:

・文理間の真の学術的な交流・融合が進み、“オールラウンドプレイヤー”を社会に送り出すにはいままの努力が必要と思われる。例えば、文系出身の学生と理系出身の学生が共同で両者の視点をもとに修士論文を執筆するなどの活動が行われれば、更に新たな展開が望めるのではないかと思料する。

・学生が所属する学部を超えて人間的な交流が出来る環境が整備されることが期待される。例えば、共通の研究室

(居室)の整備や、共同での活動の場、などが期待される。

〔評価項目Ⅱ〕研究活動

低 \longrightarrow 高

○評価：

(1 .. 2 .. 3 **4** .. 5)

○意見〔優れている点〕：

今後の科学研究、とりわけ海洋を含めた地球科学分野においては、従来からの学問分野（例えば、海洋物理学、海洋化学、海洋生物学、地質学、地球物理学など）がそれぞれの垣根を取り払って相互に交流・連携し、協同で共通の課題に取り組むことが必要とされている。このようななかで、YNUは統合的な海洋学の推進を目指した海センターを構築され、そこに所属される研究者（教員）が各自の専門分野を超えて日常的に交流できる環境が整備され、既に理系の研究者（教員）の間では幾つもの交流の実例とその成果が得られつつあることは高く評価できる。

○意見〔改善を要する点〕：

海センターは文理融合まで含めた統合的海洋学を目指しているが、まだ社会科学系と自然科学系の研究者（教員）間の研究上で具体的な交流・連携が進んでいないように思われる。このような融合は我が国でも実例は多くなく、相当にチャレンジングではあるが、海洋の真の理解のためには必要であろうことから、今後は是非とも具体的に成果を輩出できるような研究者（教員）間の密な交流のための環境・メカニズムを整備して、実現して頂きたい。

〔評価項目Ⅲ〕社会との連携・地域貢献活動、国際交流活動

低 \longrightarrow 高

○評価：

(1 .. 2 **3** .. 4 .. 5)

○意見〔優れている点〕：

・“横浜”という海洋に深く関わる土地に立脚したイベント、活動を積極的に実施されており、社会とりわけ地元への貢献に最大の努力をされていると評価できる。

・海外インターン制度などを促進されて、学生に国際性を持たせるよう努力されていることは高く評価できる。昨今、若者が海外に出ることを躊躇する風潮が我が国全体を覆っているとのことであるが、海センターにおいてはそのような雰囲気は無く、学生が積極的に交際交流を広めようとしているように感じられ、頼もしい限りである。

○意見〔改善を要する点〕：

・ここまで行われてきたイベント（講演会、シンポジウムなど）に加えて、YNU海センターがその機能と能力を最大限に発揮して社会・地域に対して具体的に貢献する“事業”が行われることを期待する。

・海センターが、学生の国際交流の場のみならず、海外から世界をリードするような研究者や最新で幅広い情報が集まる場となられることを期待する。

〔全体的講評〕

海洋という場で“文理融合”を構築・実践され、その成果を出されるまでになってきたことを高く評価する。今後の海洋科学技術は、まさに“学際的”、“融合的”活動が主体となっていくであろうことから、これを我が国のなかで先駆けて具現化された努力に敬服するとともに、これを着実に運用され、教育にも、研究にもその成果を出されつつあることを高く評価する。

今後は、社会科学分野がいま少し見える形、そして“文理融合”を具現化した学際的活動がより活発になる形で運営され、多くの学生を社会に送り出すとともに、“文理融合”を基盤としたユニークで先端的な研究活動を推進されることを期待する。

● (独) 水産総合研究センター 研究推進部 研究主幹 中田 薫氏

〔評価項目Ⅰ〕教育活動

低 → 高

○評価：

(1 -- 2 -- 3 -- 4 -- 5)

○意見〔優れている点〕：

- ・ 横浜という土地柄を前面に出して特徴あるプログラムを作ろうとする姿勢が評価できる。
- ・ 分野の壁をこえて、考え方や意見を交換する機会に恵まれ、学生たちは物事を様々な視点から見るという得難い経験を得ることができたであろう。

○意見〔改善を要する点〕：

まだ開始してまもないシステムであり、徐々に様々な改善がなされていることと思う。6年を超えて次に続けていけるシステムを作り上げていくことが、さらなる飛躍につながると考える。

〔評価項目Ⅱ〕研究活動

低 → 高

○評価：

(1 -- 2 -- 3 -- 4 -- 5)

○意見〔優れている点〕：

統合的海洋教育・研究センターという組織が形成されたことで、これまで教員の方達が個人的つながりで行ってこられた学外との共同研究がやりやすくなったと推察される。研究の深化、高度化のチャンスなので、そのメリットを今後も生かしていただきたい。

○意見〔改善を要する点〕：

統合的海洋教育・研究センターが発足して間もないため、学内の研究活動を分野をこえて共同で実施するという部分では、まだ弱いと見受けられた。学生たちの指導の中から新たな分野横断的な研究のニーズが生まれることを期待する。

〔評価項目Ⅲ〕社会との連携・地域貢献活動、国際交流活動

低 → 高

○評価：

(1 -- 2 -- 3 -- 4 -- 5)

○意見〔優れている点〕：

シンポジウムに出させていただいたが、一般市民の出席者が多く、認知度もかなり高くなっていると感じられた。また、毎年、限られた予算の中でコンスタントに学生を海外に派遣して、経験を積ませている点が評価できる。

○意見〔改善を要する点〕：

研究成果の社会への還元に、さらに努めていただきたい。

〔全体的講評〕

立ち上げられて間もないのに、短期間で様々な成果を出されている点を評価します。私たちの研究所でも、社会科学系と理系の研究者が共同研究を進める中で、新たな研究分野が生まれ、興味深い成果がえられつつあります。

そうしたことが容易にできる組織であり、研究面においても教育面に於いてもさらなる飛躍を期待します。

● (財) 日本科学協会 常務理事 伊藤 隆氏

〔評価項目Ⅰ〕教育活動

低 —————→ 高

○評価：

(1 .. 2 .. 3 .. 4 .. 5)

○意見〔優れている点〕：

確実に修了生を毎年出し、確実にこの方面のプロが横浜の地において養成されている。

○意見〔改善を要する点〕：

とりあえずの目標として、例えば 100 名の修了生、すなわち 100 名の ALUMNI が良いのではないのかと思われる。100 名規模の陣容が「勢力」として何事を為すにも、訴えるのにも必要な気がします。

〔評価項目Ⅱ〕研究活動

低 —————→ 高

○評価：

(1 .. 2 .. 3 .. 4 .. 5)

○意見〔優れている点〕：

JAMSTEC、水総研との提携など素晴らしいと思う。

○意見〔改善を要する点〕：

総合大学として、様々の分野の研究機関との提携をより強化されたら如何かと思います。

〔評価項目Ⅲ〕社会との連携・地域貢献活動、国際交流活動

低 —————→ 高

○評価：

(1 .. 2 .. 3 .. 4 .. 5)

○意見〔優れている点〕：

日本全体ですら、統合的海洋研究、教育がなかなか行われにくい中、世界に向け、強い意志と努力で海外へのインターンシップ、「大学リーグ」を進められていると思う。

○意見〔改善を要する点〕：

ローカリティとグローバリティ両者に資する形の事業内容をより鮮鋭にして各プログラムを進められたらと思う。

日本全体でも、研究・教育両面とも不十分な現状の中、大変ではあると思うものの、世界全体でもしかりであり、産・官・学各界でみても、「統合的海洋」の人材が偏在もしくは不足しているのは間違いないので、国内外、学内外にこだわらず、COSIE とそれぞれの相手の特質(得手、不得手)を際立たせながら、相補うような「提携」をより多く深めていけたらと思う。

〔全体的講評〕

海洋に関する日本の未来に向けてのリーディング機関としての努力が、短期間の中で、よく成し遂げられたと思います。

今後は、学内外、学界内外、教育界内外、国内外、産・官界との連携をより拡張し、もって戦略的に外部的な刺激・リソースを取り込むことによる副次的効果も意識的に加えることによって、COSIEとしての独自性と先駆性をより鋭利に図ることが可能かと思われます。

と同時に、東大、海洋大、京大等、同じような動きを示している機関との差別化、固有化も必要な中、それらとの戦略的な提携を含めて、より一層COSIEとしての独自性・固有性を強調することにも寄与するかと思われます。これらとの提携をもって、海外各地の同様アライアンス等との連携も可能になるかと思われます。

また、スポンサー向けには、より具体的な目標（量・質ともに）あった方がよいと思います。

さらに、「卒業生」から官界への就職を戦略的に志向し、後輩が目指す、プロの「世界」を作ることも考えられたらと思います。

付 属 資 料

海センターの組織と教員一覧

海センター関係教員の活動実績

[付属資料:海センターの組織と教員一覧]

<平成 25 年 3 月現在>

<統合的海洋教育・研究センター教員一覧>

以下に、海センターの教員一覧を示す。

センター長: 池田 龍彦 <http://kenkyu-webjmk.ynu.ac.jp/Profiles/0009/0000510/profile.html>

センター専任教員:

特任教員(教授) 中原 裕幸 <http://kenkyu-webjmk.ynu.ac.jp/Profiles/0027/0001704/profile.html>

特任教員(研究教員) コンパル ラドミール <http://kenkyu-webjmk.ynu.ac.jp/Profiles/0027/0001705/profile.html>

センター非常勤教員:

客員教授 小澤 宏臣

客員教授 來生 新

客員教授 古川 恵太

客員准教授 牧野 光琢

<http://www.k4.dion.ne.jp/~mitsutak/Index.htm>

センター兼務教員:

(大学院教育学研究科)

教授 種田 保穂

<http://kenkyu-webjmk.ynu.ac.jp/Profiles/0002/0000251/profile.html>

准教授 河湍 俊吾

<http://kenkyu-webjmk.ynu.ac.jp/Profiles/0002/0001263/profile.html>

准教授 津野 宏

<http://kenkyu-webjmk.ynu.ac.jp/Profiles/0002/0001264/profile.html>

(大学院環境情報研究院)

教授 有馬 眞

<http://kenkyu-webjmk.ynu.ac.jp/Profiles/0013/0000302/profile.html>

教授 石川 正弘

http://er-web.jmk.ynu.ac.jp/html/ISHIKAWA_Masahiro/ja.html

教授 伊藤 公紀

<http://kenkyu-webjmk.ynu.ac.jp/Profiles/0010/0000083/profile.html>

教授 菊池 知彦

<http://kenkyu-webjmk.ynu.ac.jp/Profiles/0002/0000334/profile.html>

教授 益永 茂樹

<http://kenkyu-webjmk.ynu.ac.jp/Profiles/0013/0000428/profile.html>

教授 松田 裕之

<http://kenkyu-webjmk.ynu.ac.jp/Profiles/0013/0000650/profile.html>

教授 間嶋 隆一

<http://kenkyu-webjmk.ynu.ac.jp/Profiles/0002/0000622/profile.html>

教授 持田 幸良

<http://kenkyu-webjmk.ynu.ac.jp/Profiles/0002/0000060/profile.html>

准教授 及川 敬貴

<http://kenkyu-webjmk.ynu.ac.jp/Profiles/0013/0001277/profile.html>

准教授 下出 信次

http://www.mmcer.ynu.ac.jp/shimo/my_site/Welcome.html

准教授 白崎 実

<http://kenkyu-webjmk.ynu.ac.jp/Profiles/0002/0001083/profile.html>

准教授 村井 基彦

<http://kenkyu-webjmk.ynu.ac.jp/Profiles/0013/0000091/profile.html>

(大学院国際社会科学研究科)

教授 荒木 一郎

<http://kenkyu-webjmk.ynu.ac.jp/Profiles/0009/0000592/profile.html>

教授 池田 龍彦

(前掲)

教授 加藤 峰夫

<http://kenkyu-webjmk.ynu.ac.jp/Profiles/0009/0000340/profile.html>

教授 柳 赫秀

<http://kenkyu-webjmk.ynu.ac.jp/Profiles/0009/0000336/profile.html>

(大学院工学研究院)

教授	荒井 誠	http://kenkyu-webjmk.ynu.ac.jp/Profiles/0010/0000374/profile.html
教授	川村 恭己	http://kenkyu-webjmk.ynu.ac.jp/Profiles/0010/0000413/profile.html
教授	鈴木 和夫	http://kenkyu-webjmk.ynu.ac.jp/Profiles/0010/0000258/profile.html
教授	角 洋一	http://kenkyu-webjmk.ynu.ac.jp/Profiles/0010/0000247/profile.html
教授	日野 孝則	http://er-webjmk.ynu.ac.jp/html/HINO_Takanori/ja.html
准教授	西 佳樹	http://kenkyu-webjmk.ynu.ac.jp/Profiles/0010/0001643/profile.html
(大学院都市イノベーション研究院)		
教授	勝地 弘	http://kenkyu-webjmk.ynu.ac.jp/Profiles/0010/0000444/profile.html
教授	佐々木 淳	http://kenkyu-webjmk.ynu.ac.jp/Profiles/0010/0000090/profile.html
教授	椿 龍哉	http://kenkyu-webjmk.ynu.ac.jp/Profiles/0010/0000277/profile.html
教授(副学長)	山田 均	http://kenkyu-webjmk.ynu.ac.jp/Profiles/0013/0000281/profile.html
准教授	鈴木 崇之	http://er-webjmk.ynu.ac.jp/html/SUZUKI_Takayuki/ja.html

外部協力機関：

国土交通省／(独)海洋研究開発機構(JAMSTEC)／(独)水産総合研究センター(FRA)
(独)石油天然ガス・金属鉱物資源機構(JOGMEC)／(独)港湾空港技術研究所(PARI)／
(独)海上技術安全研究所(NMRI)

放送大学／東京大学／青山学院大学／中部大学／海上自衛隊幹部学校

(一社)海洋産業研究会／(財)シップ・アンド・オーシャン財団(海洋政策研究財団)／
(一財)日本海事協会／(一社)横浜水辺のまちづくり協議会／NPO法人海辺つくり
研究会

(株)海洋工学研究所／(株)商船三井／大成建設(株)／日本郵船(株)／
三井造船(株)

統合的海洋教育・研究センター関係教員の活動実績の概要

所 属: 統合的海洋教育・研究センター特任教員(教授)
教員名: 中原 裕 幸
[著作、査読付き発表論文]
(単著論文)沿岸域総合管理に関する一考察 ―地方公共団体の管轄範囲を巡って―、日本海洋政策学会誌創刊号(平成23年10月)
(単著論文)沿岸域の総合的管理に関する一考察(Ⅱ) ―海洋基本法・海洋基本計画と政府年次報告の対比分析を手掛かりに―、日本海洋政策学会誌第2号(平成24年11月)
(単著論文)新しい海洋基本計画の策定に向けて: 海洋政策の進展状況と残された課題、海洋白書2013、第1章第1節 / (単著論文)新たな海洋産業の創出、海洋白書2013、第6章第2節、海洋政策研究財団監修、成山堂書店
(共著著作)統合的海洋管理とは: 内外の統合的海洋管理の枠組み、海洋生態保全学(第3章第3節)、講談社、2012年7月10日刊
[国・地方自治体・独立行政法人・公益法人・学会等における活動(役員、委員就任等)]
一般社団法人海洋産業研究会常務理事
独立行政法人海洋研究開発機構監事
シップ・アンド・オーシャン財団(海洋政策研究財団)理事
一般財団法人日本水路協会理事
財団法人国際港湾協会協力財団評議員
テクノオーシャン・ネットワーク理事
海洋資源・産業ラウンドテーブル幹事・事務局長
特定非営利活動法人日本水中ロボネット監事
海洋政策研究財団監修「海洋白書」編集委員会委員 / 同、海洋総合政策研究委員会委員 / 同、沿岸域総合管理モデル研究委員会委員 / 同、沿岸域総合管理教育カリキュラム検討委員会委員
公益財団法人日本科学協会: 笹川科学研究助成海洋・船舶科学系選考委員
日本海洋政策学会理事・事務局次長・広報委員長
土木学会海洋開発委員会委員 / 論文審査委員
Marine Technology Society 日本支部セクレタリ (同Fellow、2001年授与)
岩手県: いわて海洋研究コンソーシャム・アドバイザー、希望郷いわて文化大使
鹿児島県海洋再生可能エネルギー利用促進研究会委員
長崎県海洋エネルギー構想有識者会議委員
山形県エネルギー政策アドバイザー
(独)石油天然ガス・金属鉱物資源機構(JOGMEC) Peer-Reviewer
資源エネルギー庁 海底熱水鉱床採鉱技術開発等調査公募選定委員会委員
全国漁業協同組合連合会、海洋再生可能エネルギー利用促進のあり方にかかる有識者検討会委員
[国際会議、国内重要会議等での基調講演、プレゼンテーション等]
(平成23年度)
9月12日、平成23年度日本沿岸域学会全国大会パネルディスカッション、海洋政策から見た沿岸域総合管理と復興への在り方、(於: 広島工業大学 三宅の森 Nexus21)
10月31日、シンポジウム: 大地震・大津波に備えて～海からの視点で考える～、「津波対策におけるマリンフロートの活用について」、(於: 神戸国際会議場メインホール)
11月1日、OETR(海洋エネルギー東北再生)シンポジウム、「津波対策としてのマリンフロートの活用と漁業協調型Offshore Wind Farm の提案」、(於: 岩手大学北桐ホール)
12月1日、LAW OF THE SEA INSTITUTE CONFERENCE、“THE LIMITS OF MARITIME JURISDICTION”、「Ocean Policy in Japan」、(於: The Australian National Centre for Ocean Resources and Security (ANCORS), University of Wollongong, Australia)
12月8日、海洋情報の一元化に関する国際シンポジウム、セッション2、「海洋産業の振興における海洋情報のニーズ」、(於: 日本財団 ビル会議室)

12月4日、International Conference on Complex Exploration of the Ocean and Continental Shelf as a Key Factor of APEC Sustainable Development in Session III、「Ocean Resource Development and Promotion of Ocean Industries」、(於:ロシア海事大学訓練船 Nadezhda号、横浜港大棧橋)

3月27日、第2回OETRシンポジウム、「復興への鍵をにぎる漁業と海洋エネルギー」、(於:東京大学駒場リサーチキャンパス(Ⅱ)コンベンションホール)、他

(平成24年度)

4月18日、岩手県議会新産業創出調査特別委員会、「岩手県における海洋研究拠点形成に向けた課題と展望」、(於:岩手県議会第2委員会室)

5月9日、文部科学・学術審議会海洋開発分科会、「海洋基本計画の見直しについて～海洋産業の現状、科学技術・R&Dと産業化の視点から～」、(於:文部科学省3階特別会議室)

5月11日、第51回日本生体医工学会大会 OS2-02:航空・船舶医工学の将来－海洋国家日本の再生、「日本の海洋政策の現状－遠隔離島と海洋資源の重要性－」、(於:福岡国際会議場502号室)

5月31日、海洋基本法戦略研究会第4回会合、「海洋基本計画の見直しに向けた提案－“海洋産業の振興”の視点から－」、(於:ANAインターコンチネンタルホテル会議室)

6月4日、6th World Ocean Forum 2012 Blue Frontiership and Ocean Governance Session I-1. Best Practices and Perspectives of the Integrated Ocean Governance Plan、「Ocean Governance in Japan」、(於:釜山 BEXACOコンベンションホール、韓国)

7月3日、GEF・UNDP・PEMSEAほか5機関、EAS Congress 2012, Subtheme 2, Workshop5, Interdisciplinary Education on Ocean and Coastal Governance: Introducing the Case of YNU-COSIE、(於:Changwan City, 韓国)

8月3日、第23回海洋工学シンポジウム、「洋上風力発電等における漁業協調の在り方について」、(於:日大理工学部駿河台キャンパス)

8月4日、国際漁業学会(JIFRS)シンポジウム:再生可能エネルギーと水産業、「洋上風力発電等における漁業協調について」、(於:東大農学部フードサイエンス棟中島ホール)

8月26日、第3回海洋再生可能エネルギーフォーラム:海洋再生可能エネルギーを利用した地域活性化の現状と展望－持続可能な地域社会の構築と海洋空間の利用推進を目指して－、「海洋エネルギー利用における漁業協調について」、(於:長崎市・長崎ブリックホール)

9月10日、国会図書館立法考査局勉強会、「我が国の海洋政策を考える－海洋基本計画の見直しにあたって－」、(於:立国会図書館本館5階会議室)

11月1日、全国漁業協同組合連合会:海洋再生可能エネルギー利用促進のあり方にかかる有識者検討会、「海洋エネルギー利用と漁業協調について」、(於:東京・コープビル6階全漁連第2会議室)

11月3日、三陸復興・海洋エネルギーシンポジウム、「海洋エネルギー利用と漁業協調について」、(於:岩手県・釜石ベイシティホテル)

11月13日、Fukushima Ocean Impact Symposium、How do we consider the Fukushima Accident from the Perspective on Ocean Policy、(於:東京大学本郷キャンパス山上会館)

12月7日、第3回南駿河湾地域再生可能エネルギー勉強会、「海洋エネルギー利用と漁業協調について」、(於:静岡県牧之原市相良史料館)

2月23日、海洋政策研究財団支援 東京海洋大学大学院合同セミナー:「沿岸域総合管理のモデル教育カリキュラム連続特別講座、「海洋基本法・基本計画と沿岸域の総合的管理」、(於:東京海洋大学 2号館 100B教室)

12月20日、防衛省技術研究本部艦艇装備研究所話題提供、「海洋基本法・海洋基本計画について」、(於:同研究所会議室)

1月23日、JAMSTEC平成24年度賛助会業務報告会、「我が国の海洋政策と海洋産業を考える」、(於:富国生命ビル28階大会議室)

1月27日、ナガサキ・グリーンニューディール:海洋フロンティアプロジェクト『海洋県長崎における海洋再生可能エネルギーの推進』、「水産業と海洋再生エネルギーの共存について」、(於:ベストウェスタンプレミアホテル長崎会議室)

2月12日、釜石市議会東日本大震災復興対策特別委員会、「海洋エネルギーの実証実験海域の導入と漁業協調について」、(於:釜石市役所3階大会議室)

2月28日、山形県エネルギー政策アドバイザーとの意見交換会、「海洋再生可能エネルギーの現状と今後の取組みの方向性について」、(於:山形県庁1003会議室)

[その他、特記事項]

東海大学生物理工学部海洋生物科学科非常勤講師(札幌キャンパス)非常勤講師(H2～:「海洋環境関連法規」、同 大学海洋学部非常勤講師(H8～:「海洋政策及び制度」「海洋産業論」、H20～「海洋政策特論」)

東京大学大学院環境海洋工学専攻非常勤講師(H20～:「環境・海洋政策と技術開発マネジメント」プログラム「海洋政策・産業概論」)

神戸大学大学院海事科学研究科附属国際海事研究センター客員教授(H21～)

所 属: 統合的海洋教育・研究センター

教員名: コンペル・ラドミール

〔著作、査読付き発表論文〕
[1] コンペル・ラドミール「トルコ海峡にみる近代海洋外交」『Ship & Ocean Newsletter』第259号、6-7頁。（単著）
[2] コンペル・ラドミール「昭和初期の芦田1926～1930年」福永文夫・下河辺元治編『芦田均日記一九〇五～一九四五』第5巻、柏書房、31-40頁。（単著）
[3] コンペル・ラドミール「一九二六年（大正一五年・昭和元年）～一九二九年（昭和四年）」福永文夫・下河辺元治編『芦田均日記一九〇五～一九四五』第3巻、柏書房、2012年、1-344頁。（共著・共訳）
[4] コンペル・ラドミール「日本国憲法の制定と沖縄の関係性について」『横浜国際経済法学』第21巻第3号、2013年、167 - 196頁。（単著）
[5] Radomir Compel "Japanese 'new diplomacy' towards Ottoman and Republican Turkey," <i>Journal of Humanities and Social Sciences</i> , 2013, in print.（単著）
[6] コンペル・ラドミール「沖縄と日本の「戦後」の出発点」『報告書（復帰40年沖縄国際シンポジウム）』早稲田大学琉球・沖縄研究所、2013年12月、69頁。（単著）
〔国・地方自治体・独立行政法人・公益法人・学会等における活動（役員、委員就任等）〕
法政大学沖縄文化研究所客員研究員
〔国際会議、国内重要会議等での基調講演、プレゼンテーション等〕
[1] コンペル・ラドミール「沖縄と日本の「戦後」の出発点—沖縄の「分離」を中心として」沖縄国際シンポジウム『これまでの沖縄学、これからの沖縄学』、早稲田大学、東京、2012年3月。（単独）
[2] Radomir Compel, "Japanese marine and economic diplomacy during Taisho and early Showa periods," NAJS International Conference, Aarhus, Denmark, 2013年3月。（単独）
〔その他、特記事項〕
該当なし
所 属： 統合的海洋教育・研究センター、 国土技術政策総合研究所
教員名： 古川 恵太
〔著作、査読付き発表論文〕
（共著）
・海洋生態系調査マニュアル，海洋調査協会，168p.，2013.（共同執筆・監修）
・Resource Base: Global Distribution and Characteristics of Estuaries and Associated Coastal Shores, in Eric Wolanski (Ed.), <i>Treatise on Estuarine and Coastal Science</i> , Elsevier, Vol.1, pp.207-228, 2011.（分担執筆）
（査読付き発表論文）
・Keita Furukawa: Case studies for urban wetlands restoration and management in Japan, <i>J. Ocean and Coastal Mngement</i> , http://dx.doi.org/10.1016/j.ocecoaman.2012.07.012 , 2012.
・古川 恵太, 明田 定満, 鈴木 高二朗, 木村 克俊, 五明 美智男: 特別セッション「閉鎖性水域における環境改善技術について」を終えて, <i>土木学会論文集B3 (海洋開発)</i> , Vol. 68, No. 2, pp. I_1286-I_1290, 2012.
・石井光廣・古川恵太・佐々木淳・柿野純・増田修一・小森明裕・桃井幹夫・麻生晃也: 東京湾底層D0分布の短期予測システムの水産分野への活用に向けた実証的研究, <i>土木学会論文集B2 (海岸工学)</i> , No. 67, No. 2, pp. I_1236-I_1240, 2011.
・丸谷靖幸・アイヌルアブリズ・中山恵介・仲江川敏之・古川恵太・駒井克明・鯨目淑範: 東京湾における貧酸素水塊の解消要因である強風の将来予測に向けて, <i>土木学会論文集B2 (海岸工学)</i> , Vol. 67, No. 2, pp. I_921-I_925, 2011.
・古川 恵太, 明田 定満, 鈴木 高二朗, 木村 克俊, 五明 美智男: 閉鎖性水域における環境改善技術について～ベストプラクティスを探して～, <i>土木学会論文集B3 (海洋開発)</i> , Vol. 67, No. 4, pp. I_19-I_24, 2011.
・玉上 和範, 五十嵐 学, 早川 淳, 津田 宗男, 古川 恵太: 海域における生物生息基盤としてのダム湖浚渫土砂の適応性に関する研究, <i>土木学会論文集B3 (海洋開発)</i> , Vol. 67, No. 4, pp. I_25-I_30, 2011.
・アイヌル アブリズ, 丸谷 靖幸, 中山 恵介, 仲江川 敏之, 古川 恵太: 東京湾の水環境予測を目指したGCMデータの利用, <i>土木学会論文集B3 (海洋開発)</i> , Vol. 67, No. 4, pp. I_328-I_333, 2011.
・吉田大祐, 多部田茂, 石川公敏, 古川恵太: 持続可能性を指標とした沿岸域再生施策の評価, <i>日本海洋政策学会</i> , 創刊号, pp. 26-40, 2011.
・Tomonari Okada, Keisuke Nakayama, Toshiyuki Takao and Keita Furukawa: Influence of freshwater input and bay reclamation on long-term changes in seawater residence times in Tokyo bay, Japan, <i>HYDROLOGICAL PROCESSES</i> , Vol. 25, DOI:10.1002/hyp.8010, 2011.
〔国・地方自治体・独立行政法人・公益法人・学会等における活動（役員、委員就任等）〕
土木学会地球環境委員会
土木学会海岸工学委員会

土木学会地球環境委員会
海洋政策学会広報委員会
水産基盤整備調査委託事業アサリ・干潟グループの評価委員
石西礁湖における航路計画検討委員会
中城湾港泡瀬地区環境監視委員会
中城湾港泡瀬地区環境保全・創造検討委員会
海洋調査協会調査研究委員会海洋生態系調査マニュアルWG
松島湾の海域環境復興を考える検討会
底質浄化工法等検討会
徳山下松港干潟維持管理手法検討委員会
有明・八代海海域環境検討委員会環境再生技術等検討ワーキンググループ
横須賀港湾環境計画中間評価委員会／横須賀港浅海域保全・再生研究会
三番瀬再生実現化試験計画等検討委員会／三番瀬専門家会議
〔国際会議、国内重要会議等での基調講演、プレゼンテーション等〕
〔その他、特記事項〕
(該当なし)
所 属: 教育学研究科
教員名: 種田 保穂
〔著作、査読付き発表論文〕
論文(共著) 一貫校合同による夏期臨海実習Ⅲ—中・高・大学生の連携のモデルケースとして— 谷口真也・井澤智浩・宮本康司・池田威秀・種田保穂・秋山豊子著 慶應義塾大学日吉紀要 自然科学47号、63-81(2010年3月) Koyama,H.Y.Taneda,T.Ishii 2012 The Postbranchial Digestive Tract of the Ascidian, <i>Polyandrocarpa misakiensis</i> (Tunicata:Ascidacea).2 Stomach. Zoological Science 29(2):97-110
〔国・地方自治体・独立行政法人・公益法人・学会等における活動(役員、委員就任等)〕
横浜サイエンスフロンティア高校技術顧問 SSH運営指導委員会委員(西湘高等学校) SSH運営指導委員会委員(神奈川県立総合産業高等学校) お茶の水女子大学サイエンスアンドエデュケーションセンター外部評価委員 平塚中等学校評議員
〔国際会議、国内重要会議等での基調講演、プレゼンテーション等〕
2010年9月27日 相模原市民センター SSH講演会 「生物の色や形にも理由(わけ)がある」
〔その他、特記事項〕
該当なし
所 属: 環境情報研究院
教員名: 有馬 眞
〔著作、査読付き発表論文〕
神奈川県流域圏の多角的アプローチ. 2. 地球科学の視点から:地質の成り立ちと地球化学的リスク. 竹内和彦・佐土原聡 編. 持続可能性とリスクマネジメント 地球環境・防災を融合したアプローチ. UNUレクチャー・シリーズ6. 91-104頁. 国際書院、東京 有馬眞・石川正弘, 神奈川県大流域圏の地質・水循環と水源地の地球科学的リスク, 佐土原聡 編『時空間情報プラットフォーム—流域圏環境への適用』第6章, 東大出版会、7月, 2010 S. Saito, M. Arima, 他, Petrogenesis of the Kaikomagatake granitoid pluton in the Izu Collision Zone, central Japan: implications for transformation. Contrib Mineral Petrol. 163:611-629. DOI 10.1007/s00410-011-0689-1, 2012.

〔国・地方自治体・独立行政法人・公益法人・学会等における活動(役員、委員就任等)〕
JICAプロジェクト「マダガスカル国鉱業振興のための地質・鉱物資源情報整備調査」 技術支援委員会委員 日本学術振興会、科学研究費委員会専門委員 大学共同利用機関法人情報システム研究機構国立極地研究所南極観測評価委員会委員長
〔国際会議、国内重要会議等での基調講演、プレゼンテーション等〕
M. Arima & S. Saito. Neogene granitoid plutons in the Izu Collision Zone, central Japan: transformation of juvenile oceanic arc into mature continental crust. AGU Fall Meeting, San Francisco, December, 2011. M. Arima, Y. Nishizawa, E. Hashimoto, S. Saito, Y. Kanaiwa, R. Cabrera, M. F. O. Tan, J. L. Balon, D. E. S. Baltazar, T. Nakano, R. Kada. Potential risk of heavy metals in the bed sediments for the Laguna de Bay aquatic ecosystem. Community Forum 2012, Development Academy of the Philippines, Tagaytay City, Pihlippines, Sep. 27-28, 2012
〔その他、特記事項〕
所 属: 環境情報研究院
教員名: 石川正弘
〔著作、査読付き発表論文〕
H24年度 Higashino, F., Kawakami, T., Satish-Kumar, M., Ishikawa, M., Maki, K., Tsuchiya, N., Grantham, G. & Hirata, T., 2012. Chlorine-rich fluid or melt activity during granulite facies metamorphism in the Late Proterozoic to Cambrian continental collision zone – an example from the Sør Rondane Mountains, East Antarctica. Precambrian Research, in press. (共著) G.H. Grantham, P.H. Macey, K. Horie, T. Kawakami, M. Ishikawa, M. Satish-Kumar, N. Tsuchiya, P. Graser, S. Azevedo. Comparison of the metamorphic history of the Monapo Complex, northern Mozambique and Balchenfjella and Austhameren areas, Sør Rondane, Antarctica: Implications for the Kuunga Orogeny and the amalgamation of N and S. Gondwana. Precambrian Research, in press. (共著) Naho Otsuji, M. Satish-Kumar, Atsushi Kamei, Noriyoshi Tsuchiya, Tetsuo Kawakami, Masahiro Ishikawa, Geoffrey H. Grantham. Late-Tonian to early-Cryogenian apparent depositional ages for metacarbonate rocks from the Sør Rondane Mountains, East Antarctica. Precambrian Research, in press. (共著)
〔国・地方自治体・独立行政法人・公益法人・学会等における活動(役員、委員就任等)〕
日本地質学会代議員 日本地質学会関東支部幹事 国立極地研究所編集委員 国際学術誌Island Arc編集委員 都市の脆弱性が引き起こす激甚災害の軽減化プロジェクト運営委員会委員
〔国際会議、国内重要会議等での基調講演、プレゼンテーション等〕
該当なし
〔その他、特記事項〕
該当なし
所 属: 環境情報研究院
教員名: 伊藤公紀
〔著作、査読付き発表論文〕
Optical properties and sensing applications of lithium iron phosphate thin films Patima Nizamidin , Abliz Yimit, Ji De Wang, Kiminori Itoh Thin Solid Films, 520 (2012) 6250-6255 Optical Waveguide BTX Gas Sensor Based on Yttrium doped Lithium Iron Phosphate Thin Film Patima Nizamidin, Abliz Yimit, Ismayil Nurulla and K. Itoh ISRN Spectroscopy, Volume 2012, Article ID 606317, doi:10.5402/2012/606317 Effect of copper stress on cup lichens Cladonia humilis and C.subconistera growing in copper-hyperaccumulaing moss Scopelophila cataractae Hiromitsu Nakajima, Kenjiro Fujimoto, Azusa Yoshitani, Yoshikazu Yamamoto, Haruka Sakurai, and Kiminori Itoh Ecotoxicology and Environmental Safety, 84 (2012) 341-346 気候変動問題に適用し得る東洋型リスクマネジメントの考察 栗原崇、伊藤公紀、亀山秀雄 国際プロジェクト・プログラムマネジメント学会誌 7(1), 61-72, 2012-09-15

<p>分相性ポーラスガラス内表面吸着水の電気伝導挙動 Electric Conduction Behavior of Adsorbed Water Inner Surface of the Phase-Separating Porous Glasses 笠井卓也、山崎和子、有坂暁御雄、長澤浩、雨宮隆、伊藤公紀 Takuya Kasai, Kazuko Yamasaki, Akio Arisaka, Hiroshi Nagasawa, Takashi Amemiya, and Kiminori Itoh Electrochemistry, 80(9), 632-635 (2012) http://dx.doi.org/10.5796/electrochemistry.80.632 JOI:DN/JST.JSTAGE/electrochemistry/80.632</p> <p>社会学におけるエントロピー生成率最大化の原理(MEP), 芹沢浩, 伊藤公紀, 雨宮隆, 理論と方法, 26(2), 405-420 (2011).</p> <p>Analysis of bacterial populations in the environment using two-dimensional gel electrophoresis of genomic DNA and complementary DNA Liu GH, Nakamura T, Amemiya T, Rajendran N, Itoh K. Microbes Environ. 2011;26(2):184-7. Epub 2011 Apr 16.</p> <p>地球温暖化問題へのセカンドオピニオン, 伊藤公紀、小川隆雄 科学技術社会論研究, No. 9, 98-112 (2011) Journal of Science and Technology Studies</p> <p>Real-time reverse transcription PCR analysis of trichloroethylene-regulated toluene dioxygenase expression in <i>Pseudomonas putida</i> F1 Jianbo Liu, Takashi Amemiya, Qing Chang, Xiao-jing Xu, and Kiminori Itoh JOURNAL OF ENVIRONMENTAL SCIENCE AND HEALTH, PART B, Pesticides, Food Contaminants, and Agricultural Waste , 2011;46(4):294-300.</p>
<p>Bacterial community structure analysis of sediment in the Sagami River, Japan using a rapid approach based on two-dimensional DNA gel electrophoresis mapping with selective primer pairs, Guo-hua Liu, Narasimmalu Rajendran, Takashi Amemiya, Kiminori Itoh Environ Monit Assess, DOI 10.1007/s10661-010-1868-7. Published online: 08 January 2011</p> <p>『これだけ知っていれば安心 放射能と原発の疑問50』伊藤公紀、日本評論社、2011年8月</p> <p>『生態系の暮らし方』小池、伊藤ら著、東海大学出版会、2012年3月</p>
〔国・地方自治体・独立行政法人・公益法人・学会等における活動(役員、委員就任等)〕
環境省専門委員
〔国際会議、国内重要会議等での基調講演、プレゼンテーション等〕
「太陽の気候影響に関するワークショップ」(名古屋大学、2013年2月26日)招待講演
〔その他、特記事項〕
(株)環境レジリエンス設立(2012年6月)
所 属: 環境情報研究院
教員名: 菊池知彦
〔著作、査読付き発表論文〕
著書
菊池知彦 生物学事典 2011 化学同人 東京 (分担執筆)
菊池知彦 2012 栄養塩はまぐる 海はめぐる一人と生命を支える海の科学 日本海洋学会編: 79-94 地人書館 東京 233p.
論文
Toyokawa, M., K. Aoki, S. Yamada, A. Yasuda, M. Hamada and T. Kikuchi 2011 Blooms of jellyfish <i>Aurelia aurita</i> (Linnaeus, 1758) (<i>s.l.</i>) originate from the mouth-part of Mikawa Bay, Japan. <i>Journal of Oceanography</i> 76(2): 209-218
Aoki, K., S. Yamada, M. Toyokawa, A. Yasuda and T. Kikuchi 2011. Horizontal distribution and growth of moon jelly, <i>Aurelia aurita</i> (<i>sensu lato</i>), in Mikawa Bay, Japan. <i>Coastal Marine Science</i> 35(1): 103-111.
Sogawa, S., H. Sugisaki, H. Saito, Y. Okazaki, S. Shimode and T. Kikuchi 2012 Congruence between euphausiid community and water region in the northwestern Pacific: particularly in the Oyashio-Kuroshio Mixed Water Region. <i>Journal of Oceanography</i> 67: 209-218
Kok, S-P., T. Toda, T. Kikuchi and N. Kurosawa 2012. Diversity analysis of protistan micro plankton in Sagami Bay by 18S rRNA gene clone analysis using newly designed PCR primers. <i>Journal of Oceanography</i> 68 : 599-613
Kok S-P, Kikuchi T, Toda T, Kurosawa N 2012. Diversity and community dynamics of protistan microplankton in Sagami Bay revealed by 18S rRNA gene clone analysis. <i>Plankton Benthos Research</i> 7, 75-86.
荒井 誠・若林康太・菊池知彦・下出信次 2013 浮力制御方式バラストフリー船の洋上模型実験について 日本船舶工学会誌 (印刷中)
Mizui, R. and T. Kikuchi 2011 Arm damage and regeneration of <i>Tropiometra afra macrodiscus</i> (Echinodermata: Crinoidea) in Sagami Bay, central Japan. Proceedings of the thirteenth International Echinoderm Conference. (in Press)

Tsuchiya, K., T. Yoshiki, R. Nakajima, H. Miyaguchi, V. S. Kuwahara, S. Taguchi, T. Kikuchi and T. Toda Typhoon-driven variations in primary production and phytoplankton assemblages in Sagami Bay, Japan: A case study of typhoon Mawar (T0511). Plankton and Benthos Research, (印刷中).

[国・地方自治体・独立行政法人・公益法人・学会等における活動(役員、委員就任等)]

学会活動

日本海洋学会教育部会委員(2002～)

日本プランクトン学会評議員(2007～)

独立行政法人・公益法人・学会等における活動

(独)海洋研究開発機構(JAMSTEC) 海洋研究審査部会(2007～)

(独)海洋研究開発機構(JAMSTEC) 海洋研究計画調整部会(2007～)

(独)海洋研究開発機構(JAMSTEC) 実用化展開促進プログラム推進委員会委員(2007～)

(独)石油天然ガス・金属好物質資源機構(JOGMEC)共同研究テーマ選定評価委員会(2009～)

(独)石油天然ガス・金属好物質資源機構(JOGMEC)海洋環境基礎調査審査委員会(2009～)

他大学等における活動

東京大学大気海洋研究所研究船淡青丸代船建造計画ワーキンググループ(2010～)

東京大学大気海洋研究所研究船共同利用研究運営委員会研究船観測部会 第1号委員会委員(2010～)

[国際会議、国内重要会議等での基調講演、プレゼンテーション等]

国際学会

Sogawa, H., H. Sugisaki and T. Kikuchi 2012 Carbon and nitrogen isotope ratios of euphausiids in the northwestern Pacific. PICES (North Pacific Marine Science Organization) 2012 annual meeting. October 12–21 Oct. 2012 Hiroshima, Japan Abstract: 205

K. Tsuchiya, R. Nakajima, K. Hamasaki, Y. Tada, T. Kikuchi and T. Toda, 2012. Responses of phytoplankton and heterotrophic bacteria to a typhoon passage in a temperate coastal water. –ECSA 50 and Estuarine Coastal and Shelf Science (Venice, Italy), 3–7 June 2012, Abstract CD.

K. Tsuchiya, R. Nakajima, S.V. Kuwahara, K. Hamasaki, Y. Tada, A. Imai, T. Kikuchi and T. Toda, 2012. Fast response of bacteria to typhoon *Malou* passage in the coastal waters of Sagami Bay, Japan. –2012 ASLO Aquatic Sciences Meeting (Lake Biwa, Shiga, Japan), 8–13 July 2012, Abstract: 47.

Nozaki, S., V. S. Kuwahara, J. Nakano, S. Taguchi, T. Kikuchi and T. Toda. 2012. Time-series variability of ultraviolet radiation penetration in the temperate coastal waters of Sagami Bay, Japan. –2012 ASLO Aquatic Sciences Meeting, Lake Biwa, Shiga, Japan, 8–13 July 2012, Abstracts: 26.

Sugai, Y., K. Tsuchiya, R. Nakajima, T. Kikuchi, T. Toda, 2012. Potential Increase in Bacterial Production Induced by Terrestrial Runoff in Sagami Bay, Japan. –2012 ASLO Aquatic Sciences Meeting, Lake Biwa, Shiga, Japan, 8–13 July 2012, Session number: GS06

Nozaki, S., V. S. Kuwahara, J. Nakano, S. Taguchi, T. Kikuchi and T. Toda. 2012. Seasonal Variability of UVR Penetration and Bio-optical Factors during a 16 Year Time-series in the Coastal Waters of Japan. –Ocean Optics XXI Conference, Scotland, 8–12 October 2012, Abstracts: 118.

国内学会

V S. Kuwahara, V. S., T. Toda, T. Kikuchi, and S. Taguchi, 2011 15 Years of UVR Penetration Measurements in the Coastal Waters of Sagami Bay. 第45回日本水環境学会(北海道大学)、2011年3月

土屋健司・吉木朝子・菊池知彦・戸田龍樹, 2011. 台風通過を模した河川水混合実験における沿岸生態系・低次栄養段階の応答. –第45回日本水環境学会(北海道大学)、2011年3月

土屋健司・吉木朝子・中嶋亮太・宮口英夫・田口哲・菊池知彦・戸田龍樹, 2011. 台風通過に伴う沿岸生態系・低次栄養段階の応答: 河川水混合実験. –2011年度日本海洋学会春季大会(東京大学)、2011年3月

渡部 充・菊池知彦・大谷裕之 2011 真鶴沿岸海域堆積物中に存在する蛍光性人為的有機物質の探索 2011 年度日本海洋学会春季大会. 2011年3月. 千葉.

上野夢実・桑原 Victor 伸一・菊池知彦 2011 相模湾西部沿岸域における有色溶存態有機物の時空間特性 2011 年度日本海洋学会春季大会. 2011年3月. 千葉.

兒山和子, 上間美穂, 山本修一, 2012. 相模湾沿岸および河口の水中溶存態画分に含まれる人為起源有機物. –第30回日本有機地球化学シンポジウム講演要旨集, P-6

兒山和子, 上間美穂, 山本修一, 2012. 相模川水系の水中溶存態画分に含まれる人為起源有機物. 日本腐植物質学会第28回講演会講演要旨集, 59–60

[その他、特記事項]

該当なし

所 属： 環境情報研究院

教員名： 益永茂樹

〔著作、査読付き発表論文〕

Yasuyuki Zushi, Shigeki Masunaga: Identifying the nonpoint source of perfluorinated compounds using a geographic information system based approach, *Environmental Toxicology and Chemistry*, 28[4] 691-700 (2009)

頭士泰之, 益永茂樹: アジア諸国におけるPFCsリスクマネジメントの展望, *環境科学会誌* 22[3] 212-218 (2009年5月)

Yasuyuki Zushi, Shigeki Masunaga: First-flush loads of perfluorinated compounds in stormwater runoff from Hayabuchi River basin, Japan served by separated sewerage system, *Chemosphere* 76[6] 833-840 (2009.8)

Ying Zhang, Satoshi Nakai, Shigeki Masunaga: An exposure assessment of methyl mercury via fish consumption for the Japanese population, *Risk Analysis* 29[9] 1281-1289 (2009)

桑詩野, 吉田喜久雄, 益永茂樹: 年齢群別生物学的有効用量推定システムの構築と空气中芳香族炭化水素類への適用, *日本リスク研究学会誌* 19[3] 75-84 (2009)

Ying Zhang, Satoshi Nakai, Shigeki Masunaga: Simulated Impact of a Change in Fish Consumption on Intake of n-3 Polyunsaturated Fatty Acids, *Journal of Food Composition and Analysis* 22[7-8] 657-662 (2009.11/12)

井上知也, 益永茂樹, 大谷英雄: 臭素系難燃剤DecaBDEをめぐるリスクトレードオフ論争に関する考察, *日本リスク研究学会誌* 19[4] 21-31 (2009)

S. U. Park, J. G. Kim, S. Masunaga and K. S. Kim: Source Identification and Concentration Distribution of Polychlorinated Biphenyls in Environmental Media around Industrial Complexes, *Bulletin of Environmental Contamination and Toxicology* 83[6] 859-864 (2009)

小原裕三, 清家信康, 西森基貴, 益永茂樹, 細見正明: 日本全域におけるパッシブエアースAMPLING法による有機塩素系農薬類の広域同時モニタリング, *環境科学会誌* 23[1] 3-17 (2010)

Yasuyuki Zushi, Masafumi Tamada, Yutaka Kanai, Shigeki Masunaga: Time trends of perfluorinated compounds from the sediment core of Tokyo Bay, Japan (1950s-2004), *Environmental Pollution* 158[3] 756-763 (2010)

Md. Firoz Khan, Yuichiro Shirasuna, Koichiro Hirano, Shigeki Masunaga: Characterization of PM2.5, PM2.5-10 and PM> 10 in ambient air, Yokohama, Japan, *Atmospheric Research*, 96[1] 159-172 (April 2010)

Vasu Tiwari, Yoshimichi Hanai and Shigeki Masunaga: Ambient levels of volatile organic compounds in the vicinity of petrochemical industrial area of Yokohama, Japan, *Air Quality, Atmosphere & Health* 3[2] 65-73 (2010)

Md. Firoz Khan, Koichiro Hirano, Shigeki Masunaga: Quantifying the sources of hazardous elements of suspended particulate matter aerosol collected in Yokohama, Japan, *Atmospheric Environment* 44[21-22] 2646-2657 (2010)

Md. Firoz Khan, Yuichiro Shirasuna, Koichiro Hirano and Shigeki Masunaga: Urban and suburban aerosol in Yokohama, Japan: a comprehensive chemical characterization, *Environmental Monitoring and Assessment* 171[1-4] 441-456 (2010)

Yasuyuki Zushi and Shigeki Masunaga: Temporal Trend of Perfluorinated Compounds from Various Environmental Matrices, Chapter 3, 73-85, in *Global Contamination Trends of Persistent Organic Chemicals* edited by Bommanna G. Loganathan & Paul Kwan-Sing Lam, CRC Press (August 9th 2011) (著書: 分担)

Shigeki Masunaga: Historical Trends of Dioxin Sources and Contamination in Japan, Chapter 9, 203-214, in *Global Contamination Trends of Persistent Organic Chemicals* edited by Bommanna G. Loganathan & Paul Kwan-Sing Lam, CRC Press (August 9th 2011) (著書: 分担)

真名垣聡, 小谷健輔, 益永茂樹: 環境リスクから見た臭素系難燃剤とリン系難燃剤、難燃剤の最適処方と燃焼試験、第5章 押えておきたい難燃の規格と難燃の評価、第7節, pp. 541-558、技術情報協会 (2011.9.30) (著書: 分担)

松原望, 美添泰人, 岩崎学, 金明哲, 竹村和久, 林文, 山岡和枝 編: 統計応用の百科事典、丸善出版。益永茂樹: 環境リスク評価 p.620-621 (2011.10.31) (著書: 分担)

竹田翔, 細野繁雄, 益永茂樹: Positive Matrix Factorization法による河川底質中ダイオキシン類の汚染源解析, *環境化学* 21[1] 1-11 (2011)

Yasuyuki Zushi, Feng Ye, Mamoru Motegi, Kiyoshi Nojiri, Shigeo Hosono, Toshinari Suzuki, Yuki Kosugi, Kumiko Yaguchi, and Shigeki Masunaga: Spatially Detailed Survey on Pollution by Multiple Perfluorinated Compounds in the Tokyo Bay Basin of Japan, *Environmental Science & Technology* 45[7] 2887-2893 (2011)

内藤 航, 森 美和子, 岩崎 雄一, 加茂 将史, 益永 茂樹: 薄膜拡散勾配 (Diffusive Gradients in Thin-films: DGT) 法を用いた河川水における金属類の生物利用性の評価, *水環境学会誌* 34[4] 65-71 (2011)

M. A. Salam, Y. Shirasuna, K. Hirano, and Shigeki Masunaga: Particle associated polycyclic aromatic hydrocarbons in the atmospheric environment of urban and suburban residential area, International Journal of Environmental Science and Technology 8[2] 255-266 (2011)

Yasuyuki Zushi, Shigeki Masunaga: GIS-based source identification and apportionment of diffuse water pollution: Perfluorinated compound pollution in the Tokyo Bay basin, Chemosphere 85[8] 1340-1346 (2011)

Md. Firoz Khan, Koichiro Hirano, Shigeki Masunaga: Assessment of the sources of suspended particulate matter aerosol using US EPA PMF 3.0, Environmental Monitoring and Assessment, 184[2] 1063-1083 (2012)

Yasuyuki Zushi, Jonathan Nartey Hogarh, Shigeki Masunaga: Progress and perspective of perfluorinated compound risk assessment and management in various countries and institutes, Clean Technologies and Environmental Policy 14[1] 9-20 (2012)

Jonathan Nartey Hogarh, Nobuyasu Seike, Yuso Kobara, Ahsan Habib, Jae-Jak Nam, Jong-Sik Lee, Qilu Li, Xiang Liu, Jun Li, Gan Zhang, Shigeki Masunaga: Passive air monitoring of PCBs and PCNs across East Asia: A comprehensive congener evaluation for source characterization, Chemosphere 86[7] 718-726 (2012)

Jonathan N. Hogarh, Nobuyasu Seike, Yuso Kobara, and Shigeki Masunaga: Atmospheric Polychlorinated Naphthalenes in Ghana, Environ. Sci. Technol. 46[5] 2600-2606 (2012)

Satoshi Managaki, Iku Enomoto and Shigeki Masunaga: Sources and distribution of hexabromocyclododecanes (HBCDs) in Japanese river sediment, Journal of Environmental Monitoring 14[3] 901- 907 (2012)

Yasuyuki Zushi, Feng Ye, Mamoru Motegi, Kiyoshi Nojiri, Shigeo Hosono, Toshinari Suzuki, Yuki Kosugi, Kumiko Yaguchi, Shigeki Masunaga: Spatial distribution and loading amounts of particle sorbed and dissolved perfluorinated compounds in the basin of Tokyo Bay, Chemosphere 88[11] 1353-1357 (2012)

Kensuke Kotani, Shigeki Masunaga: Environmental impact assessment of chlorine in liquid crystal display glass (LCDG) based on material flow analysis, Journal of Environmental Management 112, 304-308 (2012)

桑詩野, 吉田喜久雄, 益永茂樹: 吸入した揮発性有機物質の年齢群別生物学的有効用量推定システムの検証とパラメータ推定方法の見直し-信頼性と使いやすさを目指して、日本リスク研究学会誌 22[2] 99-109 (2012)

〔国・地方自治体・独立行政法人・公益法人・学会等における活動（役員、委員就任等）〕

日本学術会議 連携会員 (2006年8月20日～2014年9月30日)

環境省 中央環境審議会専門委員会委員 [廃棄物・リサイクル部会所属専門委員、廃棄物処理基準等専門委員会専門委員] (2001年6月1日～)

神奈川県環境影響評価審査会委員 (2008年11月5日～2014年11月4日)

(環境省受託事業) エックス都市研究所 平成20・21年度 非意図的生成のPOPs排出抑制対策調査検討会委員 (環境省受託) (2008年10月～2009年3月、2009年10月～2010年3月、2010年8月～2011年3月、2011年9月～2012年3月、2012年9月～2013年3月)

神奈川県生活環境保全等対策検討委員会 副委員長 (2009年7月23日～2011年)

(環境省受託事業) (株)ニッテクリサーチ 臭素系ダイオキシン類の排出源情報の収集・整理に関する調査業務の検討会 委員 (2008年12月～2009年3月) (2009年7月～2010年3月) (2010年9月～2011年3月) (2011年12月～2012年3月) (2012年9月～2013年3月)

神奈川県環境科学センター研究推進委員会委員 (2009年4月1日～2013年3月31日)

東京都環境保健対策専門委員会 化学物質保健対策分科会委員 (2007年7月1日～2013年6月30日)

埼玉県 古綾瀬川底質対策検討委員会委員 (2004年4月26日～2012年3月31日)

独立行政法人新エネルギー・産業技術総合開発機構 NEDO技術委員 「有害化学物質代替等技術開発」採択審査委員会 (2010年4月28日～2012年3月31日)

東京都 隅田川橋りょう下部工事に伴う底質関連対策の学識経験者による検討 (2011年12月～2012年3月)

(環境省委託事業) エックス都市研究所 平成23年度POPs廃棄物国際的動向等調査検討会委員 (2011年12月～2012年3月30日)

(環境省請負調査) みずほ情報総研株式会社 難分解性・高濃縮性化学物質に係る鳥類毒性検討会委員 (2011年12月～2012年3月30日)

東京都北区環境審議会臨時委員 (2012年4月～専門部会終了まで)

(環境省請負調査) みずほ情報総研株式会社 平成24年度HBCDのリスク評価等検討会委員 (2013年2月～2013年3月)

〔国際会議、国内重要会議等での基調講演、プレゼンテーション等〕

Masunaga, S. "POPs and New Chemical Management Strategy in Japan" SETAC Asia/Pacific Joint Conference, The First International Conference on Environmental Pollution, Restoration and Management (Hotel Equatorial Ho Chi Minh City, March 3, 2010)

Shigeki Masunaga: Environmental risk minimization method based on lifecycle risk assessment and alternative assessment or persistent organic pollutant, such as HBCD, in products, ENFIRO 2nd Workshop (2012.11.8; Hotel Silken Berlaymont Brussels)

〔その他、特記事項〕

益永茂樹：(財)河川環境管理財団 平成24年度河川整備基金助成事業優秀成果表彰(平成23年度助成成果 調査・試験・研究部門)「地理情報システムを利用した広域水環境汚染の評価手法の開発ー東京湾流域におけるペルフルオロ化合物(PFC)汚染を事例としてー」に対して(2012年8月28日)

所 属： 環境情報

教員名： 松田裕之

〔著作、査読付き発表論文〕

(単著) Matsuda H (2012) Biodiversity and fisheries resource management in Satoumi. Global Environmental Research 16:181-187

Ohta U, Jusup M, Mano T, Tsuruga H, Matsuda H (2012) Adaptive management of the brown bear population in Hokkaido, Japan. Ecol Model 242:20-27

Iwasaki Y, Kagaya T, Miyamoto K, Matsuda H (2012) Responses of riverine macroinvertebrates to zinc in natural streams: implications for the water quality standard. Water, Air, & Soil Pollution. 223:145-158

Iwasaki Y, Kagaya T, Miyamoto K, Matsuda H, Sakakibara M (2011) Effect of Zinc on Diversity of Riverine Benthic Macroinvertebrates: Estimation of Safe Concentration from Field Data. Env Toxicol Chem 30:2237-2243

(単著) 松田裕之(2012) 海の保全生態学. 東京大学出版会.

加々美康彦・松田裕之・白山義久・桜井泰憲・古谷研・中原裕幸(2012) 海洋保全生態学. 講談社.

〔国・地方自治体・独立行政法人・公益法人・学会等における活動(役員、委員就任等)〕

日本生態学会 会長 (東アジア生態学会連合 会長)

日本水産学会 政策委員長

日本学術会議特任連携会員(環境学委員会・地球惑星科学委員会合同IGBP・WCRP・DIVERSITAS合同分科会)

海洋政策学会学術委員

防衛省普天間飛行場代替施設の建設事業に係る環境影響評価に関する有識者研究会委員

文科省 気候変動リスクマネージメント検討WG委員

〔国際会議、国内重要会議等での基調講演、プレゼンテーション等〕

Can we manage a rare disaster with a huge hazard? Lessons from the earthquake in Japan, 2011, The London Planet Under Pressure Conference, 27 March 2012, London, UK

Seafood Safety and Policy. Exploring the impacts of the Fukushima Dai-ichi Nuclear Power Plant Accidents on the Ocean, 14 November 2012, University of Tokyo, Hongo

Living harmony with nature: fisheries co-management in Shiretoko World Heritage, Pew Fellows in Marine Conservation Annual Meeting 2012, 9 December 2012, Panama2012, University of Tokyo, Hongo

Potential needs of marine-related data and information for the fishery resources management, Ship and Ocean Institute International Symposium "Unified information for integrated ocean management", 8 December 2011, Nippon Foundation Bldg.

Innovation for sustainable use of the sea of fertility, Techno Ocean 2012, 19 November 2012, Kobe

Workshop on fisheries management, modeling and biosphere reserve, Hormozgan University & CISSC, 28-30 October 2012, Bandar Abbas,

Fisheries co-management in Shiretoko World Heritage, 2012 International Conference of Marine Environmental Governance, 26 September 2012, Kaohsiung, Taiwan

〔その他、特記事項〕

日本生態学会賞(2012)

横浜国立大学優秀研究賞 2012

所 属： 横浜国立大学大学院環境情報研究院

教員名： 間嶋隆一

〔著作、査読付き発表論文〕

Kei Sato, Rei Nakashima, Ryuichi Majima, Hiromi Watanabe, Takenori Sasaki. In press, Shell microstructures of five Recent solemyids from Japan (Mollusca: Bivalvia: Protobranchia). Paleontological Research

宇都宮正志・間嶋隆一. 2012, 上総層群浦郷層と野島層（三浦半島北部：鮮新～更新統）の新化石産地から産出した貝化石による古水深の再検討. 化石, 91, 5-14.

KOZUE NISHIDA, REI NAKASHIMA, RYUICHI MAJIMA, YOSHINORI HIKIDA. 2012. Ontogenetic changes in shell microstructures in the cold seep-associated bivalve, *Conchocele bisecta* (Bivalvia: Thyasiridae). Paleontological Research, vol. 15, No. 4, 193-212.

〔国・地方自治体・独立行政法人・公益法人・学会等における活動（役員、委員就任等）〕

神奈川県文化財審議会委員 第4部会部会長

日本古生物学会会長

〔国際会議、国内重要会議等での基調講演、プレゼンテーション等〕

間嶋隆一, 新生代化学合成化石群集の研究から分かった事 —日本とフィリピンでの研究例— 日本古生物学会第162回例会シンポジウム（化学合成生態系の過去と現在をつなぐ）講演（2013年1月25日）

間嶋隆一, 三浦半島の地層から分かる過去の相模湾周辺の環境変動 日本古生物学会普及講演会（化石と現生生物から分かる相模湾の大規模環境変動：文部科学省研究成果公開促進費による）, 県民共済ホール（2013年1月27日）

〔その他、特記事項〕

2012年度日本古生物学会論文賞（対象論文：KOZUE NISHIDA, REI NAKASHIMA, RYUICHI MAJIMA, YOSHINORI HIKIDA. 2012. Ontogenetic changes in shell microstructures in the cold seep-associated bivalve, *Conchocele bisecta* (Bivalvia: Thyasiridae). Paleontological Research, vol. 15, No. 4, 193-212)

所 属： 横浜国立大学大学院環境情報研究院

教員名： 及川 敬貴

〔著作、査読付き発表論文〕

及川敬貴「自然保護後訴訟の動向—生態リスクの「法的な管理」の行方」環境法政策学会誌15号65—83頁（2012年）

及川敬貴「自然公園・生態系」高橋滋・大塚直編『震災・原発事故と環境法』169—201頁（民事法研究会、2012年）

Toshimori Takahashi, Hiroji Isozaki, Hiroki Oikawa et al. What and how effective have been the main responses to address changes in satoyama and satoumi? In SATOYAMA-SATOUMI ECOSYSTEMS AND HUMAN WELL-BEING: SOCIO-ECOLOGICAL PRODUCTION LANDSCAPES OF JAPAN (UNITED NATIONS UNIVERSITY PRESS, 2012) (共著)

及川敬貴「アメリカ環境法の動向—1990年代後半以降を中心に」新美育文・松村弓彦・大塚直編『環境法大系』1039—1061頁（商事法務研究会、2012年）（単著）

畠山武道・下井康史、及川敬貴ほか『はじめての行政法（第2版）』（三省堂、2012年）（共著）

及川敬貴「環境法 v. エコシステムマネジメント—動的な紛争管理間の相克」森章編『エコシステムマネジメント』240—262頁（共立出版、2012年）（単著）

〔国・地方自治体・独立行政法人・公益法人・学会等における活動（役員、委員就任等）〕

環境法政策学会 編集委員

〔国際会議、国内重要会議等での基調講演、プレゼンテーション等〕

国際学術大会「生物多様性保護のための各国の法と政策の動向及び課題」（2012年9月17日、江原大学校（韓国 江原道 春川市））招待講演（講演タイトル「生物多様性と法—日本の「環境法の静かな革命」の行方」）

〔その他、特記事項〕

該当なし

所 属： 環境情報研究院

教員名： 下出 信次

〔著作、査読付き発表論文〕

Baek, S.H., Shin, H.H., Choi, H.W., Shimode, S., Hwang, O.M., Shin, K., and Kim, Y.O. (2011). Ecological behavior of the dinoflagellate *Ceratium furca* in Jangmok harbor of Jinhae Bay, Korea. Journal of Plankton Research, Volume 33, Issue 12, p.1842-1846.

Shimode, S., Takahashi, K., Shimizu, Y., Nonomura, T. and Tsuda, T. (2012). Distribution and life history of the planktonic copepod, *Eucaulus californicus*, in the northwestern Pacific: Mechanisms for population maintenance within a high primary production area. Progress in Oceanography, Volume 96, Issue 1, p.1-13.

Shimode, S., Takahashi, K., Shimizu, Y., Nonomura, T. and Tsuda, T. (2012). Distribution and life history of the planktonic copepod, *Rhincalanus nasutus* and *Rhincalanus rostrifrons*, in the northwestern Pacific Ocean. Deep Sea Research I, Volume 65, p.133-145.

Sogawa, S., Sugisaki, H., Saito, H., Okazaki, Y., Shimode, S., and Kikuchi, T. (2013). Congruence between euphausiid community and water region in the northwestern Pacific: particularly in the Oyashio-Kuroshio Mixed Water Region. Journal of Oceanography, Volume 69, Issue 1, p. 71 - 85.

〔国・地方自治体・独立行政法人・公益法人・学会等における活動（役員、委員就任等）〕

該当無し

〔国際会議、国内重要会議等での基調講演、プレゼンテーション等〕

Tsuda A., Shimode, S. and Takahashi, K. (2011) *Neocalanus* vs. *Galanus* oceans. Comparative study on the life histories of *Neocalanus* and *Galanus* copepods, and their global distribution. 2nd ESSAS Open Science Meeting, (Seattle USA, May 2011).

Tsuda A., Shimode, S. and Takahashi, K. (2011) Comparative study of the life histories of Eucalanidae copepods in the subtropical and subarctic Pacific. 2nd ESSAS Open Science Meeting, (Seattle USA, May 2011).

下出信次・高橋一生・虎谷充浩・野々村卓美・津田敦 (2011). 浮遊性カイアシ類*Neocalanus*属と*Galanus*属の分布特性と生活史. 2011年度日本ベントス学会・日本プランクトン学会合同大会. 高知大学, 2011年9月.

平井惇也・下出信次・津田敦 (2011). ITS2-28S D1/D2領域による亜熱帯性カラヌス目カイアシ類の種同定. 2011年度日本ベントス学会・日本プランクトン学会合同大会. 高知大学, 2011年9月.

下出信次 (2011). 黒潮域の大型カイアシ類の大規模鉛直移動 - ユウカラヌス科の多様性と進化. 2011年度日本ベントス学会・日本プランクトン学会合同大会市民公開シンポジウム「黒潮流域の生物学：プランクトン・ベントス研究者からの新知見」. 高知大学, 2011年9月.

下出信次・高橋一生・津田敦 (2011). 亜熱帯太平洋におけるEucalanidae科カイアシ類の成長に伴う鉛直移動と生活史戦略. 東京大学大気海洋研究所共同利用研究集会「亜熱帯太平洋のプランクトン生態系および物質循環に関する比較海洋学」. 東京大学, 2011年10月.

平井惇也・下出信次・津田敦 (2011). ITS2-28S rDNA配列による亜熱帯性カラヌス目カイアシ類の種同定と展望. 東京大学大気海洋研究所共同利用研究集会「亜熱帯太平洋のプランクトン生態系および物質循環に関する比較海洋学」. 東京大学, 2011年10月.

津田敦・下出信次・高橋一生 (2012). 大型動物プランクトン生活史の南北差、その適応と物質循環における意義. 東京大学大気海洋研究所共同利用研究集会「海洋の生物地球化学・生態系の統合研究(IMBER)に関する最近の成果と今後の展望」. 東京大学, 2012年6月.

下出信次 (2012). まなづるの海の自然「真鶴半島周辺の海洋環境とプランクトン」. シンポジウム「海を学び、海に親しむ場づくり～まなづるの海、人、まち～」. 真鶴町「情報センター真鶴」, 2012年11月.

〔その他、特記事項〕

該当無し

所 属： 環境情報研究院

教員名： 准教授 村井基彦

〔著作、査読付き発表論文〕

M. Yamamoto, S. Uto, T. Fujiwara and M. Murai, "EXPERIMENTAL ANALYSIS OF THE EFFECTS OF THE INTERNAL FLOW ON THE DYNAMIC OF A U-SHAPED FLEXIBLE PIPE", OMAE2012(Rio), Proc. OMAE2012-83069, 2012.6

N. Mostafa, M. Murai, R. Nishimura and O. Fujita, "36. Experimental validation for motion of SPAR-type floating wind turbine at the severe condition with the effect of the gyro moment of the rotating blade of windmill", ISOPE2012(Greece), Proc. ISOPE2012, pp. 292-299, 2012.6

N. Mostafa, M. Murai, R. Nishimura, O. Fujita, Y. Nihei, "Experimental validation for motion of SPAR-type floating wind turbine at inclination with effect of gyro moment of the rotating blade of windmills", Journal of Naval Architecture and Marine Engineering, Vol.9, pp. 67-79, 2012.5

M. Yamamoto and M. Murai "33. A Study about the Dynamic Interaction between Submersed Hanging Tube and Internal Flow", 日本船舶海洋工学会論文集 Vol.13, pp.219-230, 2011

M. Yamamoto and M. Murai, "34. An Experimental Analysis of a Flexible Riser in Jumper Configuration", OMAE2011(Rotterdam), Proc. OMAE2011-49506, 2011.6

〔国際会議、国内重要会議等での基調講演、プレゼンテーション等〕

2012.11, 日本船舶海洋工学会(千葉), "浮体運動を考慮した係留索の非線形応答に関する研究", 日本船舶海洋工学会講演論文集Vol.15, pp.377-380, 野中啓司, 村井基彦, 長嶺篤志, Akmal bin Ahmed, 須山望

2012.11, 日本船舶海洋工学会(千葉), "波浪中での運動エネルギー最大化を目的とした浮体形状に関する研究", 日本船舶海洋工学会講演論文集Vol.15, pp.359-362, 岡田尚樹, 村井基彦

- 2012.9. 佐賀大学海洋エネルギー研究センター共同利用・共同研究成果発表会(佐賀), “浮体と振子の運動による圧電素子を用いた発電実験”, 岡田尚樹, 谷部祥一郎, 村井基彦
- 2012.8. 第23回海洋工学シンポジウム(東京), “U字型フレキシブルチューブにおける内部流影響に関する実験的研究”, OES-037, 羽田 絢, 藤原 智, 山本マルシオ, 宇都正太郎, 村井基彦
- 2012.8. 第23回海洋工学シンポジウム(東京), “圧電素子と振子と浮体を組み合わせた波力発電に関する基礎的研究”, OES-028, 谷部祥一郎, 岡田尚樹, 藤本大道, 村井基彦
- 2012.8. 第23回海洋工学シンポジウム(東京), “洋上風力発電施設の稼働率とメンテナンス効率に関する研究”, OES-032, 村井基彦, 西村龍二, 武井美樹
- 2012.8. 第23回海洋工学シンポジウム(東京), 浮体周辺設備の共有化を目的とした水中プラットフォームの波浪中応答に関する基礎的研究”, OES-027, 村井基彦, 宗像晋作
- 2012.7. 第32回防錆防食技術発表大会(東京), 特別講演, “海洋におけるエネルギーの現状”
- 2012.5. 日本船舶海洋工学会春季講演会(神戸), “内部流体と曲率を有するフレキシブルチューブの動的挙動に関する実験的研究”, Vol.14, 村井基彦, 羽田絢, 宇都正太郎, 藤原智
- 2012.4. SEA JAPAN 2012(東京), 10th Anniversaryセミナー, セミナー講師, “海洋再生可能エネルギーの潜在力と可能性 —エネルギーという海の恵みを引き出す”
- 2011.12. 平成23年度あさり勉強会(千葉), “海の公園におけるアサリの個体数予測に関する研究”, 寺 剛史, 村井基彦
- 2011.11. 日本船舶海洋工学会平成23年秋季講演会(東京), “海洋における再生可能エネルギーの現状”, 日本船舶海洋工学会講演論文集Vol.13, pp.131-134, 村井基彦, 高木 健
- 2011.8. 第22回海洋工学シンポジウム(東京), “圧電素子を利用した浮体式波力発電システムに関する基礎的研究”, OES22-103, 藤本大道, 村井基彦
- 2011.8. 第22回海洋工学シンポジウム(東京), “海洋再生可能エネルギーの地産地消によるCO2排出量削減に関する基礎的研究”, OES22-081, 村井基彦, 長嶺篤志, 高橋賢士朗
- 2011.8. 第22回海洋工学シンポジウム(東京), “錘の上下動による新形式横揺れ抑制システムの実用化—特に制御上の問題について—”, OES22-034 岡田尚樹, 柿添光治, 平川嘉昭, 高山武彦, 村井基彦, 平山次清
- 2011.8. 第22回海洋工学シンポジウム(東京), “An Experimental Study about the Effects of Internal Flow on the Dynamics of a Flexible Risers”, OES22-036, M. Yamamoto, M. Murai, S. Uto, T. Fujiwara,
- 2011.8. 第22回海洋工学シンポジウム(東京), “Triple Iによる評価事例—海上空港—”, OES22-060 村井基彦
- 2011.5. 日本船舶海洋工学会平成23年春季講演会(博多), “Lumped-Mass 法による大水深係留索の挙動に関する基礎的研究”, 日本船舶海洋工学会講演論文集Vol.12, pp.59-62, 村井基彦, 野中啓司
- 2012.9 “6th APhydro2012, ジョホールバル(マレーシア), A study on the Suitable Arrangement of the legs of a Semi-Submersible type offshore wind turbine in the sea around Japan”, pp. 60-63, M. Takei, M. Murai
- 2012.5. Oceans 2012(Yosu), “Experiments on floating wave-power generation using piezoelectric elements and pendulums in the water tank”, Naoki Okada, Shoichiro Yabe, Hironori Fujimoto, M. Murai
- 2011.10 EAWOMEN2011(千葉), “Possibility of Offshore Wind Power Stations in Japan Judging from III”, M. Murai and T. Aono
- 2011.10.千葉, EAWOMEN2011 “An experimental study on dynamic vibration behavior of a flexible tube in the water tank”, K. Haneda, M. Murai, M. Yamamoto, T. Fujiwara and S. Uto

所 属 : 国際社会科学研究所
教員名 : 荒木一郎
〔著作、査読付き発表論文〕
「多角的貿易体制は維持できるか : WTOの現状と課題 (経済・金融のグローバル・カヴァナンス)」 (単著) 国際問題 (601), 23-33, 2011-05
「投資協定仲裁判断例研究(27)投資仲裁における国内法の適用」 (単著) JCAジャーナル 58(8), 46-49, 2011-08
「投資協定仲裁判断例研究(37)課税処分に伴う保全措置が収用と認められた事例」 (単著) JCAジャーナル 59(7), 43-47, 2012-07
〔国・地方自治体・独立行政法人・公益法人・学会等における活動(役員、委員就任等)〕
日本国際経済法学会 理事
アジア国際法学会日本協会 理事・事務局長
〔国際会議、国内重要会議等での基調講演、プレゼンテーション等〕
アジア国際法学会北京大会(2011年8月)において国際投資法に関する発表
サウサンプトン海洋海事研究所(SMMI)開所式典(2011年3月)において、国際みなとまち大学リーグ(PUL)を代表して参

アジア国際法学会・豪州NZ国際法学会共催シンポジウム（シドニー・2012年10月）において分科会座長

〔その他、特記事項〕

該当なし

所 属： 国際社会科学研究科 法律系

教員名： 加藤 峰夫

〔著作、査読付き発表論文〕

「自然公園と震災」、『Law & Technology』（民事法研究会）54号、単著、p. 52～53、2011年12月。
『環境法体系』、商事法務、分担執筆（新見・松村・大塚 編）、担当部分「自然環境保全関連法の課題と展望」（p. 697～721）、2012年1月
『社会の発展と権利の創造 - 民法・環境法学の最前線』（淡路剛久先生古稀祝賀論文集）、有斐閣、分担執筆、担当部分、「地域制自然公園」の基本構造を前提とした発展の方向性（p. 783～811）、2012年3月。
「環境法入門・第18回・自然保護法制」北村喜宣 著（有斐閣「法学教室」No. 384(2012年9月号) p. 137～145、2012年9月）への協力（p. 140～141「環侃学講8」執筆、および自然公園制度&自然環境保全地域制度に関する情報提供等）。

〔国・地方自治体・独立行政法人・公益法人・学会等における活動（役員、委員就任等）〕

環境法政策学会 理事

(財) 尾瀬保護財団 評議員

(財) 尾瀬保護財団「至仏山保全対策会議」委員（座長）

(財) 国立公園協会 評議員

東京都 「緑のボランティア」研修会 講師

(社) 日本山岳会「世界自然遺産プロジェクト」アドバイザー

〔国際会議、国内重要会議等での基調講演、プレゼンテーション等〕

環境法政策学会 2011年大会 コメンテーター（自然保護関連）

環境法政策学会 2012年大会 報告者／パネリスト（震災対応関係シンポジウム）

日本地理学会 2012年大会 報告者／パネリスト（ジオパーク関係シンポジウム）

〔その他、特記事項〕

自然公園の保全（利用と保護） や 自然地域利用の「有料化」等を取り上げる TV・新聞・雑誌の番組および記事の作成・編集への協力（NHK、フジテレビ、読売新聞、毎日新聞、山と溪谷社）。

所 属： 工学研究院

教員名： 教授 荒井 誠

〔著作、査読付き発表論文〕

Report of Committee V.2, Natural Gas Storage and Transportation, Proceedings of 18th International Ship and Offshore Structures Congress, Volume 2, pp. 67-112, 2012. 共著

A Study on the Stability of Buoyancy-control Type Ballast-freeing Ship, Proceedings of the 26th Asian-Pacific Technical Exchange and Advisory Meeting on Marine Structure, TEAM 2012, pp.89-94, 2012. 共著

Study of alliance in maritime container shipping network, Proceedings of the 26th Asian-Pacific Technical Exchange and Advisory Meeting on Marine Structure, TEAM 2012, pp.41-46, 2012. 共著

Study of an anti-sloshing floating device for membrane-type LNG tanks, 11th International Marine Design Conference, Proceedings of IMDC 2012, 11th International Marine Design Conference, Vol.2 p.p. 554-565, 2012. 共著

船舶工学者の立場からのバラスト水問題のレビューおよび既存船レトロフィットを目指したバラストフリー船の提案、日本航海学会シンポジウム、p.p.21-28, 2011. 単著

A study on the improvement of seawater circulation performance in tanks of ballast-free ships, The 25th Asian-Pacific Technical Exchange and Advisory Meeting on Marine Structures, TEAM 2011, pp.225-232, 2011. 共著

Study on the optimization of the container transportation network in east asia considering GHG emissions, The 25th Asian-Pacific Technical Exchange and Advisory Meeting on Marine Structures, TEAM 2011, pp.91-97, 2011. 共著

A performance study of the buoyancy-control type ballast-free ship, 14th Congress of Intl. Maritime Assoc. of Mediterranean, IMAM 2011, Genoa, Italy, pp.461-468, 2011. 共著

Research on Computational Method of Coupled Ship Motions and Sloshing, Journal of the Japan Society of Naval Architects and Ocean Engineers, Vol.14, pp.97-104, 2011. 共著

浮力制御方式バラスト・フリー船のコンセプトとその基本性能について、日本船舶海洋工学会論文集、第13号、p.p.257-266, 2011. 共著

A Study on Coupling Effect between Seakeeping and Sloshing for Membrane-type LNG Carrier, International Journal of Offshore and Polar Engineering, Vol.21, No.2, p.p.1-8, 2011. 共著

Study on a Liner Shipping Network Design Considering Empty Container Reposition, Journal of the Society of Naval Architects and Ocean Engineers, Vol.13, p.p.175-182, 2011. 共著

〔国・地方自治体・独立行政法人・公益法人・学会等における活動（役員、委員就任等）〕

日本船舶海洋工学会理事、同代議員、同東部支部商議員、同論文査読委員、同研究企画委員会副委員長、同分野研究企画部会委員（設計・艤装分野）、同造船設計・生産技術研究会会長、同造船設計部会会長

船級協会ロイドレジスターアジアJapan Advisory Committee委員

ISSC（国際船体・海洋構造物会議）第V.2技術専門委員会委員長（天然ガスの貯蔵・輸送技術）

国際会議IMDC（国際海事設計会議）国際委員会委員、

国際会議TEAM（アジア太平洋船体構造会議）国際委員会委員、

国際会議IMAM（地中海国際海事学会）国際技術委員

国際学術雑誌Journal of Engineering for the Maritime Environment（Editorial board編集役員）

〔国際会議、国内重要会議等での基調講演、プレゼンテーション等〕

2012年3月、サザンプトン大学、FSI Invited Seminar Series（招待講演）、Proposal for ballast-freeing ship and studies of its performance.

2011年11月、上海交通大学、国際港町大学リーグ（講演）、Ships' Ballast Water Problem and a Proposal of an Innovative Solution.

〔その他、特記事項〕

発明名称：スロッシング防止装置及びスロッシング防止方法、出願日：2012年4月21日
国際出願番号:PCT/JP2012/060798

所 属： 大学院工学研究院システムの創生部門（工学府海洋宇宙システム工学コース）

教員名： 川村恭己

〔著作、査読付き発表論文〕

[1] Y. Kawamura, Y. Ohba, Y. Kaede, Lifecycle structural optimization of mid-ship of double hull tanker based on holistic risk evaluation, Proc. MARSTRUCT 2013, Espoo (Finland), Mar.25-27, 2013 (Accepted for publication)

[2] Myo Myo Htun, Yasumi Kawamura, Masataka Ajiki, A study on random field model for representation of corroded surface, Proc. MARSTRUCT 2013, Espoo (Finland), Mar.25-27, 2013 (Accepted for publication)

〔国・地方自治体・独立行政法人・公益法人・学会等における活動（役員、委員就任等）〕

[1] 日本船舶海洋工学会 代議員 H22.11～現在

[2] 日本船舶海洋工学会 英文論文集(JMST)編集委員会 編集委員 H22～現在

[3] ISSC（国際船舶海洋構造物会議）、第IV.1（設計原理と基準）委員会（委員）、H22.9～現在

[4] 東京海洋大学附属練習船汐路丸共同利用運営協議会学外委員, H24.5～H25.3

〔国際会議、国内重要会議等での基調講演、プレゼンテーション等〕

[1] 日本船舶海洋工学会、技術士補（船舶・海洋部門）取得のための講習会（講師）、材料・構造、日本船舶海洋工学会、2011/6/3, 2012/6/1

[2] 月井晋太、川村恭己、CO2排出削減を考慮したタンカーの輸送形態の最適化に関する研究、日本船舶海洋工学会講演論文集、第11号、2011年5月、pp399-402（CD-ROM）

[3] 川村恭己、大場義弘、楓侑馬、総合的リスク評価に基づいたダブルハルタンカー中央断面のライフサイクル構造最適化について、日本船舶海洋工学会講演論文集、第14号、2012年5月、pp161-164（CD-ROM）

[4] Myo Myo Htun, Yasumi Kawamura, Masataka Ajiki, Random Field Model for Representation of Corroded Surface, 日本船舶海洋工学会講演論文集、第14号、2012年5月、pp183-186（CD-ROM）

〔その他、特記事項〕
特になし
所 属： 工学研究院
教員名： 教授 鈴木和夫
〔著作、査読付き発表論文〕
A Ballast-Free Ship Concept to Protect the Global Marine Environment, 荒井 誠、鈴木和夫、岡本直也、鈴木慎哉、田中 優、Proceedings of the International Conference on Marine Science & Technology for Green Shipping, pp. 78-87, Glasgow, (平成21年6月) (2009)
Experimental and Numerical Study of the Performance of a Buoyancy Control-Type Ballast-Free Ship, 荒井 誠、鈴木和夫、Proceedings of International Symposium on Ship Design & Construction 2009 (ISSDC09)-Environment-Friendly Ship-, CDR, Tokyo, (平成21年9月) (2009)
Simulation of Free Surface Flow of High Speed Ship in Shallow or Restricted Water Condition, 鈴木和夫、甲斐 寿、平井基樹、Md. Shahjada Tarafder, Proceedings of the 10th International Conference on Fast Sea Transportation (FAST2009), Vol. 1, pp. 535-546, Athens, (平成21年10月) (2009)
Proposal for a Ballast-Free Ship and Studies of its Performance, 荒井 誠、鈴木和夫、岡本直也、鈴木慎哉、田中 優、Proceedings of 13th Congress of International Maritime Association of Mediterranean (IMAM2009), pp. 12-15, Istanbul, (平成21年10月) (2009)
浮力制御方式バラスト・フリー船のコンセプトとその基本性能について、荒井 誠、鈴木慎哉、鈴木和夫、田中 優、日本船舶海洋工学会論文集、第13号、pp. 257-266、(2011)
SFアニメで学ぶ船と海-深海から宇宙まで-、鈴木和夫、逢沢瑠菜(協力)、成山堂書店、全143ページ、(2011)
船舶海洋工学シリーズ② 船体抵抗と推進、鈴木和夫、佐々木紀幸、川村隆文、成山堂書店、全207ページ、(2012)
〔国・地方自治体・独立行政法人・公益法人・学会等における活動（役員、委員就任等）〕
(独)鉄道建設・運輸施設整備支援機構 高度船舶技術審査委員会 委員 日本船舶海洋工学会 推進性能研究会 会長 日本船舶海洋工学会 論文審査委員会 第6部門審査委員主査・査読委員 日本船舶海洋工学会 能力開発センター 大学教育等支援委員会 委員 日本船舶海洋工学会 基準教科書作成委員会 委員・WG2主査 日本船舶海洋工学会 分野研究企画部会性能・運動分野部会長
〔国際会議、国内重要会議等での基調講演、プレゼンテーション等〕
該当なし
〔その他、特記事項〕
該当なし
所 属： 工学研究院
教員名： 角 洋一
〔著作、査読付き発表論文〕
Sumi, Y and Inoue, T, Multi-scale modeling of fatigue crack propagation applied to random sequence of clustered loading, Marine Structures 24-2 (2011), pp. 117-131.
Muhammad Rabiul Islam and Sumi, Y, Geometrical effects of pitting corrosion on strength and deformability of steel rectangular plates subjected to uniaxial tension and pure bending, Journal of JASNAOE 14 (2011), pp. 9-17.
Ikhtiar Mahmud, S M and Sumi, Y, Thickness effects on fatigue strength of plates with semi-elliptical side notches and weld joints, Journal of JASNAOE 14 (2011), pp. 19-26.
Okawa, T, Shimanuki, H, Funatsu, Y, Nose, T and Sumi, Y, Effect of preload and stress ratio on fatigue strength of welded joints improved by ultrasonic impact treatment, Welding in the World (2012) DOI 10.1007/s40194-012-0018-y (in press)
〔国・地方自治体・独立行政法人・公益法人・学会等における活動（役員、委員就任等）〕
(公社) 日本船舶海洋工学会 名誉会員、2012/05 ~ 国土交通省 独立行政法人評価委員会委員、交通関係研究所分科会長 2007/03 ~ 2013/03 (一財) 日本海事協会 船体専門委員会委員長、20011/2 ~ 2013/2

(財) シップ・アンド・オーシャン財団 評議員、1999/10～ 2013/10 (一財) 日本船舶技術研究協会 評議員、20012/04 ～ 2014/03 Lloyd's Register, Advisory Committee 日本委員会委員、日本技術委員会委員長 2002/11 ～ 2014/11
〔国際会議、国内重要会議等での基調講演、プレゼンテーション等〕
Muhammad Rabiul Islam and Sumi, Y, Geometrical effects on strength and deformability of steel plates , presented at MARSTRUCT 2011, Hamburg, Germany, March 28-30, 2011. Sumi, Y, Recent problems of fatigue and fracture of marine structures under seaway loading, Special lecture presented at Naval Architecture and Ocean Engineering Seminar, Shanghai Jiao Tong University, August 14, 2012. Sumi, Y, Some problems of fatigue crack propagation in marine structures under seaway loading., Invited lecture presented at Crack Paths 2012, Gaeta, Italy, September 19-21, 2012.
〔その他、特記事項〕 (受賞、特許等)
該当なし
所 属： 工学研究院
教員名： 教授 日野 孝則
〔著作、査読付き発表論文〕
該当なし
〔国・地方自治体・独立行政法人・公益法人・学会等における活動（役員、委員就任等）〕
船舶海洋工学会論文査読委員 船舶海洋工学会「CFDによる船舶の省エネ性能評価研究委員会」委員長 日本船舶海洋工学会JTTC委員 International Towing Tank Conference, Specialist Committee on CFD in Marine Hydrodynamics 委員長 Journal of Marine Science and Technology, Deputy Editor
〔国際会議、国内重要会議等での基調講演、プレゼンテーション等〕
2012. 11、柏、平成23年度秋季日本船舶海洋工学会講演会、「水槽試験とCFDによる推進性能推定」、日野 2012. 11、柏、平成23年度秋季日本船舶海洋工学会講演会、「Surface Roughness Models for CFD Simulations」、Hino 2012. 12、東京、第26回数値流体力学シンポジウム、「Numerical Simulations of Free Surface Flows behind a Transom Stern of a Container Ship」、Nguyen Duy Trong and Takanori Hino, 2012. 12、東京、第26回数値流体力学シンポジウム、「不規則波中の円柱周り流れのシミュレーション」、大橋、日野 2012. 08、横浜、日本船舶海洋工学会平成23年度性能・運動分野「夏の学校」、「数値流体解析による性能評価-CFDを使いこなす-」、日野
〔その他、特記事項〕
該当なし
所 属： 工学研究院システムの創生部門
教員名： 西 佳樹
〔著作、査読付き発表論文〕
Y. Nishi, Static analysis of axially moving cables applied for mining nodules on the deep sea floor, Applied Ocean Research, 2012, 34, 45-51. 単著
Y. Nishi, K. Ono, K. Kokubun, Development of a renewable energy system utilizing vortex induced vibration of a cylinder and principle of leverage aiming for application in deep sea, Journal of Marine Science and Technology, 2012, DOI: 10.1007/s00773-012-0174-1. 共著
V. T. Nguyen, Y. Nishi, Numerical simulation of effect of tripping rod on increase in lift force acting on a cylinder using lattice Boltzmann method, Journal of Fluid Science and Technology, 2012, 7(3), 304-314, DOI: 10.1299/jfst.7.304. 共著
Y. Nishi, Q. Xie, Exergy analysis on solar heat collection of three-dimensional compound parabolic concentrator, International Journal of Exergy, in press. 共著
Y. Nishi, Power extraction from vortex-induced vibration of dual mass system, Journal of Sound and Vibration, 2013, 332(1), 199-212. 単著

<p>Y. Nishi, Determining the grounding length of an axially moving cable in a two-ship continuous line bucket system, <i>Applied Ocean Research</i>, 2013, 40, 42-49, 単著</p>
<p>〔国・地方自治体・独立行政法人・公益法人・学会等における活動（役員、委員就任等）〕</p>
<p>公益社団法人 日本船舶海洋工学会 海洋教育推進委員会 東部支部 委員</p>
<p>〔国際会議、国内重要会議等での基調講演、プレゼンテーション等〕</p>
<p>L. A. R. Quadrante, Y. Nishi, Effects of tripping rods on the flow around a circular cylinder focusing VIV amplification, <i>Proceedings of 6th International Conference on HydroElasticity in Marine Technology</i>, 19-21 September 2012, Tokyo, Japan, 399-405.</p>
<p>Y. Nishi, Y. Hirakawa, Closed form expressions for a vibrating system with two degree of freedom undergoing vortex induced vibration, <i>Proceedings of 6th International Conference on HydroElasticity in Marine Technology</i>, 19-21 September 2012, Tokyo, Japan, 429-437.</p>
<p>〔その他、特記事項〕</p>
<p>該当なし</p>
<p>所 属： 工学研究院</p>
<p>教員名： 勝地 弘</p>
<p>〔著作、査読付き発表論文〕</p>
<p>著書</p>
<p>[1] 風力発電設備支持物構造設計指針・同解説 [2010年版] (分担), 構造工学シリーズ20, 土木学会, 2011.1.</p>
<p>[2] 鋼斜張橋—技術とその変遷—2010年版 (分担), 鋼構造シリーズ20, 土木学会, 2011.2.</p>
<p>[3] 風を知り風と付き合う—耐風設計入門— (分担), JSSCテクニカルレポート, No. 94, 日本鋼構造協会, 2011.7.</p>
<p>[4] 風の事典 (分担), 丸善出版, 2011.12.</p>
<p>論文</p>
<p>[1] 田村洋, 佐々木栄一, 山田均, 勝地弘, 応力三軸度に着目した鋼製橋脚における地震時脆性破壊発生要因に関する解析的検討, 土木学会論文集A, Vol. 66, No. 3, pp. 420-434, 2010.</p>
<p>[2] 勝地弘, 山田均, 佐々木栄一, 青木康徳, 乱流部分相似法の橋桁断面への適用に関する研究, 構造工学論文集, Vol. 57A, 土木学会, pp. 629-636, 2011.</p>
<p>[3] 山田均, 勝地弘, 佐々木栄一, 伊藤真太郎: 塔高の低い斜張橋の耐風性に関する検討, 「フラッターの制御と利用」に関する第1回シンポジウム, 東京, pp. 7-10, 2011.9.</p>
<p>[4] Katsuchi, H., Full-scale Measurement of Wind and Bridge Response for Design Verification of Long-span Suspension Bridge, <i>Proc. of Research Seminar on Full-scale Monitoring for Wind Disaster Mitigation</i>, Kyoto, Japan, pp. 67-75, 2011.11.</p>
<p>[5] チェンデラ・ロナルド, 勝地弘, 山田均, 佐々木栄一, 橋桁周りの飛来塩分挙動推定に関する研究, 構造工学論文集, Vol. 58A, 土木学会, pp. 528-541, 2012.</p>
<p>[6] 田村洋, 佐々木栄一, 山田均, 勝地弘: 動的負荷の影響に着目した鋼製橋脚隅角部における地震時脆性破壊発生要因の検討, 土木学会論文集A1, Vol. 68, No. 2, pp. 226-241, 2012.</p>
<p>[7] Khurram, N., Sasaki, E., Kihira, H., Katsuchi, H. and Yamada, H., Analytical demonstrations to assess residual bearing capacities of steel plastic girder ends with stiffeners damaged by corrosion, <i>Structure and Infrastructure Engineering</i>, iFirst article, pp. 1-11, 2012.</p>
<p>[8] Chanpheng, T., Yamada, H., Katsuchi, H. and Sasaki, E., Nonlinear features for damage detection on large civil structures due to earthquakes, <i>Structural Health Monitoring</i>, 11(4), pp. 482-488, 2012.7.</p>
<p>[9] 勝地弘, 山田均, 西尾真由子, 金子聖哉: 六角形断面並列ケーブルのウェイク振動特性, 第22回風工学シンポジウム論文集, 日本風工学会, pp. 233-238, 2012.</p>
<p>[10] 石関圭太, 勝地弘, 山田均, 西尾真由子: 低塔斜張橋のガスト応答特性の検討, 第22回風工学シンポジウム論文集, 日本風工学会, pp. 263-268, 2012.</p>
<p>[11] 渡辺拓郎, 西尾真由子, 勝地弘, 山田均: 風応答データの非線形性抽出による長大橋モニタリング, 第22回風工学シンポジウム論文集, 日本風工学会, pp. 287-292, 2012.</p>
<p>〔国・地方自治体・独立行政法人・公益法人・学会等における活動（役員、委員就任等）〕</p>
<p>[1] 国土交通省横浜国道事務所総合評価審査分科会委員</p>
<p>[2] 国土交通省川崎国道事務所総合評価審査分科会委員</p>
<p>[3] 神奈川県県土整備部総合評価審査委員会委員</p>
<p>[4] (社) 土木学会, 上級・1級技術者資格委員会審査員</p>

- [5] 一般社団法人日本風工学会代表委員
- [6] 一般社団法人日本風工学会理事
- [7] (財) 沿岸技術研究センター, 川崎臨港道路東扇島水江町線技術検討会委員
- [8] (社) 土木学会, 洋上風力発電設備支持物構造設計小委員会副委員長
- [9] 藤沢市, 平成23年度「橋梁長寿命化修繕計画策定」検討会委員
- [10] (財) 神奈川県都市整備技術センター, 橋梁長寿命化修繕計画策定検討部会委員
- [11] 放送大学, 非常勤講師 (面接授業担当)
- [12] (社) 土木学会, 橋梁年報編集小委員会副委員長
- [13] (社) 土木学会, 橋梁年報編集小委員会委員長
- [14] 中井町, 橋梁長寿命化修繕計画策定のための学識経験者意見聴取
- [15] 本州四国連絡高速道路(株), 本四連絡橋耐風検討委員会委員
- [16] (財) 首都高速道路技術センター, 首都高速道路の橋梁に関する調査研究 (平成23年度) 委員会委員
- [17] 第22回風工学シンポジウム運営委員会委員
- [18] 神奈川県, 神奈川県優良工事等表彰制度見直し懇談会構成員
- [19] (財) 沿岸技術研究センター, 伏木富山港 (新湊地区) 臨港道路東西線技術検討会委員
- [20] (社) 日本道路協会, 橋梁総括構造小委員会 性能規定化WG幹事
- [21] 一般社団法人日本風工学会表彰委員会委員
- [22] 国土交通省東北地方整備局仙台河川国道事務所, 気仙沼湾横断橋技術検討委員会委員
- [23] (財) 日本電機工業会, 風力発電システムの設計要件等に関する国際標準化: タワー・基礎設計要件分科会委員
- [24] (社) 土木学会, 上級・1級技術者資格小委員会 (コースB) 幹事
- [25] 神奈川県内広域水道企業団, 総合評価審査委員会委員
- [26] 平成23年度関東地方整備局管内道路事業技術評価検討会 (357号お台場中央連絡橋工事) 委員
- [27] 平成24年度関東地方整備局管内道路事業技術評価検討会 (357号お台場中央連絡橋工事) 委員

〔国際会議、国内重要会議等での基調講演、プレゼンテーション等〕

- [1] Hiroshi TAMURA, Eiichi SASAKI, Hitoshi Yamada, Hiroshi Katsuchi: Strain rate-Temperature Effect Evaluation in the Fractured Steel Bridge Bent during Earthquakes, Proc. CSCE 2011 General Conference, GC-186, Ottawa, 2011.
- [2] Katsuchi, H. and Yamada, H., Study on turbulence partial simulation for wind-tunnel testing of bridge deck, Proc. of 13th International Conference on Wind Engineering (CD-ROM), Amsterdam, 2011.7
- [3] Nauman Khurram, Eiichi Sasaki, Hiroshi Katsuchi and Hitoshi Yamada, Finite Element Investigation of Ultimate Bearing Capacity of Locally Corroded End Panel of I-shaped Steel Plate Girder, The 11th Korea-Japan Joint Symposium on Steel Bridges, 2011.8.
- [4] Nguyen D. T., Yamada, H., Katsuchi, H. and Sasaki, E, Damage Detection of a Long-span Bridge by Wind-induced Response, Proc. of 35th International Symposium on Bridge and Structural Engineering (CD-ROM), No. 269, London, UK, 2011.9.
- [5] Khaing, S., Yamada, H., Katsuchi, H. and Sasaki, E, Effects of Cable Damping and Motion of Long Span Cable Stayed Bridge by Galerkin Method, Proc. of 35th International Symposium on Bridge and Structural Engineering (CD-ROM), No. 272, London, UK, 2011.9.
- [6] Katsuchi, H. and Yamada, H., Dry Galloping Characteristics of Indented Stay Cables in Turbulent Flow, Proc. of 9th International Symposium on Cable Dynamics (CD-ROM), Shanghai, China, 2011.10.
- [7] Tuan, L. A., Katsuchi, H. and Yamada, H., Evaluation of variable stiffness of wind turbine tower with consideration of flange joint separation, Proc. of EMI/PMC 2012, 2012 Joint Conference of the Engineering Mechanics Institute and the 11th ASCE Joint Specialty Conference on Probabilistic Mechanics and Structural Reliability (CD-ROM), Notre Dame, IN, 2012.6.
- [8] Katsuchi, H., Yamada, H. and Hasegawa, K., Analytical prediction of lateral-torsional buckling of long-span suspension bridge, Proc. of Bridge Maintenance, Safety, Management and Life-cycle Optimization (IABMAS), Stresa, Italy, pp.1108-1115, 2012.7.
- [9] Sangchuwong P., Yamada, H. and Katsuchi, H., Study on turbulence effects on flow patterns around rectangular cylinders, Proc. of The Seventh International Colloquium on Bluff Body Aerodynamics and Applications (BBAA7) (CD-ROM), Shanghai, China, 2012.9.

[10] Katsuchi, H., Yamada, H. and Hasegawa, K., Analytical study on lateral-torsional buckling of long-span suspension bridge, Proc. of The Seventh International Colloquium on Bluff Body Aerodynamics and Applications (BBAA7) (CD-ROM), Shanghai, China, 2012.9.

〔その他、特記事項〕

[1] (社)土木学会, 第57回構造工学シンポジウム 論文賞 (2011年4月) 勝地弘, 山田均, 佐々木栄一, 青木康徳, 乱流部分相似法の橋桁断面への適用に関する研究, 構造工学論文集, Vol.57A, 土木学会, pp.629-636, 2011.

[2] (社)日本鋼構造協会, 論文賞 (2012年11月) 田村洋, 佐々木栄一, 金成東, 山田均, 勝地弘, 「地震時に曲げを受ける溶接部の延性き裂発生に与える溶接部形状の影響と止端仕上げによる抑制」, 鋼構造論文集, 第17巻, 第68号, pp.55-68, 2010.

所 属: 都市イノベーション研究院

教員名: 佐々木 淳

〔著作、査読付き発表論文〕

[共著]「持続可能性とリスクマネジメント (jfUNUレクチャー・シリーズ6)」, 武内和彦・佐土原聡編, 国際書院, 2012.12 (分担執筆pp.39-53)

Laknath, D. P. C. and Sasaki, J. Assessment of the tsunami rehabilitated fishery harbours in Sri Lanka, J. Coastal Res., S164, 1245-1249, 2011.

Sasaki, J., Komatsu, Y., Matsumaru, R. and Wiyono, R. U. A. Unstructured model investigation of 2004 Indian Ocean Tsunami inundation in Banda Aceh, Indonesia, J. Coastal Res., S164, 941-945, 2011.

Laknath, D. P. C. and Sasaki, J. Wave climate study around Kirinda Fishery Harbour in Sri Lanka using SWAN Model, Proceedings of the 21st International Offshore and Polar Engineering Conference, 1059-1066, 2011.

The 2011 Tohoku earthquake tsunami joint survey group, nationwide field survey of the 2011 off the Pacific coast of Tohoku earthquake tsunami, Jorunal of JSCE, Ser. B2(Coastal Eng.), Vol. 67, No.1, 63-66, 2011.

佐々木 淳・D. P. C. Laknath・鈴木 崇之. スリランカ・キリンダ漁港における南西・北東モンスーンによる土砂堆積変動の把握. 土木学会論文集B3, Vol. 67, No. 2, 1141-1146, 2011.

佐々木 淳・中村元哉・鈴木崇之. 相模湖における発電放流を利用したアオコ抑制手法に関する検討. 土木学会論文集B2, Vol. 67, No. 2, 906-910, 2011.

石井光廣・古川恵太・佐々木 淳・柿野 純・増田修一・小森明裕・桃井幹夫・麻生晃也. 東京湾底層D0分布の短期予測システムの水産分野への活用に向けた実証的研究. 土木学会論文集B2, Vol. 67, No. 2, 1236-1240, 2011.

鈴木崇之・今西由希路・佐々木 淳・坂本光波. 浪音を用いた波高の推定. 土木学会論文集B2, Vol. 67, No. 2, 1346-1350, 2011.

Mori, N., Takahashi, T. and The 2011 Tohoku Earthquake Tsunami Joint Survey Group, Nationwide survey of the 2011 Tohoku earthquake tsunami, Coastal Engineering Journal, Vol.54, No. 1, 1250001, 27pp., 2012. (doi: 10.1142/S0578563412500015)

Sasaki, J., Ito, K., Suzuki, T., Wiyono, R.U.A., Oda, Y., Takayama, Y., Yokota, K., Furuta, A. and Takagi, H. Behavior of the 2011 Tohoku earthquake tsunami and resultant damage in Tokyo Bay. Coastal Engineering Journal, 54(1), 1250012, 26pp., 2012.

Wiyono, R.U.A. and Sasaki, J. Numerical analysis of the 2011 Tohoku tsunami in Tokyo Bay focusing on high water marks in ports. Proceedings of the 22nd International Offshore and Polar Engineering Conference, 8pp., 2012.

Attari, M.J. and Sasaki, J. Modeling of light intensity and phytoplankton dynamics in Tokyo Bay using monitoring dataset. Proceedings of the 22nd International Offshore and Polar Engineering Conference, 6pp., 2012.

Laknath, D. P. C. and Sasaki, J. Elucidation of seasonal sediment transport processes in Kirinda Fishery Harbour in Sri Lanka using XBeach Model. Proceedings of the 22nd International Offshore and Polar Engineering Conference, 8pp., 2012.

Attari, M. J. and Sasaki, J. Enhanced numerical model for material cycling and water quality in Tokyo Bay, Estuarine and Coastal Modeling, ASCE, 12, 239-255, 2012.

佐々木 淳・伊藤一教・鈴木崇之・Retno Utami Agung WIYONO・織田幸伸・高山百合子・羽角華奈子・古田敦史・高木泰士. 2011年東北津波の東京湾内での伝播特性と被害状況. 土木学会論文集B2, 68(2), I_261-I_265, 2012.

磯崎智史・鈴木崇之・佐々木 淳. バームの形成侵食に着目した短期海浜地形変化モデルの高精度化. 土木学会論文集B2, 68(2), I_536-I_540, 2012.

鈴木崇之・佐々木 淳・田島芳満・早野公敏. 2011年東北地方太平洋沖地震津波の岩手県南部における被災調査. 土木学会論文集B3, 68(2), I_25-I_30, 2012.

榎 正浩, 藤田健志, 島谷 学, 石原慎太郎, 鈴木高二朗, 佐々木 淳, 関本恒浩. 人工島建設プロジェクトの事例分析と評価. 土木学会論文集B3, 68(2), I_408-I_413, 2012.

島谷 学, 石原慎太郎, 榎 正浩, 藤田健志, 鈴木高二朗, 佐々木 淳, 関本恒浩. 機能と地域性に着目した人工島建設プロジェクトの提案. 土木学会論文集B3, 68(2), I_414-I_419, 2012.

伊藤義将・木村光俊・玉上和範・足立吉宏・吉原到・鈴木高二朗・佐々木 淳・関本恒浩. 閉鎖性海域における既往の環境改善プロジェクトの評価. 土木学会論文集B3, 68(2), I_420-I_425, 2012.

足立吉宏・吉原到・玉上和範・伊藤義将・木村光俊・鈴木高二朗・佐々木 淳・関本恒浩. 閉鎖性海域における実現性と有効性を踏まえた環境改善プロジェクトの提案. 土木学会論文集B3, 68(2), I_426-I_431, 2012.

Orton, T. G., Lark, R. M. and Sasaki, J. Using Geostatistics to analyze prediction errors from a simulation model of sediment particle sizes across Tokyo Bay. J. Coastal Res., 29(1), 141-156, 2013, <http://dx.doi.org/10.2112/JCOASTRES-D-12-00003.1>.

Lai, Z., Chen, C., Beardsley, R., Lin, H., Ji, R., Sasaki, J., and Lin, J.: Initial spread of 137Cs over the shelf of Japan: a study using the high-resolution global-coastal nesting ocean model, Biogeosciences Discuss., 10, 1929-1955, doi:10.5194/bgd-10-1929-2013, 2013.

鈴木崇之・細谷 拓・佐々木 淳. 波崎海岸における海岸環境音の時間率騒音レベル差を用いた波高の推定. 土木学会論文集B2, 69(1), 1-8, 2013.

〔国・地方自治体・独立行政法人・公益法人・学会等における活動（役員、委員就任等）〕

土木学会海岸工学委員会海岸工学論文集編集小委員会委員

土木学会海洋開発委員会海洋開発論文集査読小委員会委員

土木学会海洋開発委員会委員兼幹事

Local organizing committee member of Coastal Structures 2011

土木学会環境システム委員会論文審査小委員会委員

土木学会環境システム委員会委員

土木学会海岸工学委員会委員兼幹事

土木学会海岸工学委員会Coastal Engineering Journal 編集小委員会副小委員長

日本沿岸域学会企画運営委員会副委員長

wave港・海辺活動振興助成審査委員会委員（一般財団法人 みなと総合研究所）

専門調査員（文部科学省科学技術政策研究所科学技術動向研究センター）

水産生物の生活史に対応した広域的に連携する漁場環境形成手法検討委員会委員長（財団法人漁港漁場漁村技術研究所）

神奈川県港湾審議会会長代行・委員

国土交通省関東地方整備局事業評価監視委員会委員（国土交通省関東地方整備局）

Associate Editor-in-Chief, Coastal Engineering Journal, World Scientific

東京湾奥地区水底質環境改善効果評価検討委員会委員（国土交通省関東地方整備局千葉港湾事務所）

Foreign Scientific Committee Member, 10th Int. Conf. Coasts, Ports and Marine Structures

Steering Committee Member, 2nd Int. Conf. Port, Coastal and Offshore Eng.

計画段階配慮技術手法に関する検討会健康・生活環境等分科会委員（社団法人日本環境アセスメント協会）

計画段階配慮技術手法に関する検討会委員（社団法人日本環境アセスメント協会）

港湾分野の環境アセスメント技術検討委員会委員（国土交通省港湾局, みなと総合研究財団）

水産生物の生活史に対応した広域的に連携する漁場環境形成手法検討委員会東京湾ワーキンググループ主査（水産庁, 漁港漁場漁村技術研究所）

日本沿岸域学会企画運営委員会ホームページ改善小委員会主査

〔国際会議、国内重要会議等での基調講演、プレゼンテーション等〕

佐々木 淳. 津波の特性と津波による被害 「三陸地域」, 土木学会東日本大震災 震災調査速報会, 土木学会, 4月, 2011.

佐々木 淳. 関東沿岸における津波の実態と被害状況. 東北地方太平洋沖地震津波に関する合同調査報告会, 関西大学, 7月, 2011.

Sasaki, J. Coastal disasters and estuarine environmental processes in Tokyo Bay, 2nd Int. Conf. Ports, Coastal and Offshore Eng., Bandung, Indonesia, November, 2012. (基調講演)

Sasaki, J. Numerical modeling for assessment of coastal hazards and marine pollution in Tokyo Bay, 10th Int. Conf. Coasts, Ports and Marine Structures, Tehran, Iran, November, 2012. (基調講演)

Sasaki, J. The Japan March 11 Earthquake: Tsunami Inundation, and Initial Spread of Fukusjima Dai-ichi Radionuclides into the Pacific Ocean: Model Assessment, J-RAPID workshop, JST & NSF, Sendai, Japan, March 2013.

〔その他、特記事項〕

該当なし

所 属： 都市イノベーション研究院

教員名： 椿 龍哉

〔著作、査読付き発表論文〕

椿龍哉, 定月良倫, M. I. El-Desouky: コンクリート表面に付着した塩化物の表面水流による洗い流し, セメント・コンクリート論文集, No. 65, pp.384-391, 2011.

Saleem, M. and Tsubaki, T.: Two-layer model for pull-out behavior of post-installed anchor, J. of Japan Society of Civil Engineers, Ser.E2(Materials and Concrete Structures), V. 68, No.1, pp.49-62, 2012.

Saleem, M. and Tsubaki, T.: Two-layer simultaneous crack extension model for pull-out behavior of post-installed anchor, J. of Japan Society of Civil Engineers, Ser.E2(Materials and Concrete Structures), V. 68, No. 2, pp.106-120, 2012.

El-Desouky, M. I. and Tsubaki, T.: 2-D analysis of salt desorption mechanism at smooth concrete structure surface, Proc. of Japan Concrete Institute, Vol.34, pp.874-879, 2012.

〔国・地方自治体・独立行政法人・公益法人・学会等における活動（役員、委員就任等）〕

土木学会コンクリート委員会規準関連小委員会 委員 (2011, 2012)

日本コンクリート工学会規準委員会 委員 (2011, 2012)

プレレストレストコンクリート工学会規準委員会 委員 (2011, 2012)

〔国際会議、国内重要会議等での基調講演、プレゼンテーション等〕

El-Desouky, I., and Tsubaki, T: Numerical simulation of salt desorption mechanisms at concrete structure surface, JPCEA Conference, Hakodate, pp. 221-226, 2011.

Tsubaki, T.: Materials for improved durability of concrete structures, Proc. The 2nd International Symposium on Rural Roads 2012 and IRF Workshop on Roadside Safety & Work Zone Safety Applications, April 25-28, 2012, Bangkok, pp. A39-A43, 2012.

El-Desouky, M. I. and Tsubaki, T.: Durability improvement of concrete structures by washaway of chloride, Proc. The 8th International Symposium on Social Management Systems SSMS2012, Paper No. SMS12-0376, 2012.

Tsubaki, T.: Mechanical properties of anchor-infill assembly for strengthening of concrete structures, Proc. of Structural Faults and Repair, Edinburgh, CD-ROM, 2012.

Tarekegn, A. G. and Tsubaki, T.: Restoration design for RC slab bridges by AASHTO LRFD, JPCEA Conference, Ohtsu, pp.29-34, 2012.

〔その他、特記事項〕

該当なし

所 属： 都市イノベーション研究院

教員名： 鈴木崇之

〔著作、査読付き発表論文〕

鈴木崇之・細谷拓・佐々木淳, 波崎海岸における海岸環境音の時間率騒音レベル差を用いた波高の推定, 土木学会論文集B2 (海岸工学), Vol. 69, No. 1, pp. 1-8, 2013.

海岸工学委員会数値波動水槽研究小委員会, 数値波動水槽, 土木学会, 2012 (共著)

Y. Kuriyama M. Banno and T. Suzuki, Linkages among interannual variations of shoreline, wave and climate at Hasaki, Japan, Geophysical Research Letters, Vol. 39, L06604, doi:10.1029/2011GL050704, 2012.

Sasaki, J., Ito, K., Suzuki, T., Wiyono, R. U. A., Oda, Y., Takayama, Y., Yokota, K., Furuta, A. and Takagi, H., Behavior of the 2011 Tohoku earthquake tsunami and resultant damage in Tokyo bay, Coastal Engineering Journal, Vol. 54, No. 1, DOI:10.1142/S057856341250012X, 2012.

Mori, N., Takahashi, T. and The 2011 Tohoku Earthquake Tsunami Joint Survey Group, Nationwide survey of the 2011 Tohoku earthquake tsunami, Coastal Engineering Journal, Vol. 54, No. 1, pp.1-27, 2012. (doi: 10.1142/S0578563412500015)

鈴木崇之・佐々木淳・田島芳満・早野公敏, 2011年東北地方太平洋沖地震津波の岩手県南部における被災調査, 土木学会論文集B3 (海洋開発), Vol. 68, No. 2, pp. 1_25-1_30, 2012.

The 2011 Tohoku earthquake tsunami joint survey group, nationwide field survey of the 2011 off the Pacific coast of Tohoku earthquake tsunami, Journal of JSCE, Ser. B2(Coastal Eng.), Vol. 67, No.1, 63-66, 2011.

鈴木崇之・今西由希路・佐々木淳・坂本光, 波浪音を用いた波高の推定, 土木学会論文集B2 (海岸工学), Vol. 67, pp. 1346-1350, 2011.

栗山善昭・鈴木崇之・柳嶋慎一・鶴崎賢一・石野芳夫・坂本光, 粒径別の底質浮遊特性に関する現地観測, 土木学会論文集B2 (海岸工学), Vol. 67, pp. 476-480, 2011.

佐々木淳・中村元哉・鈴木崇之, 相模湖における発電放流を利用したアオコ抑制手法に関する検討, 土木学会論文集B2 (海岸工学), Vol. 67, pp. 906-910, 2011.

森信人・田中悠祐・間瀬肇・鈴木崇之・木原直人, 沿岸域における強風時の強鉛直混合についての数値計算, 土木学会論文集B2 (海岸工学), Vol. 67, pp. 321-325, 2011.

木原直人・中屋耕・坪野考樹・松山昌史・平口博丸・森信人・鈴木崇之・武藤裕則, うねりと発達中の風波が混在する湾内における大気・海洋間運動量輸送, 土木学会論文集B2 (海岸工学), Vol. 67, pp. 51-55, 2011.

鈴木崇之, 汀線位置変動に及ぼす周波数別波浪および前浜形状の影響, 土木学会論文集B3 (海洋開発), Vol. 27, pp. 1093-1098, 2011.

佐々木淳・Laknath, D. P. C.・鈴木崇之, スリランカ・キリンダ漁港における南西・北東モンスーンによる土砂堆積変動の把握, 土木学会論文集B3 (海洋開発), Vol. 27, pp. 1141-1146, 2011.

〔国・地方自治体・独立行政法人・公益法人・学会等における活動（役員、委員就任等）〕

日本海洋工学会理事

環境賞選考委員会幹事長（土木学会）

海洋開発委員会：幹事，津波小委員会委員長，論文査読小委員会委員（土木学会）

海岸工学委員会：論文編集小委員会委員，数値波動水槽小委員会WG-A, B委員（土木学会）

全国大会委員会プログラム編成会議第Ⅱ部門委員（土木学会）

土木技術者資格委員会委員（土木学会）

横須賀市上下水道運転管理業務評価委員会委員

The Open Ocean Engineering Journal編集委員

〔国際会議、国内重要会議等での基調講演、プレゼンテーション等〕

Suzuki, T. and Kuriyama, Y., Field observation of shoreline change by frequency-banded wave energy flux and foreshore shape, Proc. 33rd Int. Conf. Coastal Eng., Santander, poster, ASCE, July 2012.

Suzuki T., 2011 Tohoku Earthquake Tsunami Behavior and Damage, Lecture at Tsunami and Disaster mitigation Research Center, Syiah Kuala Univ., Banda Aceh, Indonesia, March 2012.

Suzuki T., 2011 Tohoku Earthquake Tsunami Behavior and Damage, Lecture at Insutitute Technology Bandung, Indonesia, Sep. 2011.

〔その他、特記事項〕

該当なし



《禁無断転載》

横浜国立大学統合的海洋教育・研究センター
(略称：横浜国大海センター)

2013 (平成 25) 年 3 月

〒240-8501 神奈川県保土ヶ谷区常盤台 79-5
Tel:045-339-3067 (海センター事務室)
e-mail address : kaiyo@ynu.ac.jp
URL : <http://www.cosie.ynu.ac.jp/>